神学的エッセイ

異邦人のための神学の勧め

２０２２年５月

佐々木正明

ここしばらく、と言っても、二〇年以上、使徒パウロの神学に不満が募り続けています。私の感覚では、聖霊の導きを得ている使徒パウロの神学は絶対で、イエス様の教えと同じように、間違いも欠点もないものだったのに、宣教師の働きを終えて帰国して間もなく、パウロの神学に納得がいかなくなってしまったのです。

誠に恐れ多いことですが、そのような長い不満の中で、私は、パウロも人の子、時代と環境の子だということに、やっと気づいたのです。聖霊も、時代と環境を超えたところで啓示を行われるのではなく、時代と環境の中で、人々の必要性に応じて、啓示をされたのだという、ごく単純なことが分かったのです。聖書の啓示は、何にもない空白の中で行われたのではなく、特定の条件の中で行われたのです。パウロへの啓示は、パウロの時代のユダヤ人の信仰と、異邦人の救いという神学的葛藤の狭間で、その実情と必要性に応じて、適切に行われたのです。したがって、その神学的葛藤の外側にいた人々、わたしたち日本人という、当時のユダヤ人とは直接的な関りも、接触も、ゆかりもなかった異邦人にとっては、なんとしても、かゆいところに手が届かない、もどかしいものなのです。つまり、足りないものなのです。

パウロは、救いはユダヤ人に対して与えられるものであるという、当時の一般的な考えを持っていた、初期のユダヤ人クリスチャンたちと、そのような精神的環境の中でも、クリスチャンとなった異邦人の信仰のために、聖霊の導きを得て、本来の信仰の在り方、正しい神学を確立しました。彼の神学は、徹底したパリサイ派の旧約聖書の理解と、神学を基盤にしていながら、そのパリサイ的な信仰の枠を破り、打ち砕くものでした。それがキリストを信じる信仰による救いでした。その救いにはユダヤ人と異邦人の差別はなく、みな同様に、キリストを信じる信仰によってのみ救われるのだと説き、救いはユダヤ人のものであるとか、ユダヤ人に優先的に与えられるという考え方を、徹底して退けたのです。そのことによってパウロは、ユダヤ教の範囲にとどまっていた、キリストの救いの枠を打ち破り、全人類に救いをもたらす、普遍的な福音の理解を確立したのです。それが、彼が異邦人への使徒と呼ばれる所以です。

それはそれでとても素晴らしく、絶対に必要なことでした。しかしパウロのアプローチは、決定的にユダヤ人として、ユダヤ民族の内側からの、普遍的福音の理解でした。それ

はあくまでも、当時、異邦人のクリスチャンたちが、増え続けていた事情に対処するもので、その後の異邦人クリスチャンの爆発的増加と、普遍的教会の在り方に向けての跳躍ではありましたが、私たちのようにユダヤ民族とははるか離れた、日本民族の救いに関してはまだまだ突っ込みの足りない、中途半端なものでした。私たちには、ユダヤ人の枠内からの考察や理論の構築ではなく、ユダヤ人の外側に立った考察と、理論の構築が必要なのです。ユダヤ人の枠を超えた、普遍的福音の神学というアプローチではなく、最初から全民族、全人類への福音という視点からの、普遍的救いの神学が必要なのです。

パウロが福音をのべ伝えた対象の人々は、そのほとんどが天地創造の神を絶対者と信じ、人間と深く関りを持っておられると理解し、自分たちの生き方に、強い関心を抱いておられる方であると知っていました。このお方が絶対に聖いお方であるために、自分たちもその聖さに与らなければならないと知っていました。そのためには旧約聖書が教える祭儀的な犠牲を奉げ、道徳律も守り通さなければならないと感じていました。

その彼らが必要としていたのは、イエスという人物が、確かに旧約聖書で予言されていた救い主であると信じ、その救い主に信頼するだけのことでした。しかもそのイエスは、彼らと同時代に生き、同じ土地に住み、同じ言葉を話し、同じ文化を持っていたのです。彼らと救い主の間には、隔たり、あるいはギャップと言うものがあまりなかったのです。その上、イエスというお方は、ご自分と一般大衆との隔たりを、できる限り埋めようと努力してくださったからです。イエスという人物が、あまりにも自分たちに近い存在であったために、かえって信じられないという現象さえ起こりました。

現代の日本人という異邦人とは、まったく状況が異なっていて、同じように、イエスをキリストと信ぜよと叫んでも、信じるために跳躍しなければならない知的距離、心理的距離、社会的距離、文化的距離などなどが、あまりにも隔たり過ぎているのです。日本人は天地の創造者という存在を知りません。絶対者とか、至聖の存在という感覚は、あるいは、神に似せて造られた人間の本能として、稀薄ながら持っているかもしれません。しかし、非常に曖昧模糊とした感覚にすぎません。農耕民族であったために、動物の犠牲にも馴染がありません。ユダヤ人の倫理観が、まず、神と自分との関係で考えられたのに比べて、日本人の倫理観は、あくまでも他人と自分との関りの中で形成されていました。

パウロが養育係と呼んだ律法、すなわち、旧約聖書を基盤にした贖い主の福音ではなく、キリストが語った、良い者にも悪い者にも雨を降らせ、太陽を昇らせる、おおらかで、恵み深く、優しい天の父の福音が、もっと頻繁に語られ、説かれ、勧められる宣教が必要とされています。養育係を与えられていない日本人に、養育係を与えられていた人に説く福音を語っても、理解してもらえず、聞き入れてもらえないのです。しかし、神に似せて造

られた霊的本性をまだまだ色濃く残している日本人は、キリストが語った天の父の話には、たとえ理解できなくても、心情的に、大いに納得できるのです。

要するに、パウロの宣教の対象者は、その大部分がキリストを信じる信仰への、「養育係」を与えられていた人々でした。すでに、キリストを信じる信仰の近くまで、非常に近くまで導かれていたのです。ところが、異邦人である日本人には、「養育係」が与えられておらず、キリストを信じる信仰に至るためには、大跳躍をしなければならないのです。日本人に福音を語ろうとすると、どこから手を付けたらよいのか、わからなくなってしまいます。数千年の時間をかけて、養育係を通して教えられてきたユダヤ人と、同じ経過をたどるように教えられるべきだとも考えられる一方、手っ取り早く、癒しだとか奇跡だとかで心を引き寄せるか、裁きや死というショッキングな主題を持ち出して、恐ろしさに震えさせるべきか、あるいは永遠の命や心の平安を持ち出して、魅力を感じさせるか、はたまた現代日本人の感覚に合う音楽や芸術のエンターテェイメントを提供して、ギャップを埋めるのが良いのか、多分それらすべてを尽くして、養育係が行ってきた働きを行わせようとするのです。パウロの神学では足りないのです。

とは言え、さすがにパウロは偉大な神学者でした。彼は、実際伝道の上では、完全な異邦人を相手にすることは稀だったために、私たちが必要としている異邦人の神学を発展させる必要性を、強くは感じられなかったのでしょう。しかしそれでも、異邦人と直接接触した少ない体験を背景に、異邦人伝道の基盤となるような神学的考察をし、それを記しています。その考察を深め発展させるのが、彼の後の教会に与えられた使命でしたが、創立されて僅か一〜二世紀で堕落しはじめた教会は、それに失敗したのです。そのために、異邦人宣教の多くが困難に遭遇してきたと思われますが、特に、現在の私たちが所属する日本の宣教は、非常な困難に遭遇させられています。

私たちが語る福音が、異邦人の立場から考察され、異邦人の感覚で理解された福音ではないために、異邦人である日本人の躓きになっているのです。この、あまり知られていない深刻な事実を、何とかして解決しなければなりません。ユダヤ民族の視点で語られ、西欧キリスト教の感覚と理解で積み上げられた神学は、日本人には不向きな理論で構築され、日本人には馴染のない社会形態の中で育てられた上に、日本人には不適切な伝えられ方をしているのです。

私たちは日本人です。異邦人です。たとえ日本人の中にはユダヤ人の血が流れていたとしても、日本人は異邦人であることに変わりありません。福音は福音として語られ、福音として受け取られなければ、福音ではありません。いま日本人に語られている福音は、日本人にとっては福音ではないことが多いのです。

このことを説明するには、非常に多くの時間をかけた議論が必要ですが、一例だけを挙げておきましょう。日本に伝えられた福音、特にプロテスタント系の人たちが語る福音は、非常に個人主義の傾向が強いものです。フランス革命を通って育った近代個人主義は、英国のカルビン主義神学に支えられた社会状況の中でさらに強くなり、ウエスレーのような大衆伝道の中でいよいよ強固なものとなりました。それが新大陸に於いて満開の花を咲かせたのです。ですから、日本に伝来したキリスト教は、非常に強い個人主義的信仰形態を持っていました。これが、「和をもって貴しと為す」という共同体の感覚を、昔から大切にして来た日本人には、受け入れ難いものだったことは、容易に理解できます。西欧的な個人主義は、だんだん西欧化していると言われる、現代の日本でもまだまだ理解されていません。今の日本の個人主義は、個人の勝手主義であって、疑似西欧個人主義にすぎません。

ですから、無意識の内に西欧個人主義を正しいものとして受け入れ、その上に立った人権を信じ、個人主義に立った社会を形成して、それが世界で最も優れた社会だと疑わない宣教師たちは、日本の共同体感覚を背景にした社会を、劣悪なものとみなし、日本にも西欧的な個人主義を持ち込み定着させようと、躍起になっているのです。そんなことには気づいていない宣教師も多いことでしょうが、気づかないまま、西欧個人主義の宣教を行おうとしているのです。私たちに必要なのは、西欧個人主義ではありません。もちろん日本の共同体主義でもありません。私たちは聖書が教える人間性と、地域共同体、あるいは共同体としての家庭、その基礎となる結婚などを理解した上で、福音を語るべきなのです。

西欧個人主義の弊害はいたるところにありますが、こと福音宣教に関わる問題としてとらえると、教会論の間違い、あるいは欠如があげられます。西欧の組織神学を学ぶと、教会論のお粗末さに唖然とします。救いはあくまでも一人の人間と神様との関係であり、この神と個人との間には何物をも差し挟んではいけないというのが、一般的な西欧諸国の宣教の理論です。個人の福音理解、個人の決断、個人の信仰が重視されるのです。しかしどこの文化でも、個人は家族という共同体、市町村などの地域共同体の中に生まれ、その共同体の一員として育ち、その共同体感覚から離れるのは至難の業です。たとえ信仰を持つ決心は最終的には個人の決心によるとしても、その決心に強く、また重い影響を与えるのが共同体です。それは個人主義の強い欧米でも言えることですが、特異なアジアの国である日本では、さらに重要なのです。欧米の宣教師の働きを見ると、その辺りのことが全く見えていないように思われます。そしてそれが教会の理解にまで及び、教会生活にまで及びます。

西欧の教会は、駅の待合室のようなものです。「私は天国行きの切符を手に入れました。

私の個人的信仰に対するご褒美です。あなたも同じですか。では天国までご一緒しようではありませんか。救われた喜びでも話し合いながら、天国行きの超特急が来るのを共に待ちましょう。」

有名な組織神学の書物を訪ねても、教会論には教会の組織や礼典などについて僅かに触れられているだけで、ほとんど取り上げるべきものがありません。もちろんこのような欠点は、ここしばらく、特に宣教論的に神学を見る人たちの間で大きな問題と認識され、それなりに改善が試みられていますが、まだまだ不充分です。

しかし聖書が教えるところは全く違います。新約聖書には教会論とその適用が満ちています。すべての信徒は、彼らの人種や文化の背景には関わりなく、一人の聖霊によって一つの体にバプタイズされ、一人の聖霊を飲むようにされています。こうしてすべての救われた者はキリストの体の肢体とされ、聖霊の内住と内充を得て、それぞれの肢体の役割を果たすのです。その肢体の役割は、体の頭であるキリストのみ思いにしたがって、この世に派遣された大使としての使命を遂行することなのです。（１コリント 12：12～15, Ⅱコリント５：18～20）神と自分との間には、何物をも挟んではならないという西欧人の感覚は、まったく間違っているのです。神と人との間にはキリストと聖霊がいらっしゃり、キリストの体と言われる教会があって初めて、聖霊の内住があるのです。本来教会を離れた、つまりキリストの体と関係の無い聖霊の内住はあり得ず、内充もあり得ないし、福音の宣教も存在しないのです。宣教は個々のクリスチャンに与えられた働きではなく、キリストのみ体という共同体の使命だからです。

具体的問題として、西欧型の教会の多くは教会ではないのです。それは宗教的集まりではあっても、聖書が教えるキリストの体とは程遠いものです。レストラン型教会、劇場型教会、スポーツクラブ型教会、同好会型教会といろいろありますが、要するに、天国行列車の待合室であって、聖書の教える聖霊によって一つとされ、聖霊によって神との親交を獲得し、キリストの大使として、その使命に生きるキリストの体ではないのです。

要するに西欧から来たキリスト教は西欧の宗教であり、聖書の教える宗教ではないと言えます。聖書がほとんど存在しない時代、聖書が読まれることはめったにない時代に、ギリシヤ哲学を骨子に造られたカトリック神学と、それに不満を抱いた人たちが不満の個所を改善したプロテスタント神学ですが、聖書の神学ではないのです。確かにプロテスタントは、教会の権威、あるいはローマ教皇の権威に対して聖書の権威を高揚しましたが、聖書の教えを正しく理解して広めたわけではありません。自分たちの不満、自分たちが納得できない点については聖書を調べ、いろいろと言い、また行動も起こしましたが、彼らも時代の子であり、文化の子だったのです。聖書を絶対の権威としたプロテスタント教会で

も、あくまでも自分たちの西欧人感覚で、西欧人の状況や必要に応じて聖書を理解し、西欧人に都合が良いようにそれらを構築し、それを世界中に広めようとしたのです。

今、私たちに必要なのは、聖書の教えに立つ教え、神学です。そしてその実践です。聖書の教えに立つと言っても、当然、私たち日本人が聖書を理解すると、日本人らしい理解に到達することになるのを、避けることはできません。それでも良いのです。他のアジアの国々からは、彼らの聖書理解から来る神学が興るでしょう。アフリカの国々からも興るでしょう。そうすれば、全体として、より良い理解に近づくことが出来ます。自分たちが異邦人であることを忘れて、パウロの神学に疑問を感じない西欧のキリスト教では、異邦の民、日本人の宣教はおぼつきません。必要なのは異邦人の神学です。

伝道者となってすでに五七年を超える筆者が、今、ひたすらに願うことは、日本のクリスチャンたち、とくに伝道者たちが、西欧キリスト教信仰ではなく、聖書の教える信仰を理解し、その信仰を語り伝えることが出来るようになることです。それは日本をキリスト教化する試みではなく、むしろキリスト教を日本化する努力です。それこそが、西欧キリスト教を放棄して、聖書の教えに戻る努力の一環です。そのきっかけを作るために、残りの生涯を奉げたいと願うものです。

異邦人のための神学　（１）

人間とは

神に造られた存在

人間は神によって造られました。（創世記 1：26～27）これが聖書の教える基本的人間像です。人間はその全存在を神に依存するものです。神が人間をお造りになった記述を読むと、人間は二つの要素から構成されていることが分かります。一つは生物学的な生き物、つまり動物として造られています。もう一つは神に似た霊的な存在として造られています。

動物として造られている

人間はその造られる過程がほかの動物たちとは異なって、まず、地の土によってかたどられ、そこに命の息が吹き込まれて、はじめて、神に似たものとして生きるようになっています。その意味でも、他のあらゆる生物、あるいは多くの動物とは異なった存在であり、地上に住むあらゆる生物を治める役を与えられ、それらの頂点に立つものとして造られました。

人間には動物としてのいのちがあって、多くの高等動物と同じように、母から生まれ、食べ、働き、生殖し、社会を形成し、そして死んでいきます。このうち死は人間の罪の結果として、後から加えられたものですが、他はすべて、頭初からの神の創造の設計図に入っていたものです。従って人間には動物的な本能が与えられています。おおよそ肉眼で認められるほどの動物には、強い、あるいは大きな本能がありますが、高等な動物になるほど、本能による行動の割合が少なくなり、経験や体験によって学習した能力を生かし、個々の自由な意思の決定、選択能力によって生きるようになっていきます。

最も高度に造られた人間には、他の多くの動物ほど、本能による行動は認められません。人間の行動の多くは後天的に学習した知識に基づく、選択による行動です。とはいえ、生まれたばかりの人間の行動のほとんどは、本能として与えられた能力による行動と言えます。本能として母親の乳房に吸い付き、本能として母親に信頼してその胸に眠るのです。この本能無くしては、どんな高等動物でも、生きて行くことはできません。

霊的な存在として造られている

人間は単に神に造られただけではなく、神に似せて造られた唯一の動物です。神に似ている人間の最大の特徴は、霊的な存在であることです。神は霊として存在しておられます。ですから人間は単なる動物ではなく、神に似せられて霊的な性質を与えられた動物であり、他に例を見ない存在です。人間はほかの動物たちと同じように血肉の体をもっていますが、あらゆる動物とは異なって霊的な命と性質を持っています。このために人間はたとえ肉体を離れても、霊的に生き続けられる特異な存在となっています。

また霊でおられる神に似せて造られた者として、霊的感覚を持ち、霊的なことを考え、霊的なことをある程度理解できる能力を持っています。これは動物的な本能に対して、霊的な本能と言えるものです。それで人間は、自然界をただ物質だけの世界とは見ないで、霊的世界と重なり合っていると感じ、そのような世界観で物事を見、また考えようとしています。どこの世界にも、どの民族にも、正しいか間違っているかは別にして、幽霊や悪霊、あるいは善良な霊や天使などへの感覚があるのも、まさにその本能的感覚があるためです。

神の存在を意識し、神を礼拝する動物

人間の霊的本能で最も大切なのは、人間が、造り主である神、霊的な存在である神を感じ、意識し、思い、礼拝する存在だということです。とはいえ、人間はあくまでも神に似せて造られたのであり、神と同じに造られたのではありません。そのために、人間の神理解、神知識は決定的に限られています。神はあらゆる意味で無限の存在ですが、人間は有限であり、その能力にも限りがあります。自分自身の事さえ充分には理解できず、自分の存在さえ説明することが出来ません。ましてや無限の存在であり、存在するすべてのものの造り主である神を、説明することはできません。それでいながら、人間は本能的に神を感じます。その力、知識、命、恵み、正義あるいは無限の豊かさなどを感じて、畏れ敬い礼拝しようとします。そして神は、人間のこの感覚を通して、ご自分の姿を現して下さいます。（ロマ１：18～20）

神と心を通わせることが出来る動物

人間はまた、神と語らい、交わること、すなわち心を通わせることが出来るように造られています。そしてその交わりの中にこそ、人間の本当の満足、納得、平安、喜び、充足を感じるように造られています。この交わりがなければ、人間はどのような環境に生きていても、どれほど動物的な欲求が満足させられても、決して心が満たされることはありません。どれ程満腹しても、いかに豊かになり、あらゆる分野で発達し、成長しても、それ

だけでは絶対に人間としての満足も、幸せも感じることはできないのです。いにしえの詩人のように、「空の空、空の空、すべては空である」と嘆くことになるのです。それが神に似せて造られたという意味です。

神の美しさを写し与えられている動物

また人間は、神の美しい性質に似た性質を、本能として与えられています。愛、聖さ、公平さ、誠実さと、それらから派生する多くの善良な性格を着せられているのです。天地を美しい調和の中にお造りになった、神に似せて造られた人間は、神に造られた美しい調和を楽しむ感覚を持ち、神が想像力と創造力とをもって全てのものを作られたように、人間も想像することができ、また創造することもできるのです。ここから人間の芸術性が生まれます。麗しい天然の美を見て育つ人間は、美術の感覚を育てられ、小川のせせらぎを聞き小鳥のさえずりを聴きながら成長する人間は、音楽の感覚を鋭くします。人間はまた、誰に教えられることがなくても、自然に、正しく美しい生き方をしようと願い、また努力をします。人間の本質は神に似た善だからです。

破壊された神の姿

ところが、神から与えられたこの美しい本質は、神への不服従の罪のために神の許から追放され、悪魔の支配に下ったことにより、不完全なものとなってしまいました。神に似せて造られた人間の美しい本質は、歪められ、壊され、すっかり醜くなってしまいました。人間は神に造られた本能的美しさと、この世と呼ばれる悪魔の支配の中で、罪の醜さを併せ持つものとなってしまったのです。それで人間はどんなに正しく生きようとしても、どこかで悪いことをしてしまい、どれほど極悪非道に生きようとしても、気づかないうちに人助けをしてしまうような、自分自身を治めきれない、なんとも情けない存在になってしまったのです。（筆者による「神の国」の神学を、是非入手してお読みください。アマゾンでも取り扱っています。）

完全な存在として造られた人間が、罪を犯したのは何故かという問題が、昔から人々を悩ませてきました。神がお望みになった人間は、完全な自由意思を持って、神を愛し、神に仕える存在でした。神を愛し仕えることしかできないのではなく、神に反逆し、神に敵対することさえできる自由意思が与えられていながら、神を愛し神に仕える道を選んでこそ、神に似た自由な存在としての、人間の完成があったのです。人間はこの創造の最後の段階で、神の御心に反してしまい、悪魔の支配する「この世」、あるいは「この代」に堕ちてしまったのです。キリストが多用し新約聖書もそれに従う、この世という言葉は、神がお造りになったこの世界という意味ではなく、悪魔が支配している次元という意味なの

です。この代とは、悪魔が支配している今の時代ということです。

神に似た美しい本能は消滅していない

神に似せて造られた人間の美しい本質は、たとえこの世に堕ち、悪魔の支配に下ったとしても、完全に破壊されたのでも、消滅してしまったのでもありません。人間の中の美しい性質は、罪のための追放を経験した後も、まだかなりしっかりと残っています。それは時代と文化と民族や国家を超えて、すべての人間の中に確かに残っているのです。だからこそ、人間は今まで完全に滅ぼされることなく、生かされてきたのです。たとえどれほど堕落し切った邪悪な民族や国家、あるいは個人の中にも、美しい神の性質の片鱗があるのです。だからこそ、罪意識も芽生えるのです。神に似た美しさを完全に失っていたならば、罪の意識もなくなっていたはずです。。

心に記された律法とその目的

この、造り主である神に似せて造られた人間の本性を、聖書は「心に記された律法」と呼んでいます。（ロマ 2：15～16） これは文字で書かれた律法、すなわち旧約聖書の律法（広い意味では新約聖書の教えをも含めて）に先行し、すべての人間に与えられたものです。人間が人間として生きることができるために、本能として組み込まれたものです。これは知的に成文化された教えではなく、本能に聞く教えです。

心に書き記された律法、人間が本能的に守ろうとする規律には、主に三つの面が考えられます。ひとつは創造主である神との関係です。霊的感覚を持って霊的存在である神を感じ、神との正しい関係を保とうとする本能です。次は人間同士に関わるもので、共に生きる、愛し合いながら、助け合いながら、生きようと願う本能です。もう一つは、その他の創造物に関わるもので、自然を正しく治めようとする感覚です。このエッセイでは、初めの二つについて考察します。

人間の中で争うふたつの性質

すべての人間は、造り主である神のみ心に沿った生き方をするように、本能としての心の律法を与えられています。ただ、罪の侵入によってそれが壊され、不完全なものとされてしまったのです。それで人間の中では、神から与えられた美しい本性と、罪を操って人間を支配しようとする醜い悪魔の性質が、互いに激しく争い、競い合って存在しているのです。神から与えられた美しい性質が勝つこともあります。罪を操る醜い悪魔の性質が勝利をおさめることもあります。人間の心は分裂し、完全に正しい人間も、完全に悪い人間

もいなくなりました。人間はどんなに正しく生きようとしても、どこかで罪を犯し、どれほど悪人に徹しようと決意しても、何かの拍子に正しいことをしてしまう、悲しい存在になってしまったのです。

すべての人は罪人

とは言え、この不完全さは、完全な聖さを本質としている、天地の創造者である神のみ前では、「罪あり」と判断されてしまうのです。ですから聖書が言うように、すべての人は罪人です。これは、すべての人が実際に罪を犯したために、罪人になったというのではありません。またすべての人が、悪魔の罪の性質に犯され、「原罪」を持つようになったというのでもありません。むしろ、人間が神から追放され、悪魔の軍門に降り、悪魔の支配を受けるようになったということです。それで、神からの霊的いのちの流れが途絶えてしまったために、神の御心に沿った生き方が出来なくなり、罪を犯さずには生きていけなくなったという意味です。今人間が生きている世界は、神が創造されたままの世界ではなく、悪魔の支配に組み込まれてしまった、「この世」「この代」としての世界なのです。すべての人が罪を犯すのは、罪の性質があたかも遺伝のように、アダムとエバから継承されてきたからではありません。そのような教えは聖書の中に見出すことが出来ません。それはむしろ、四世紀から五世紀の、聖書を自由に読むことが出来なかった神学者たちが、ギリシヤ的な思考によって発展させたものにすぎません。

「この世」と「この代」

キリストの教えによると、人間が生まれてくるこの世界は、人間が犯した罪のために一時的にではあっても、悪魔の支配する世界である「この世」となり、悪魔が支配する時代である「この代」になってしまいました。すべて、「この世」あるいは「この代」に生まれてきた者は、悪魔の支配の中に生まれ、神の御心に沿った生き方はできなくなっているために、すべての人は、実際に罪を犯す前から、罪の中に母の胎に宿り、罪の中に生まれた罪人なのです。

良心

心の律法とよく似たものに、「良心」があります。聖書もわずかながらですが、心の律法との関係の中で、それについて触れています。（ロマ２：16）　聖書の記述が余りにも僅かなので、ここではかなりの人間的な思考で、神学的に、つまり聖書の教えと調和するように、その関係を考えなければなりません。心の律法は、すべての人間に与えられた神に似た姿で、基本的に普遍的なもの、すなわちすべての人に共通なものです。一方良心は、

特定の条件、例えば文化、教育などの後天的環境の中で、心の律法が具体的に萌え出たものです。すなわち良心の現れは普遍的なものではなく、心の律法が環境に影響されて芽生えてきたものです。そのために、日本人の良心とアメリカ人の良心は異なり、キリスト教徒の良心は仏教徒の良心とは異なるのです。実のところ、すべての人の良心はそれぞれ異なっています。しかし良心として芽生える前の本源的性質、あるいは種とも言える、心の律法は同じものです。それは神に似せて造られた人間の本性です。

すべての良いことに心を留める

このように聖書を理解すると、パウロが、すべての善良なことに心を留めなさいと、教えた意味が分かります。（ピリピ 4：8、9）すべての良いもの、美しいものは造り主である神から出ているからです。たとえ、偶像教の教えであっても、反キリスト教的国家の教えであっても、無神論の教えであっても、それが美しいものであるならば、心に留めるのが私たちの態度なのです。それは神に似せて造られている人間の、本性から派生しているからです。

非キリスト教徒の中に良いものを認める

すべての人は罪人であるという聖書の教えから、キリスト教の教え以外はみな悪と決めつけたり、偶像文化の教えであると断罪したりするのは誤っています。偶像文化の臭気ふんぷんの中でも、パウロは「知られない神へ」という祭壇を見つけ、その祭壇を作る人間の中に見られるわずかの美点を引き出し、福音伝達のために利用して、偶像礼拝者たちとの接点を作ろうと努力しました。すべての人は罪人であると断罪するのも間違っていません。しかしその前に、すべての人間は、美しい創造者である神に似せて造られた、美しい存在であるという事実を大切にしましょう。

異邦人のための神学　（２）

ふたつの律法

神が与えてくださったふたつの律法

聖書は、神が与えてくださった、ふたつの律法について語っています。ひとつは（１）で少しばかり触れた「心に記された律法」です。あるいは「自分自身」という律法です。これは聖書の中にわずか一度ずつだけ出てくる言葉ですが、非常に大切な概念です。（ロマ２：12-15）ただ聖書自体がユダヤ人の立場と感覚で書かれているため、この全人類的な感覚の言及、ユダヤ人の枠を外れた言い方はまさに、例外なのです。

もうひとつは、聖書がいく度となくくり返して、普通に用いている律法です。これは狭い意味では、モーセを通して神がお語りになった戒めです。少し広い意味では、モーセによって書かれたと思われる五つの書、さらには旧約聖書全体を指しています。

心の律法

聖書を読んで神学的に考えると、この「心の律法」、あるいは「自分自身」とは、神の姿に似せて造られた人間の本来の姿、あるいは本源的姿とでも言うべきものであることが明白です。人間に与えられた神に似た姿こそが、人間が人間として生きるべき規範、原則とされているのです。これは人間が造られたときに与えられた律法であり、すべての人間に普遍的に、また最初に与えられているものです。すべての人間が、神に似た性質を持っているということです。「ユダヤ人・異邦人」という枠を超えた全人類的なものですが、旧約聖書自体が、ユダヤ人に向けて書かれたものであることから、これが中心主題として取り扱われることはなかったばかりか、ただの付随的問題として、たまたま語られているだけです。ところが、異邦人のための神学という視点で捉えると、まったく異なった重要性が明らかになるのです。

旧約聖書

聖書が「律法」という場合は、ごくわずかの例外を除いて、モーセの律法、あるいはそれを拡大して、旧約聖書全体を指して語っています。これは人間が罪の結果から救われるために、神が示してくださった救いの道について語るものです。ですから、人間が創造されてから、ずいぶん後になって与えられたものです。しかも、人間の救いの道を完成させるために、神が器としてお選びになったひとつの民族、すなわちイスラエルに対して与えられたものです。使徒パウロによると、キリストを信じる信仰にイスラエル民族を導く、「養育係」として神が特別にお与えになったのです。（ガラテヤ 3：24） ですから、旧約聖書の律法をイスラエル以外の人々に適用しようとするときは、まず旧約聖書が、直接的にはあくまでもイスラエルに対して語られているものであることを、確認しなければなりません。それから、イスラエルの文化と歴史の中でそれを正しく理解し、その上で、そこに記されている教えや戒めから、全人類に適用できる普遍的なものを探り出すのです。そうした後にはじめて、その普遍的要素を、イスラエル以外の人々や文化や歴史を正当に評価し、そこに適用するのです。このややこしい手続きをないがしろにしてしまうと、数千年も昔の中東の小国の律法を、文化的にも社会構造的にもまったく異なった現代の日本に、直接持ち込んで無理矢理に当てはめるという、とんでもなく大きな間違いに陥ります。

イスラエル民族の選び

神は人類の救いのために、イスラエル民族を選び出してくださいました。イスラエル民族だけに救いを与えるためではなく、イスラエル民族を通してすべての民族に救いを及ぼすためです。（創世記 12：3） そこでまず、イスラエル民族に救いの計画を示して、救いのための準備をさせ、救い主がその中に生まれるのにふさわしい民族になるように、そして救い主が現れたとき遅滞なく受け入れ、素直に信じることが出来るように、教え導かれたのです。そのための書物が旧約聖書であり、律法と呼ばれているものです。特にモーセを通して与えられた律法が、その中心をなすものでした。あらゆる偶像礼拝と道徳的腐敗に満ちていた、多くの民族に囲まれていたイスラエルに、正しい神理解と礼拝のしかたを示し、道徳的にも純真な民として育てるために、神は多くのことをしてくださいました。その中で最も重要なのが、文字で書かれた律法を与えて、それを守らせることだったのです。

背信のイスラエル

ところがイスラエル民族は、ともすれば、自分たちが神に選ばれた特別な民族であることを誇り、その立場と恵みに安住し、自分たちに与えられた使命を理解せず、神のみ心か

らは遠く離れ、廃頽した生き方をするようになって行きました。この背信と不従順の民族を教え、正しく導き、全人類の救いの道を整えるために、神は非常に苦労をされました。ご自分の、愛と恵みと憐みの優しい性質を隠し、峻厳な対応を取らずにはおれなかったのです。そのために旧約聖書に記されている神は、やたらに厳しい神、怒りの神、恐ろしい神であるかのように記されているわけです。

峻厳な神の姿

イスラエルを周囲の廃頽を極めた民族から切り離し、信仰的にも道徳的にも気高い民族として育て上げ、神の救いの御計画の遂行のために用いようと、神がなさったさまざまなことの中でも、ふたつのことが際立っています。現代人の感覚からすると、それらはあまりにも極端で受け入れられないようなものです。その第一は、宗教的な独自性です。ありとあらゆる宗教が乱立し、偶像礼拝が満ちていた当時の中東世界で、神はご自分を唯一絶対の存在として掲示なさったのです。そのために神は、モーセを通して「ありてある者」と自己紹介をし、「あらゆる神々よりも強力な存在で、イスラエルを助ける神」として現れてくださいました。その上で神は、創世記第一章の天地創造の物語を啓示し、「すべての存在物を存在させた源」、「天と地の創造者」としてのご自分を示し、他の神々とは本質的に異なった、異次元の、そして絶対の存在者であることをお教えになりました。その啓示を基盤にし、さらに出エジプトに関わる出来事を通して、イスラエルの人々はこのお方だけを礼拝し、このお方だけに従うことを要求されたのです。他のすべての神々は偶像であり、偽りの神々であることも教えられ、天地の創造者だけを礼拝することを教えられ、他の宗教、他の神々はすべて排斥されたのです。（出 20：1~6）

イスラエル民族の隔離

もう一つの峻厳な取り扱いは、イスラエル民族が、周囲の他の民族との交流をできるだけ避け、いわば民族的隔離政策を求められたことです。それは、第一に挙げた宗教的独自性、宗教的純潔を保つために採られた政策でした。イスラエルが、他民族と友好的な関係を築くこと自体は禁じられていませんが、盛んに偶像礼拝を行っていた周囲の民族との付き合は禁じられ、特に婚姻関係を結ぶことは固く禁じられていたのです。それは、深い関係を結ぶことによって他民族の宗教が入り込み、結果としてイスラエルの宗教的潔癖さ、天地の創造者だけを礼拝するという潔さが、汚されてしまう危険があったためです。そのような中でも、約束の地カナンの先住民族を、ことごとく滅ぼし尽くせという命令は、現代人の一般感覚からすると、あまりにも残忍であると思われますが、イスラエル民族を宗教的に潔癖なものとしようとされた神の思いが、それほど強かったということです。ただし、ジェノサイド的政策の実践においては、神はかなり忍耐と寛容をもって「見過ごして

おられた」（使徒 17：30）実例がそこここに見られます。しかしそれが度を超えて、偶像礼拝がはびこるようになったり、イスラエル民族の宗教的統一性が乱されたりするようになったりすると、神は厳しく対処せざるを得ませんでした。他民族の人間と結婚している者は、離婚を強要されることさえあったのです。イスラエル民族と他民族の抗争と戦争の歴史は、神がイスラエル民族を、宗教的にまた倫理的に高潔なものとして、守ろうとなさった歴史だったのです。その特殊性を無視して、父なる神は峻厳すぎるから、母なる神を想定すべきだなどと言う、日本の多くの知識人の主張は間違いですし、旧約聖書の命令と記述を盾に取り、神は戦争を認め大量殺人も容認していると言って、現代の世界で戦争を正当化する欧米のキリスト教も誤まっています。

神は救いの道を準備するために、イスラエル民族を、いわば特別扱いにして、文字で書かれた律法を与え、これを守るように厳しくお命じになりました。この文字で記された律法は、他の民族にまで適用されるべきものではありませんでした。他のすべての民族には、最初からもう一つの律法、「心に記された律法」が与えられていたのです。すなわち人間の本性として与えられた、神に似せて造られた特性、人間性が本能的に機能し、律法としての役割を果たすようにされていたのです。その本能的に機能する神に似た人間性は、当然イスラエル民族にも与えられていました。だからこそ、後になって与えられた文字で書かれた律法を理解し、それを守ろうとする気持ちも現れてきたのです。心の律法がなければ、文字で書かれた律法さえ機能しないのです。

本能的な宗教意識と道徳観

イスラエル以外の民族には、文字で書かれた律法は与えられていませんでした。しかし心に記された律法によって、本能的に、霊的な存在を認めてこれを礼拝したいと望み、宗教を作り上げてきました。もしもこの心の律法がなかったならば、たとえ文字で書かれた律法を与えられたイスラエル民族であっても、創造者なる神を認めることも崇めることもできないまま、馬や牛のような無宗教の存在で、終わっていたに違いありません。実際には、文字で書かれた律法が与えられていなかった民族の中にも、心の律法だけで、かなり明瞭な神意識を持ち、高尚な神礼拝を行い、道徳的にも気高い生活を送っていた人々もいたのです。ノアとその家族もそうでした。アブラハムが十分の一を納めたメルキセデクもそうでした。アブラハム自身がその一人でしたし、ヨブもその中のひとりと考えられます。文字で書かれた律法を与えられる前の、アブラハムの子孫の中にもたくさんいました。聖書を知らなかった日本人の中にも、そのような人たちがいたと考えても、まったくおかしくはありません。

機能していた心の律法

イスラエル民族以外の民族が、おしなべて宗教的にも道徳的にも廃頽していたのは事実です。とはいえ心の律法は、不完全であっても機能し続けていたのです。神は、イスラエル民族以外の民族に対して、この本能的な心の律法によって生きることを、求めておられました。だからこそ、彼らがこの心の律法をあまりにもないがしろにしたとき、神は厳しい態度で対処されたのです。ノアの洪水で滅ぼされた人々も、ソドムとゴモラの人々も、ヨナの滅びのメッセージで悔い改めた人々も、アッシリヤやエジプト、あるいはバビロンの人々も同じです。心の律法は人間の堕落によって壊され捻じ曲げられ、本来の姿を失ってしまったとは言え、その機能を完全に失ってしまったのではありません。かえって、かなり強く機能しているのです。そして神はその機能によって生きることを、すべての民族に期待し、要求しておられるのです。

人を救わない律法

ここで、正しく理解しておかなければならないことがあります。律法は、心に記された律法にしても、文字で書かれた律法にしても、人を救うことはないという事実です。心の律法で人が救われることはありません。これは救いを目的として与えられたものではなく、人が人として生きるために与えられたものだからです。文字で書かれた律法も、救いの道を整え救い主を指し示すために与えられたものであって、人を救う力は与えられていないのです。救いはあくまでも十字架に架かって死に、甦り、今も私たちと共に生きていて、私たちを救おうとしておられる、救い主によって与えられるのです。

異邦人のための神学　（３）

心に記された律法

神学的困難さ

心の律法、あるいは自分自身という律法について、神学的に語るのは易しいことではありません。聖書がそのことについてあまり触れていないからです。ふつう、聖書に一度もしくは二度程度しか触れられていないことについて、神学的な考察をすることは勧められません。大切なことならば、もっと多く語られているべきだと思われることと、少ない記述ではそれについて深く考察をするのが困難だからです。

ですから、例えばⅠペテロ 3：19 をとりあげて、キリストが黄泉に降られたとき、そこで死者に対して福音を語られたのだから、死後の救いの可能性があると断言するのは行き過ぎです。福音が語られたと理解するのにも、そこまで言い切るのにも、引用した部分がもっと明確な教えであることと、それを補強する他の聖書の記述が必要だからです。ましてや、人間には死んだ後にも救いのチャンスがあると論じるのは、聖書の他の言及と調和しないために無理であり、類推の域を出ないものです。

神学的考察の可能性

しかし、心に記された律法について考察するのは、不可能なことではありません。たとえ言及の回数は少なくても、心に記された律法については、聖書はたまたまその問題に触れたという程度ではなく、間違いなくそれを主題に取り上げ、かなり明確に語っているからです。そして、それが何であるかについて、あくまでも聖書的に考察することも可能だからです。さらには、聖書にはそれに呼応するような、しっかりとした記述があるからです。当然、そこには聖書に根差した理論的思考が求められます。すなわち、聖書全体の記述から逸脱せず、むしろそれに調和した論を、組み立てることが可能なのです。

心に記された律法の普遍性

心に記された律法は普遍的なものです。それは、堕落した人間の肉体的・精神的不完全さを考慮に入れると、すなわち心神喪失状態にある人などを考えると、ひとり残らずすべての個人が所持しているとまでは言えないかもしれませんが、すべての民族に与えられているということは可能です。すべての民族にはそれなりの倫理観があり、人々はそれぞれ道徳をわきまえているからです。そう考えると、これは人間が創造された時点で与えられたと考えるのが妥当です。

人間との不可分性

心に記された律法はまた、人間が人間として生きている限り、決して失うことがないものであると言えます。それは、自分自身が自分に対する律法であるという言い方によって、容易に推察できます。人間が自分を人間であると考えることが出来る限り、つまり、人間としての自己意識を持つ限り、その律法は人間に留まっているということです。この律法から人間を切り離すことはできません。

神が自己顕現をされる対象

ローマ人への手紙第一章には、神が人類全体に対して、弁解の余地がないほど明確に、ご自分を現しておられることが記されています。神は天地創造のとき以来ずっと、被造物を通して、ご自分の本性、すなわち永遠の力と神性を、明らかにされてきたと言われています。言い方を変えると、人間の本性は、たとえ罪による堕落の後であっても、この神の啓示あるいは自己顕現を、受け止め理解するだけの責任能力を持っていると、神が判断しておられるということです。それは神に似たものとして、神が付与された能力なのです。

人間の自己責任が問われる能力

人間に与えられた能力は、それによって人間の自己責任が問われるだけの、重いものでした。人間は被造物を通しての神の啓示を正しく理解して、少なくても偶像礼拝の愚かさを避けることが出来たはずなのです。しかし人間は思い上がって知性を暗くし、偶像礼拝に陥ってしまいました。それで神は人間を恥ずべき欲望のままに、汚れに引き渡してしまわれたのです。（ロマ１：18~32）

これがいつ起こった出来事なのか、聖書は明らかにしていませんが、アダムとエバの最

初の罪に続く、いわば第二の堕落とも言うべき大きなできごとです。聖書が全人類の偶像礼拝の罪について語っている唯一の記述です。人間が人間として生きるべき規範を否定してしまった、きわめて重大な問題なのです。

文字で書かれた律法が与えられる前の規律

モーセを通して文字で書かれた律法が与えられる前は、この心に記された律法が、すべての人間の生きる規範でした。またその心の律法こそが、神の語り掛けを聞き取ることができたものです。モーセ以前、神はもっぱら人間のこの規範に対して語りかけ、コミュニケーションを取っておられました。また、文字で書かれた律法が紛失されていた、たとえば士師の時代、イスラエルを治め導いたのは、この心に記された律法でした。士師記には、「めいめいが自分の目に正しいと見えることを行っていた」と、くり返して記されているとおりです。人間全体の生き方を定めるものとして、この心に記された律法は、文字で書かれた律法よりも重要だったのです。それはノアの洪水以前の人間社会を治め、バベル以前の人間社会を治め、アブラハム前後の族長時代の倫理や道徳を形成していました。明確に普遍的な律法として成文化されてはいなかったとしても、それは、族長たちの商取引や家族の倫理観にまで及んでいました。これがなかったならば、人間社会はまさに混沌の極みに陥っていたはずなのです。

心に記された律法と偶像礼拝

偶像礼拝が心に記された律法に反するものであることは、すでにローマ書一章の引用をもって説明したとおりです。ところでとても興味深いことに、聖書には異邦人、あるいはイスラエルが選ばれる前の人類が、偶像礼拝をしているということをもって、厳しく罰せられている例がありません。むしろ偶像礼拝は、人間の当然の行為のように記述されているのです。偶像礼拝は人間の心に与えられた律法に反する、重大な罪です。しかしそれはイスラエル民族に限ってだけ、文字で書かれた律法によって定められた禁止事項であって、イスラエル民族が発祥する前には、何の問題ともされていません。ここに偶像礼拝に対する神の寛容さを見るのです。人間は神から追放されて、神についての理解が希薄になっていました。神を正しく認識する知的また感覚的能力と、霊的存在者を認めてこれを礼拝したいという、神に似せて造られた人間の本能的欲求に対する、神のご理解と思いやりを感じるのです。偶像礼拝それ自体は、神の激しい怒りを呼び起こす罪であるけれど、それさえも神は深い懐と寛容をもって、見逃しておられるのです。（使徒 17：30）

人間の本源的宗教性と偶像礼拝

人間は神に似せて造られ、神との交わりを求めて已（や）まない存在です。ただ、堕落後の人間は神の許を追い出され、時代を経るごとに神についての記憶があいまいになり、神のことが分からなくなってしまいました。筆者の牧会する教会に、日系三世のアメリカ人男性が出席していました。血統からいえば、純粋な日本人の血が流れているのですが、一言の日本語も話せず、日本という国にも、日本の文化にも、日本の食事にもまったく興味を示さない、アメリカ人でした。わずか三代でこれほどまでになるのです。神の許を追放された人類は、瞬く間に、創造主である神を忘れてしまったのです。しかし、神との交わりを求めて已まない、人間の本源的性質は消失していませんでした。そのために、偶像礼拝へと廃頽して行くのも当然の流れだったのです。

希薄であっても残っていた本能的神感覚

モーセを通して文字で書かれた律法が与えられる前でさえ、心に記された律法によって、正しい神感覚を保っていた人たちもいました。主の御名によって祈り始めた人々が、そのうちに含まれるかどうかは、解釈の分かれるところですが、（創世記 4：26） エノクもノアとその家族もそうだったことでしょう。バベルの塔を築いた人々も、結果的に神の目に悪を行ったとは言え、ある程度神を理解していたのです。すでに触れたことですが、アブラハムの一族はかなりの理解を持っていたことでしょう。彼と付き合いがあった族長たちにも、ある程度の知識があったと見て間違いないでしょう。メルキセデクは多分例外的に、深い知識と敬虔さを持っていたことでしょう。ヨブとその友人たちも、かなりの理解を持っていたことでしょう。アブラハムの孫のヤコブはある種の宗教改革を行って、自分の一族の間から偶像を取り除いていますので、相当の神理解を持っていたに違いありません。その子ヨセフも、神との親しい交わりを持っていたことが知られています。モーセの親族もモーセ自身も、かなり正確な神意識と礼拝感覚をもっていました。

神の自己紹介・・・「あなたはどなたですか？」という問いに対して

モーセは神について相当の知識を持っていたはずです。しかし彼がイスラエルの解放のために任命を受けたとき、彼は任命して下さった神を、イスラエルの人々にどのように紹介したらよいのか、分かりませんでした。少なくても、アブラハムの神イサクの神ヤコブの神という、言い慣わされた呼び方は知っていたのですが、モーセとしては、もっと確かな紹介をしたかったのでしょう。そのモーセの問に対する神の答えは、「私はあるというものである」という、きわめて形而上学的に聞こえるものでした。多分これは、「すべての物に先立って存在するもの」、あるいは「すべての存在の源たる実体」、「何にも依存しないで存在する者」というほどの意味を持っていたと思われますが、本当の意味はもっと深淵だったに違いありません。ただ、聞く者の理解力が追いつかなかったようです。そこ

で神は、さらに分かり易く自己紹介をするために、ご自身が非常な力を持っておられる神であることを、様々な奇跡をもってまざまざと見せつけてくださいました。まず尻込みしているモーセ自身には、ライ病とも翻訳されていたことがある病気の奇跡をもって、励まし、勇気づけてくださいました。そして、エジプトの王や魔術師をいわゆるパワー・エンカウンタリングでやり込められました。エジプト脱出に当たって、また荒野の旅路で行われた奇跡の数々の多くは、当時、隣接していた諸民族が拝んでいた神々より、はるかに勝る力を持っておられることを、イスラエルの人々とエジプトの大衆に証明するために、行われたのだとも言われています。

神の自己紹介・・・天地創造の物語

聖書の冒頭に記されている天地創造の物語も、神がいかにして天地を創造されたかといういきさつを、科学的にまた時系列に記したものではありません。これは、神の自己紹介として読むべきです。そのように理解して読むと、実によくできた物語です。当時モーセの周囲にいた人々は、みな何らかの神の存在を信じ、それぞれの方法で神を敬い礼拝していました。ただその神認識ははなはだ低級で、多くは、当時周囲に見られた動物や天体の現象などを、擬人化したうえで神格化したものであり、偶像の域を出ませんでした。それに対し、神は天地創造の存在者、まったく時空を超えた神、異次元の存在者、どの神とも比較対象にならない絶対の神、超絶の神として、ご自分をお示しになったのです。

ところでこの天地創造の物語は、一体いつの頃に啓示されたのでしょう。十戒が与えられたとき、モーセがあまりにも長い間山に登ったまま帰ってこなかったために、イスラエルの民は金の子牛の像を作って、これを拝んでしまったという出来事がありました。こともあろうにアロンまでもこれに屈服しただけでなく、重要な役割さえ果たしたのです。この出来事を考察すると、天地創造の啓示はまだ与えられていなかったと考えられます。また十戒の書き出し部分を読んでも、当時のイスラエルは、自分たちの神を唯一の絶対的存在であるとは、理解していなかったことも分かります。従って天地創造の物語は、十戒が与えられた後に啓示されたと、推測して間違いないと思われます。

「神」という言葉

おそらく、ご自分を天地創造の神であると啓示された時、「神」という言葉の選択にも神の苦心があったことでしょう。何か知らないものを紹介する場合、知っているものを橋渡しとして用いる必要があります。それまで知られていなかった、絶対の存在者である神を紹介する場合、知られている「神」という言葉、少なくても、絶対の存在者を示唆することが出来る言葉を、用いなければなりませんでした。ところが当時知られていた礼拝の

対象者である神は、みな、それぞれ動植物や天体などの自然現象を指し示すもので、時空を超えた絶対の存在者を示す言葉としては、不適当なものばかりでした。それでやっと選び出されたのが、エローヒムという言葉だったのでしょう。エローヒムはエルという言葉の複数形でした。何故複数形が選ばれたのかについても、多くの学者たちがいろいろなことを言っていますが、今となってはその理由を断定するのは困難でしょう。あるいはエルという単数形の言葉が、絶対無限の存在者を表現するには、ふさわしくない点があったのかもしれません。神が人間をお造りになった時の記述が「我々」となっているのも、別に三位一体を示すものではなく、もともとの主語の神が複数形であったためだと理解されています。聖書の神は人間の数の概念さえ超越しているお方で、三位一体という言葉さえ、本当は不適当なのです。二とか三とかいう人間の数の概念を超えたお方だからです。

三千年以上も前の人々にお語りになった神

創世記の天地創造の物語は、神がどのようにして天地をお造りになったかということを、教えるために書かれたのではありません。真実の神の姿を忘れてしまった人間に対する、神の自己紹介として記されたものです。しかも、今から三千年以上も昔に生きていた人々に対する、自己紹介の物語です。物語形式で自己紹介をすることから始めて、現代の私たちに対する自己紹介とは、その方法や感覚においてまったく異なっています。これは三千数百年も昔、数百年間も奴隷の苦役に痛めつけられ、満足な教育も与えられず、ヘブル文化という特異な環境に生きていた人たちへの語り掛けであって、現代の私たちに対するものではありません。私たちはそのことを理解したうえで、この物語から学ばなければならないのです。この物語をもって神が伝えたかったのは、神がいかにして天地をお造りになったかでも、その経緯や順序についてでもありません。そのようなことは、近代的な天文学や考古学に興味も理解も持っていなかった、当時の人々には何の価値もなかったのです。神が伝えたかったのは、あくまでも当時の人々にとって最も重要であったこと、また、現代に生きる人々にも原則的な意味で、最も重要なことがらでした。それは人間が心を込めて礼拝し、敬い、慕い、交わりを持つべきお方は誰かということです。そのために、天地創造の物語のなかには、三葉虫もアンモナイトも恐竜も、筆者が高校生時代に愛着を込めてお呼びしていた、生物学の先生のあだ名、ピテカントロプスも出てこないのです。

ましてや現代の私たちが興味を持つ、天地の始まりや創造の過程には全く触れられていません。五十年前ならば、暗黒星雲だとか、ブラックホールだとか、ビッグバンという言葉が用いられたかもしれません。しかし今の時代に天地創造の物語が出来るだけ事実に沿って書かれるとしたら、当然、電子と陽子、物質と反物質、ブラックマターと、ニュートリノ、異次元などの言葉が、散りばめられるかもしれません。しかしそれでも、宇宙の誕生、天地創造の歴史的事実を語り尽くすことはできません。創世記の第一章は、今から三

千年以上も前の無学な人々の理解力に応じ、彼らの必要に対して語られたのです。

私たちが礼拝すべきお方

万物の霊長である人間が、心を込めて精神を込めて思いを込めて礼拝すべきお方は、万物を創造し、人間をご自分に似せてお造りになったお方です。天地創造の物語には、人間が礼拝すべきお方が明白に示され、なぜこの方を礼拝すべきなのか、この方以外ではいけないのかも、間違いようがないほど明らかに示されているのです。天地創造の物語は、物語形式で「真実」、すなわち人間の生きるべき姿を教えるもので、科学的事実を述べるものではなく、現代風な伝達方式でもありません。たとえば、神は六日間で天地万物の創造を終えて、七日目には休まれたので、人間もそれに倣って六日間働いて、七日目には休みを取って神を礼拝する日にするようにというのも、科学的事実を伝えようとしているのではなく、人間が生きるべき姿、すなわち「真実」を伝えるためのものです。

奴隷として、数百年にも及ぶ長い期間にわたって、強制労働をさせられていたイスラエルは、自由を得たとしても、自己管理をすることが出来ない民族になっていました。命令されるままに生きるだけだったために、責任をもって自分たちの生活設計を描き出し、決定し、実行することが出来なかったのです。そのために、まず彼らに単純な労働と休息の区割りを示し、秩序ある社会生活の土台を整え、神礼拝の基本を定める必要があったのです。創世記の天地創造の物語は、科学的事実を教えるものではなく、神の本当の姿をできるだけ明瞭に教え、人間として生きる基本的ありかた、人の道、すなわち真実を伝えるものだったのです。科学的事実として記すならば、イエス様も語っておられるように、神がお休みになることなどありえなかったのです。（ヨハネ 5：16、17）　神が七日目にはお休みになったという話は、科学的事実ではなかったのです。

神が人間に語り掛けられる前提

人間の創造以来、神はずっと人に語り掛けてこられました。それは、人間は神の語り掛けを受け止めることが出来る、理解することが出来るという前提があるからです。人間には神に似せて造られたという事実があり、霊的な事柄を知る能力があるためです。特異な例外として、ロバにも霊的な能力が与えられ、霊的な存在を察知したうえで、人間の言葉を語ったという聖書の記述がありますが、それはあくまでも不可能なことがない神の、時に応じた介入であって、通常の事ではありません。たとえアダムとエバの罪によって、基本的人間性に傷がつき、歪曲されてしまったとは言え、与えられた神に似た性質が、完全に失われてしまうことはなかったのです。神がそのように望まれ、現代の一般人に語り掛けようとされるならば、人間にはそれを感知し、理解出来る能力があるのです。人間は神

に似せて造られた性質を生かして、社会を形成し、秩序をもってそれを生かしてくることが出来ました。私たちはどのような文化や環境に在っても、そこに生きる人たちの中に、神の性質を見るべきなのです。

異邦人のための神学　（４）

天の父と心に記された律法

「天の父」

キリストの教えの際立った一面に、「天の父」があります。旧約の時代にも、神をイスラエル民族の父という概念で、理解しようとする試みがまったくなかったわけではありません。しかし異邦人をも含めて、一人一人の人間の理解し、「天の父」という表現を一般的にしたのは、キリストの教えでした。天の父という呼び方によってキリストは、当時の人々の間で普通に理解されていた、聖い正義の神、峻厳な裁きの神からは想像さえ困難だった、慈愛に富む神、恵み豊かな神、積極的に赦し、温かく受け入れてくださる神、血も涙もある神の姿を理解させてくださったのです。

「天の父」と表裏一体の「心の律法」

その父なる神の概念と表裏一体となっているのが、人間に与えられた神に似た姿、すなわち心に記された律法です。キリストは、放蕩息子の譬えでも分かる通り、優しい人間の父親の姿から、天の父のイメージを描き出すように、示唆しておられます。何が何でも律

法をまっとうさせる厳格な父ではなく、まず迎え入れて抱きしめる情け深い父、たとえ悪い人間であっても、自分の子どもには良いものを与えようとする父親の姿から、天の父なる神の優しい姿を、連想させようとしておられるのです。キリストは人間を動かしている心の律法に、神のみ姿の映しを見ておられたのです。

心の律法と大らかさ

キリストが強調されたのは、律法を厳守する四角四面の生活を要求なさる神ではなく、おおらかにご自分を信頼することを求めておられる神です。律法によって人間生活のあらゆる局面を厳しく制御する神ではなく、神の豊かな恵みと善意と力に頼り切って、まるで空の小鳥のように、明日のことを思い煩わないで生きることを望んでおられる、大きな心の神、懐の深い神です。律法に反する者を厳罰に処する神ではなく、良い者にも悪い者にも太陽を昇らせ、雨を降らせてくださる神です。罪を犯した者を無慈悲に律法どおりに罰する神ではなく、罪を犯した人間の育ちや環境、人間的弱さや欠点をくまなく理解し、心からの思いやりをもって目こぼしし、その人たちが改心して新しい人生を送るための、機会をお与えになろうとする神です。それは姦淫の場で捕えられて、キリストの前に引きずり出された女への、キリストのお取り扱い、金持ちの品行方正の青年に対するキリストの配慮などに、良く現されています。その他、ザアカイや取税人レビに対するキリストの対応など、枚挙にいとまがないほどです。

キリストの系図に載せられた四人の女性

キリストの先祖として系図に載せられている四人の女性たちは、みなそろって、性的な誤りに陥って、罪深い生活を送った者たちでした。聖く尊い救い主の先祖と呼ばれるには、あまりにも恥ずかしい存在でした。それにもかかわらず、あえて、キリストの先祖として記録されているのです。キリストが直接関わった人々の中にも、当時の律法を厳密に適用すれば、重い刑罰を免れることが出来ない人達がたくさんいました。キリストが力を込めてお教えになったのは、ユダヤ教に定められた律法に準じた品行方正な生き方ではなく、神に似せて造られた人間の性質、心の律法に則った生きかたでした。罪ある人間ですから、失敗もし、道も踏み外しますが、それでも誠実に、愛と憐みを持って生きようとする大らかな生き方です。罪の支配する世界に在っても、何とかして心の律法に従って生きようと励むことです。

隔てられた神

旧約聖書全体を通しての神のイメージ、特に律法を通して見えてくる神の姿は、罪を憎

み、火のように怒り、厳しく罰し、罪人を拒み、遠ざける神です。絶対に聖いために近づいてはならない神です。燃える柴の中に現れて下さった神、天幕と聖所と至聖所に隔てられ、たくさんの生贄と儀式と祭司の仲介を通さなければ、礼拝のために詣でることさえできない神、たとえとっさの善意の行為であっても、特別に選ばれた者以外の人間が、神の臨在を象徴する契約の箱に手出しをすれば、たちまち穢れた者として撃ち殺してしまわれる、恐ろしい神でした。罪ある人間と聖い神との間には、絶対に越えることが出来ない、隔ての壁があったのです。罪を犯したアダムとエバが、神に近づくことが出来ないように、ケルビムと、輪を描いて回る炎の剣を置かれた神です。

誰でも近づける神

ところがキリストが紹介して下さった天の父は、そのような隔ての壁を一切感じさせない、誰でも近づくことが出来る神でした。重荷を負っている者ならば、老若男女、貧富、教育のあるなし、国籍、人種の枠を超えて、たとえ誰であっても自分の許に来るように、おおらかにお招きになる神です。当時、最も汚らわしい罪人と思われていた税金取りも、遊女という反社会的人間も、ローマの傀儡に成り下がったサドカイ派の人々も、自己義と欺瞞に満ちていたパリサイ派の人々も、ローマに反旗をひるがえそうと隙を伺っていた熱心党の人々も、穢れの象徴でもあった長血を一二年間も患っていた婦人も、望みさえするならば誰でも近寄ることが出来る神でした。

隔ての壁を取り除いて下さる神

キリストが隔ての壁のない神、誰でも恐れなく近づける神を語ることが出来たのは、当時、キリストだけが知っておられた、奥深い真理があったからです。それは神ご自身が、ご自分の側から働きかけ、遂行しようとしておられた、神の独り子の身代りの死による救い、贖いの働きがあったからです。キリストはその働きの遂行へ向かって歩み続けておられたからです。罪のないキリストを、罪ある人間の身代りに十字架で殺すことによって、神は罪人を「罪の刑罰を受けて死んだ者」と見做すことにされたのです。キリストの処刑を「法廷裁判的に」代償の死として受け入れ、人間がその罪のために罰せられたものと判断されたのです。その大切な神の贖いの働きについては、当時、キリスト以外は、否、父と子と御霊以外は、まだ誰も理解していませんでした。ただキリストは、ご自分の死が、聖い神と罪人との隔ての壁を、取り除くことをご存知でした。人間はすべて、キリストの身代りの死によって死んだ者と判断され、キリストの血潮によって罪がことごとく清められた者とみなされて、聖い神に近付くことが出来るようになると、知っておられたのです。神と人間の隔離の象徴である、神殿の幕が真っ二つに切り落とされることを、予め知っておられたのです。

キリストの十字架の上での贖いの働きは、どのような小さな罪をも見逃さず、厳しく罰せずにはおられない聖く厳格な神と、どれほど大きな罪を犯した者でも哀れみ、たとえどれほど大きな犠牲を払うことになったとしても、救わずにはおれない愛と寛容の神の、折り合えない折り合いがもたらしたものです。

時間を超越しておられる神

そのとき、キリストの死はまだ先の出来事でした。しかし先とか後とか言うのは、現世に閉じ込められている、人間の感覚に過ぎません。時間を超越しておられる神にとって、キリストが罪人の身代りとなって死ぬということは、歴史が始まる前から決められていたことです。キリストの贖いのお働きの効果は、贖いの働きが終わってから発揮したのではなく、まだ始まる前から発揮されていたのです。ですから、神を信頼するならばその信頼のゆえに救われるという、いわゆる信仰による救いの原則は、パウロが啓示によって説明したよりもずっと早く、キリストよりも何千年も前に生きていた、アブラハムや、彼以前の人々にも人種を超え文化を超え、すでに適用されていたのです。

自分の知識によってではなく、信頼によって救われる人間

だからこそ、キリストは誰でも赦し受け入れる神、異邦人でさえ迎え入れる神を描き出すことができたのです。これはまた、救いは救われる人の救いについての知識、あるいは救い主についての知識に関わりなく、救いを準備され完成されたお方の、知識に関わっているということを示しています。キリストについては何一つ知らなかったアブラハムも、キリストの贖いのゆえに救われているのです。救われる人の責任はキリストを知り、その贖いの働きを理解することではありません。もしもそうだとしたならば、それは人間の学び、理解、知るという行為、功績による救いになってしまいます。ただ、神を信頼すれば良いのです。信頼すれば、この贖いを計画し、完遂し、すべてをご存知である神は、その知識のゆえに、キリストの贖いの働きの効力をその人に適用して、救いを完成してくださるのです。人間に求められるのは、厳密な神学的知識でも聖書知識でもなく、無限の存在者、天地の創造者に対するおおらかな信頼なのです。それを可能にするのは心に記されている律法です。

異邦人のための神学　（５）

文字で書かれた律法

誰に与えられたか

人間が人間として生きるべき道を、理屈や理論や学問、あるいは思想や哲学ではなく、本能的に選ぶことが出来るために与えられたのが、「心に記された律法」です。したがってこれは、すべての人間に与えられたもので、神に似せて造られたという事実に起因します。神に似た人間の本性、人間性そのものが、人間の生活を支配し、導き、制御する規律として、誰に教わらなくても自然に機能するということです。それに対して「文字で書かれた律法」は、イスラエルという一つの民族だけに限定して、救いを指し示す道標として与えられたものです。

使徒パウロの言い方

使徒パウロは、ユダヤ人を「律法が与えられた民族」、異邦人を「律法が与えられていない人々」と、分けて論じています。パウロによれば、ユダヤ人も異邦人も同じ価値を持つ人間ではあるけれど、ユダヤ人には優れたところがあって、それは律法が与えられていることだというのです。ユダヤ人は文字で書かれた律法によって、より鮮明に神を知り、神の救いの計画を理解することが出来るという点で、優れているのです。心の律法は知的理解を必要とせず、本能によって情緒的に機能しますが、文字で書かれた律法は、理性による知的活動を前提として、学び記憶し意識的に遵守するように、求められています。

文字で書かれた律法とは何か

聖書は「文字で書かれた律法」を、ただ「律法」とだけ呼んでいます。文字で書かれた律法という表現は、パウロが言う「心に記された律法」に対比する意味で、この文章で用いているにすぎません。ただパウロは、律法を「文字」と呼んだことがあるくらいですから、(ロマ 7：6)「文字で書かれた律法」という呼び方も的外れではありません。聖書で言う律法には、狭い意味から広い意味まであって、使い方によって変わります。最も狭い意味では十戒を始めとする、モーセを通して与えられた神の戒めであり、旧約聖書の、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記などに記されているものです。少し広い意味では、今あげた四つの書物に創世記を加えた五つ書物、すなわち、普通モーセ五書と呼ばれている部分です。もっと広い意味では、旧約聖書全体が律法と呼ばれることもあります。さらに広く考えると、聖書はそのようには語ってはいないのですが、新約聖書にも神の戒律が含まれていますので、聖書全体を律法と考えることも可能です。ただこの場合、「律法はユダヤ人に与えられた」と言えなくなります。新約聖書は、ユダヤ人の枠を超えているためです。

素直な心で旧約聖書を読めば

伝統的な神学の先入観なしに、つまり、教会で普通に語られる教えに捕らわれずに、素直に旧約聖書を読めば、ごく普通に、これはユダヤ人に与えられた書物であるとわかります。それを混乱させているのは、「聖書は人類に与えられた神の手紙だ」とか、「聖書は私たちに与えられたものだ」とか言う、教会の教えです。また、西欧のキリスト教徒の感覚の中にある、「私たちクリスチャンこそ本物のユダヤ人であって、血統によるユダヤ人、あるいはユダヤ教を奉じるユダヤ人は、もはや本当のユダヤ人ではなく、神に見捨てられたものだ」という思いです。

これはキリストが語られた、悪い農夫に代わって雇われた農夫の譬え、さらにパウロが、

「私達こそ信仰によるアブラハムの子孫であり、霊的なユダヤ人である」と語った言葉などの、誤った解釈から来たものです。クリスチャンは霊的なユダヤ人ですが、本物のユダヤ人ではありません。でもそのような感覚から、聖書は神が直接私たちに与えてくださった書物であると考えられ、そこに記されている律法は、直接、私たちに与えられたものであると、理解されるようになったと思われます。聖書はその教えが与えられた時代と、事情と宛先などが充分に考慮され正しく理解されたうえで、その教えの原則が、現代の私たちの実情にも正しく適用された場合に限って、私たちに対する神の戒めとなるのです

何のために与えられたか・・・１

文字で書かれた律法は、イスラエル民族を導き教えるために与えられたものでした。神はご自分の救いの計画を遂行するために、イスラエル民族を選び出し、彼らを通して全人類を祝福しようとなさったのです。それでまずイスラエル民族を教え導き、神の救いの計画の推進に、役立つものにする必要がありました。イスラエルの人々は、当時の中東の世界で、道徳的にも倫理的にも社会的にも宗教的にも廃頽し、まさに混沌とした民族たちに囲まれて暮らしていたのです。そのような劣悪な環境で、イスラエル民族は正しい神意識と真摯な礼拝態度をもって生活し、その宗教心から正しい倫理と道徳を身に着け、互いに愛し合い助け合う人間社会を築きあげるべきだったのです。そのようにして、救い主を迎え入れるのに相応しい民族となるのが、イスラエル民族に課せられた使命だったのです。

何のために与えられたか・・・２

律法には、他にも大切な目的がありました。それは神の救いの計画を示し、救い主の到来を予告し、救い主のもたらす救いに対して、心の準備をさせるためでした。旧約聖書に記された宗教行事や儀式に関わる定めごとは、たんに当時の人々が守るべき宗教祭事だっただけではありません。儀式に関する様々な細かい決め事、特に犠牲にまつわる事柄や祭司と彼らの職務に関する掟は、やがて訪れる救い主の贖いの働きを、あらかじめ示し教えるもので、「キリストの雛形」として与えられたのです。さらには歴史上の人物や出来事にまで、やがて来る救い主の「雛形」としての役割が与えられていました。現代の私たちには、雛形などというものの意味があまり分かりませんが、紀元前千数百年のユダヤの文化においては、有効な教育方法、また子々孫々への伝達手段だったのでしょう。

何のために与えられたか・・・３

律法にはまた、養育係（ガラテヤ 3：24）という重大な役割がありました。養育係とは子どもが大人になるまでの世話をする役割の人です。律法は人に正しい生き方を教えると

同時に、人間とは律法を守り切れない弱い存在であることを教えたのです。人間に、自分は罪人であるという自覚を持たせ、自分には律法を守り切れないと悟らせ、律法によらない救いが必要であると悟らせ、救い主を信じる信仰に導く役割を与えられたのです。律法はそれを持っていることに誇りを持たせるためでも、中途半端に守りながらきちっと守っていると思い込んでいる者たちに、自分は正しいと主張させるためのものでもありません。そうではなく、どれほどきちっと守り通そうとしても守り切れないと痛感させ、自分は罪人であり、救いが必要であるという自覚を持たせ、罪の赦しを与える救い主の到来を、切望させるべきものだったのです。

峻厳な神

イスラエル民族は、自分たちが特別に選び出された、「選民」であることについては知っていました。ところが、全人類に神の祝福をもたらす器となる、崇高な使命を与えられていることにはまったく気づかず、いたずらに、選ばれた者の特権意識を振り回し、祝福を独占しては堕落をくり返していました。そのために、神はしばしば彼らに厳しく当たらなければなりませんでした。実際のところ、本来優しい神が、目的遂行のために厳格になり、道を外れて迷い出してしまう者たちには、血も涙もないと思われるほど、峻厳な神となっておられるのです。文字で書かれた律法と峻厳な神の姿は、イスラエルの不従順さと相まって、表裏一体のように現れてきます。

他民族からの分離

旧約聖書には、そのような厳しい神の姿が随所に見られるために、聖書の神は恐ろしい怒りの神だという、誤った捉え方が一般的なってしまったほどです。それは、すでに述べた通りです。わがままを貫き通そうとしてぐずる子に対して、普段は優しい母親でも、とても厳しく叱ることがあります。このときの母親の姿だけを見て、あの母親は優しさに欠けているとか、思いやりがないとか、鬼母だとか言うのは間違っているのです。そのような神の厳しい取り扱いが、たとえば他民族、すなわち異邦人との婚姻の禁止や、異邦人がイスラエル人になる場合の、徹底した改宗の要求に現れています。イスラエル民族にとって、国家と天地創造の神を礼拝する宗教は不可分のものであって、これを揺るがせるものは、たとえ内部のイスラエル人であっても、外部の異邦人の場合であっても、非常に厳しく取り扱われていました。特に偶像礼拝を習慣としていた周囲の民族からは、厳しく分離されていたのです。

峻厳と寛容

神の峻厳さは、特にイスラエル民族の偶像礼拝に対して、露骨なまでに現わされています。旧約聖書では、イスラエル民族の偶像礼拝が、「姦淫の罪」、現在風に言えば「不倫の罪」というたとえで言及されています。神はエジプトの奴隷として苦しんでいたイスラエル民族を助け出し、これと特別な「契約関係」に入られたのです。それは、「あなたこそ私が選び出し、また苦境から救い出した花嫁であり、あなたは生涯をかけて私を夫として愛し、私だけを愛し続けなければならない」という、ロマンチックな「婚姻関係」のたとえで語られているのです。イスラエルと神との関係は、単なる冷たい法律の契約関係ではなく、情に溢れた契約関係、血と涙で結ばれた契約関係なのです。それだけに、この契約に違反したイスラエルに対する神の峻厳さは、際立っているのです。

姦淫のイスラエル

旧約聖書、つまり律法の歴史は、「私だけを見つめ私だけを愛しなさい」とおっしゃる夫としての神と、あっちの男こっちの男に色目を使う、多情な妻であるイスラエルの葛藤の物語です。これは筆者の思い付きの表現ではありません。旧約聖書そのものの中で、イスラエルの偶像礼拝は、妻が他の男に走る姦淫として描かれ、夫である神の悲しみが、痛々しいまでも表現されているのです。その神の痛みを、自分の妻とさせられた遊女との婚姻関係をもって、実際に体験させられ、それを記録させられた、ホセアという預言者もいたほどです。神に似せて造られた人間には、神との交わり以外では、けっして満足できない部分があるのです。唯一、創造主なる神だけが、人間を満足させることが出来るのです。偶像に走ったイスラエルは、あたかも姦淫をして夫以外の男に走った女が、惨めにも捨てられて、ひどく哀れな状態に落ちぶれたように、打ちひしがれました。それが一度や二度の事ではなく、いく度もいく度もくり返されたのです。そのたびに神は厳しく応対しながら、結局はイスラエルを赦し、ご自分の許に引き寄せ、慰め癒しておられるのです。旧約聖書に怒りの神を見る人は、同じだけ強烈に描き出されている、悲しみと赦しの神、寛容の神、罪を犯す者であっても喜んで受け入れる、優しい神を見なければなりません。

異邦人に対する寛容

神の寛容は、時には異邦人に対しても表現されています。イスラエルの宿敵シリアの首都ニネベの腐敗を、忌み嫌いながらもこれを救おうとされた神の寛容と忍耐は、ヨナ書の劇的な記事に見事に表現されています。パレスチナの先住民だった売春婦のラハブや、モアブの女であった異邦人ルツにも、神の憐れみと寛容は遺憾なく発揮されています。神のご意思は全人類を救い祝福することであり、イスラエルが特別な民族とされているのは、あくまでも全人類に祝福をもたらすための器として、特別に取り扱われているだけなのです。

異邦人のための神学（６）

キリストの生涯と教えの中の

心に記された律法と文字で書かれた律法

キリストの人気

キリストは、どんな人でも差別なく愛し受け入れ、大衆の人気をほしいままになさいました。いつでも優しい思いやりで、苦しむ人々に助けの手を差し伸べられたことによって、特に庶民の憧れとなりました。体が不自由なため疎外されていた人たちは、キリストの奇跡や癒しによって、人生を取り戻しました。ローマ帝国の手先となって、同胞から不法に

税金を取り立てて私腹を肥やし、蛇やサソリのように嫌われていた人たちも、キリストに迎え入れられ、人生を新たにしてもらいました。売春を生業として、暗い裏世界に身を潜めていた女たちも、キリストの深い理解と寛容に出会い、まっとうな生き方ができるようにされました。イスラエル人の多くは（当時はすでにユダヤ人と言う呼び方が普通になっていました)、厳しい律法をさらに厳しくした戒律を作り、それを守ることを誇りにしていましたが、一方では、そのような生き方に疲れ果てている者も、少なくありませんでした。また、戒律を踏み外してしまった人たちを、情け容赦なく取り扱うやり方にも、庶民の多くは嫌気を差し、疑問を感じていました。

キリストの教えと行動の真骨頂

　そのような社会の雰囲気をよく表しているのが、後にキリストの十二弟子のひとりとなり、またマタイの福音書の著者になった、税金取りとキリストの出会いです。キリストは、宗主国ローマの手先となって「税金取りたて業」を行っていたために、「売国奴」として最も軽蔑されていた税金取りと、その仲間であった多くの罪人を受け入れ、彼らの家に入って、食事まで共にしておられました。それで、律法の厳守を旨として、罪人とは接触を避けていたパリサイ人たちに、面と向かって、あからさまに批判されたのです。そのときキリストは、旧約聖書のホセア書６：６を自由に引用して、おっしゃいました。「『わたしはあわれみを好むが、いけにえは好まない』とはどういう意味か、行って学んで来なさい。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」　これはキリストの教えと行動の真骨頂です。しかしこのために、キリストは十字架に架けられることになるのです。

あわれみは好むが、いけにえは好まない

「いけにえ」とは律法の要求をひとまとめに表現したもので、律法の遵守を意味しています。キリストは、ユダヤ人が厳格に律法を守ろうとするあまり、人間的な心、情、誠と言ったものを軽んじてしまうのを、神が悲しんでおられることを教え、その教えの通りに生きて行かれたのです。「文字で書かれた律法」を大切にするのは悪くありませんが、それが行き過ぎて、人間の基本的な生き方を指し示す、「心に記された律法」をないがしろにし、否定してしまうのは間違っています。心の律法は文字で書かれた律法に先行する、より基本的、原則的なものだからです。人間生活を縛り付け拘束する律法に飽きて、もっと人間らしい、大らかで寛容な、人情のある生活を渇望していた大衆は、「あわれみ」に表される心の律法を大切にされたキリストを、歓喜して迎えたのです。

律法の遵守を求めなかったキリスト

キリストの態度は、旧約聖書の律法に見られる厳格な定めを、遵守するものではありませんでした。旧約の「文字で書かれた律法」を固く守るなら、厳しく罰せられ、死刑に処せられて当然の人々を、憐み、擁護し、寛容をもって見逃されたばかりか、神の赦しまで宣言するようなことはできません。それが律法に厳格な人々をさらに激しく怒らせました。神の赦しを宣言するのは、自分を神と同等にすることであり、思い上がりもはなはだしく、神を冒涜するものだとみなされたのです。

あえて律法をお破りになったキリスト

そればかりかキリストは、自ら進んで律法を破って行かれました。当時の人々も、モーセの律法に定められた、安息日の定めをなんとかして守ろうと四苦八苦していました。ところが、律法が与えられてから千年以上も経過していた当時のイスラエルでは、仕事の内容も、生活環境も、社会構造もすでに大きく変わって、人々の日常生活はずっと複雑になっていたのです。一週間に一日の割合で、すべてのユダヤ人にあらゆる労働を止めさせることになる、この律法を文字通りに遵守するのは不可能となっていました。それなのに人々は、無理にでもそれを守ろうとしていたわけです。そのことが、日常生活に多くの困難をもたらしていたのです。要するに律法は、時代錯誤で不合理なものと、なっていたということです。キリストの言葉を借りるなら、「古い革袋」となっていたのです。

安息日の目的

そのために、キリストはあえて、みずから、いく度もこの安息日の定めをお破りになり、さらに破ってしまった人たちを擁護されたのです。安息日は人びとの生活を不便にするために与えられたのではなく、特定の状況の中で、規律ある生活が出来るように与えられたのです。キリストのお言葉の通り、人が安息日のためにあるのではなく、人のために安息日があるのです。

安息日は、数百年にわたって奴隷の生活を強いられたために、自分たちで生活設計を作ることが出来なかったイスラエル人たちに、基本的な生活のリズムを与えたのです。そのために、あえて天地創造の物語を持ち出して来て、神は七日目に休まれたのだから、あなたたちも七日目には休まなければならないと理屈付けをして、安息日を定めたのです。でもキリストは、神がお休みになることなどありえないと、第七日目を休みと制定したもともとの理由を、事実としては否定なさったのです。神は六日間で天地を創造なさったのでも、七日目に休息をおとりになったのでもないのです。ただ、そういう言い方、理屈付をして、イスラエル人たちが安息日を取るように、仕向けられたのです。神は絶対に嘘をお

っしゃらないなどと、非聖書的なことを言う西欧のキリスト教倫理では、嘘も方便という日本人的感覚は、絶対に認められないことだとは思いますが、聖書をよく読むと、神は結構事実に反していることをおっしゃっておられる、嘘をついておられるのです。安息日はまた、ある特定の環境の中での規律であり、永久に守るべき法律ではなかったことも、理解して置きましょう。（この問題については、著者のエッセイで幾度も取り扱っていますが、「19. 救いの歴史を考えながら創世記を読む」の、Ⅲで少し詳しく書いていますので、ご参照くだされば幸いです。）

ちょっとした譬え

キリストが大切にした「心に記された律法」は、全人類に与えられたものであり、譬えてみるなら、「どんな食べ物でも、好き嫌いせずに食べなさい」という、食生活の基本的な、また普遍的な教えのようなものです。それに対して、ユダヤ人に与えられた文字で書かれた律法は、糖尿病を患っている人に対する食生活の指導のようなものです。共に、より健康な生活のためという原則は同じでも、対象によって状況が変わり対処も異なるのです。糖尿病の人に「好き嫌いせずに何でも食べなさい」と言うのも不適切ですが、ごく普通の人に糖尿病患者のための食事を強要するのは、それ以上に迷惑な話です。旧約聖書と言う律法の定めを、なんの考察もせずに異邦人に適用するのは大きな間違いです。ただし、異邦人である私たちが、旧約聖書から神について学び、救い主について理解を得、神の救いのご計画について知り、神を敬い人を愛するという、信仰と倫理の原則を再認識するのは、大いに益のあることです。神を敬い、人を愛することは、心に記された律法の原則です。文字で書かれた律法はそれを再確認させるのです。

偽者と断定されたキリスト

ともあれ、大胆に律法をお破りになったキリストは、旧約の律法を律義に守り通そうとした指導者たちによって、偽物と断定されたのです。文字で書かれた律法を、時代を超えて絶対に守るべき神聖なものと理解していた指導者たちが、そのように判断したのは当然のことでした。盲目的な律法主義を排し、神の愛と憐れみを強調したことが、キリストの十字架の死につながったのです。キリストによるならば、神の御心は、律法を厳守することではなく、人間の「心に記された律法」に素直に従うことだったのです。冷たい文字による律法ではなく、温かく血の通った「心に記された律法」が、神の本当のみ心の現れだったのです。キリストにとって大切なことは、人間が神の愛と憐みを理解し、互いに慈しみ、赦し合い、弱さを庇い合いながら生きることでした。そして神の愛と優しさと力強さと誠実さに信頼して、明日のことを思いわずらわず、恐れず、空の鳥のように、野の花のように、大らかに、天真爛漫に生きることでした。

優しいキリストと厳しいキリスト

キリストの言動を観察すると、非常に優しく人に接している場合と、恐ろしく厳しく接しておられるときがあります。たとえ、民族としては律法を与えられていた、イスラエル人であったとしても、あまり律法に通じていなかった庶民に対しては、「心に記された律法」を表に出した教えをし、心の律法に照らした大らかで優しい対応をしておられました。一方、きちっと宗教教育を受け、旧約聖書の律法に馴染んでいた人々、聖書で言われるパリサイ派やサドカイ派の人々、あるいは律法学者と言われる人々には、彼らの知識に応じて、非常に厳しい「文字で書かれた律法」を尊重した、取り扱いをしておられます。

キリストの厳しい断罪

「文字で書かれた律法」をしっかり知っていたにもかかわらず、それを自分勝手に解釈し、その上、それらを軽んじていた人々の多くは、彼らの欺瞞を鋭く暴くキリストを憎んで激しく対立していました。それでキリストは、彼らに対しては厳しい神の裁きと刑罰を予告されました。それが有名な「ゲヘナの火」あるいは「ゲンヒンノムの火」に投げ込まれるという警告です。「ゲヘナ」はギリシヤ語、「ゲンヒンノム」はヘブル語ですが、どちらもエルサレムの南端にあった谷あいのゴミ捨て場のことです。キリストは、蛆虫が湧いている傍らでいつも火が燃えているこの不潔な場所を、「文字で書かれた律法」をよく知っていながら、それを意識的に破っていた人々が、やがて遭遇する刑罰の場の譬えとしてお用いになったのです。

ゲヘナの火が適用される者

ゲヘナの火、あるいはゲンヒンノムの火に投げ込まれるのは、「心に記された律法」によって生きていた人達ではありません。火も蛆も、「文字で書かれた律法」を知らずに生きていた人に対する裁きではないのです。キリストは、この二つの律法の違いを明確にご存知で、別々に取り扱われたのです。キリストは、イスラエルが「文字で書かれた律法」を与えられた、特殊な民族であることを知っておられました。異邦人とイスラエル民族の違いを、充分に理解しておられたのです。しかしイスラエル人であろうと異邦人であろうと、一人ひとりの人間と接触なさるときのキリストは、その人が一人の人間として、「文字で書かれた律法」にどれだけ馴染んでいたかを、ご覧になったのです。キリストにとって、イスラエル人、サマリヤ人、ギリシヤ人、ローマ人の違いはありませんでした。「文字で書かれた律法」に馴染んでいたかどうかという、一つの基準で判断されたのです。

キリストへの期待

キリストの人気を高めたもう一つの理由は、キリストが、単なる弱い者を助ける善意の人物から、国家的な救い主であると、期待されるようになったことです。もともとイスラエルの人々は、預言で知らされていた救い主の到来に、大きな期待をかけていました。彼らの願いの第一は、宗主国ローマからの独立であり、それを成し遂げさせる、救い主の到来を熱望していたのです。一般大衆がキリストの奇跡や教えに単純に感動し、約束された救い主であると信じたかったのも、当然と言えば当然でした。

キリストへの不安

ただし、政治の面でも宗教の面でも権威を持っていた、当時の指導者たちは、非常に注意深く疑り深い人たちでした。本物の救い主ならば大歓迎であったとしても、偽の救い主が現れて人心を惑わし、宗主国ローマに歯向かって、民衆を蜂起させるような事態になれば一大事です。事実、当時「熱心党」と呼ばれた愛国者のグループがあって、隙あらば、ローマに逆らって事を構えようとしていたのです。そのような事態になれば、たちまち圧倒的なローマ軍に蹂躙され、民族滅亡の危機を迎えると、不安を募らせていたのです。このような危惧は、特に、ローマのあやつり人形として民衆を治めていた、サドカイ派と呼ばれる貴族階級の権力者たちの間に、広く深く浸透していました。

キリストへの憤り

パリサイ派と呼ばれた一般大衆の宗教指導者たちもまた、キリストに対して反感を抱いていました。キリストの高潔な教えによって、自分たちの偽善と欺瞞が暴かれたために、早くから激しく憤っていたのです。それで彼らはサドカイ派との派閥を超えて、何とかキリストを亡き者にしようと、共に機会をうかがっていたのです。その彼らがついに機会を捉え、協力して偽りの訴訟で裁判を開き、死刑に陥れようと行動を開始したのです。ところが、宗主国ローマのあやつり人形に過ぎなかったイスラエルの法廷には、死刑を宣告する権利が与えられていなかったために、宗主国ローマの裁判にまで持ち込み、偽証をもって死刑の嘆願をしたのです。それが、有名なポンテオ・ピラトによる、ローマ法廷における裁判です。

無抵抗のキリストと民衆の失望

公開で行われたこのときの裁判で、キリストはまったく抵抗のそぶりも見せないばかりか、まるですべてを諦めきったかのように見えました。キリストはもともと、人々の罪を

担って死刑になるために、この世に来られたのですから、ローマに反逆して立ち上ろうという雄々しく猛々しい姿は、はじめからまったく無かったのです。それを見た大衆は、ひどく期待を裏切られ、失望し傷ついたのです。それが彼らの激しい怒りとなって爆発し、「十字架に付けよ！」という、叫びになってしまいました。キリストの十字架の死は、今にも暴徒化しそうな群衆の様子に恐れを抱いた、ローマ総督の事なかれ主義による、妥協の産物でもあったのです。こうしてキリストは、指導者たちの思惑通りに、ユダヤ人全体の意志と、ローマの権力によって、十字架に架けられることになったのです。

邦人のための神学　（７）

パウロの中のふたつの律法

異邦人のための使徒

　クリスチャンになる前の使徒パウロは、自ら「ユダヤ人の中のユダヤ人」と誇るほどの人物でした。イスラエル民族最大の宗教学派であったパリサイ派に属し、エリート青年として最高の教育と訓練を受け、大いに将来を嘱望されていました。クリスチャンになった後の彼は、聖霊の啓示と導きを得て、キリストの教えと働きを神学的に理解し、それをま

とめ上げてキリスト教の骨子を立て上げ、異邦人のための使徒と呼ばれる、素晴らしい働きをしました。パウロの神学は、救いはもっぱら自分たちのものだと理解した、ユダヤ民族の常識に対する強烈な反論であり、挑戦でした。救い主と救いを独り占めにしてしまったユダヤ民族は、全人類に救いをもたらすための器として、彼らをお選びになった神の目的から外れてしまったのです。パウロはまさに、ユダヤ人の誤解から神のみ心が遂行されなくなりかけたそのとき、聖霊の啓示を受けて、改めて神の壮大な救いの計画を理解し、それを論理的に確立して広めたのです。神の救いの計画は、あくまでも全人類が対象であり、ユダヤ民族はそのために用いられたに過ぎなかったのです。そのことを明らかにしたことで、彼は福音をユダヤ人という枠、あるいはユダヤ民族の檻から解放し、異邦人への使徒という名にふさわしい働きを成し遂げたのです。

パウロの宣教対象

ただしパウロの実際の宣教活動は、異邦人に的を絞ったものではありません。たしかに伝道をしたのは異邦人の土地でしたが、パウロが力を入れたのは、異邦の大都市には必ずと言われるほどあった、ユダヤ人の会堂での宣教で、聴衆の多くは異邦人の土地に住んでいたユダヤ人か、彼らに感化されて、すでにユダヤ教を受け入れていたか、少なくてもユダヤ教に好意を持って、心ではユダヤ教徒になりかけていた人たちでした。完全な異邦人の間で説教をすることは、むしろ例外だったのです。たとえば、まったくの異邦人の土地だったと思われるマルタ島には、乗っていた船が嵐で難破し、意図せずに上陸したものです。そこでは、癒しなどの奇跡を行いながら一冬を過ごし、土地の人たちに大いに尊敬されたのですが、そこで救われた人はいなかったようです。彼が異邦人のための使徒と称されるのにふさわしいのは、彼が異邦人伝道に生涯を費やしたからでも、多くの異邦人クリスチャンを産み出したからでもなく、福音の普遍性を神学的理論として確立し、当時の世界のいたるところに住む異邦人に、勇んで福音を語り続けていた名もないクリスチャンたちを励まし、宣教の理論的基盤と指針を与えることが出来たからだったのです。

「文字で書かれた律法」に立脚した異邦人のための神学

異邦人への使徒であったにもかかわらず、パウロの教えは、決定的にユダヤ人のものでした。「文字で書かれた律法」を背景にし、それに立脚するものだったのです。パウロにとって神の救いは、律法で暗示され、預言で明確に語られていた、救い主キリストによるものでした。キリストの身代わりの死、血による清め、大祭司としての執り成しの働き、罪の悔い改めなどは、旧約の律法で定められた儀式や祭司の働き、さらに動物の犠牲を背景にして語られています。パウロはキリストの贖いの業を、あくまでも旧約聖書の教えから理解し、その贖いを準備して下さった神、あるいはキリストを信じる信仰を高々と謳っ

ています。パウロの教えは徹頭徹尾ユダヤ人的だったのです。文字で書かれた律法を与えられたユダヤ人の、極めて厳格なパリサイ派の学者として、文字で書かれた律法を土台に、神の救いの神髄を語ったのです。異邦人への使徒という名に恥じない神学者として、福音がユダヤ人に止まらず全世界に及ぶと語った、福音の普遍性の論陣のなかでも、あくまでもユダヤ的発想で旧約聖書を土台に論じています。

律法に時間的制限を観たパウロ

それでいながらパウロは、普遍的福音の真髄を、たとえ針の穴を通すように狭くはあっても、しっかりと見ていたのです。さすがに偉大な神学者です。それは彼の、律法そのものに対する理解に現れています。パウロは律法を、ユダヤ人に対するものと限定しただけではなく、「養育係」という表現で、あくまでも子供が大人に成長するまでの、「一時的な助け」として取り扱っています。律法に与えられていた時間的な制限を見破っていたのです。キリストが、安息日に関わる律法に、時間的な制限を見ていたのと共通しています。それはまた、彼が「心に記された律法」と呼んだ律法と対比されるべきものです。心に記された律法は人種の枠と時間の制限を超えたものだからです。

パウロのいう「心に記された律法」

キリストは「心に記された律法」という表現も、類似した表現もお用いにはなりませんでしたが、明らかにそれを意識し、それに則った教えをしただけでなく、行動をもって示しておられます。一方パウロは、はっきりと「心に記された律法」について語りましたが、パウロが語った全体量から見れば、誠にわずかなものです。しかしそのわずかな中に、非常に大きな意味が含まれています。パウロは律法（文字で書かれた律法）なしに罪を犯した者は律法なしに滅び、律法の下にあって罪を犯した者はすべて、律法によって裁かれますと教えました。(ロマ 2：12) 律法を与えられている者と、律法を与えられていない者を、初めて、神学的に明確に分けたのです。そして、律法を与えられていない者は、律法によって裁かれることがないという原則を、明らかにしたのです。これはすでに、キリストの教えと行動に示唆されていたことでした。つまり、旧約聖書の律法を与えられていない者は、旧約聖書の教えで裁かれることがないということです。

律法を持たなくても称賛される人々

パウロは律法を持たない人々の間にも、称賛されるべきことがたくさんあることを認め、次のように言っています。「兄弟たち。すべての真実なこと、すべての誉あること、すべての愛すべきこと、すべての評判の良いこと、そのほか徳と言われること、称賛に値する

ことがあるならば、そのようなことに心を留めなさい。」（ピリピ 4：8〜9） パウロは、称賛されることに心を留めるように勧めていますが、当然、称賛されるべきことをする人々がいるわけで、それらの人々を心に留めることも大切です。パウロは律法を持つユダヤ人の優位性を認めていますが、異邦人の中にもユダヤ人と同じように、称賛されるべき人々がいることも認めています。もちろん彼らは本能的に、すなわち神に似せて造られた人間の本性によって、良いことを求めて生きているのです。

律法を持たない者を裁くもの

全世界の人口から見ると、旧約聖書の律法を与えられた者の数は、きわめてわずか過ぎません。大多数の者には与えられていないのです。その大多数の人々は、裁かれることはないのかというと、そうではありません。彼らも裁かれ、しかも滅びるのです。パウロによると、「文字で書かれた律法」の役割を代わりに果たし、彼らを滅びに定めるのは「自分自身」です。パウロは異邦人の行動を支配する「自分自身」というものを認めています。ただし、それが何であるかについての議論は進めていませんので、ここでは神学的な類推に頼る以外はありません。聖書全体の教えから察すると、これは、人間が造られたときに与えられた、創造者に似た性質、つまり人間の本性、人間性であると見るのが最も妥当です。人間は神に似せて造られた、唯一の動物です。この、神に似せて造られた人間の本性が「心に記された律法」であり、文字で書かれた律法がなくても、何が正しいか、何が間違っているかを本能的に教え、人間の行動を規制するのです。

心に記された律法と良心

パウロは、心に記された律法について論じた短い文章で、わずかながらですが「良心」についても触れています。心に記された律法が、何らかの形で良心と関りがあることを示唆していますが、ただ一回だけの短い言及では、その意味を充分に理解することはできません。とはいえ、これも少し神学的に考察することは可能です。筆者は以下のように考えます。

心に記された律法とは、神に似せて造られた人間の本性、人間性のことで、時と場所、人種と文化を超える普遍的なものとして、すべての人間に与えられています。しかしその人間の本性が表現されるのは、つねに、特定の文化や言語、教育や環境の中でのことです。人間の本性が具体的に表現されると、つまり人間性という種が、ある特定の土地と気候の中で芽を出して育ち始めると、それはもう普遍的なものではなく、特定の状況に対応し、適応したものとなります。それが「良心」です。同じ種でも、土壌の違い、温度の違い、湿度の違い気候の違いなどの条件によって、芽生え方も育ち方も実の結びかたも異なりま

す。すべての人の人間性は同じでも、それが表現される時には、すでに普遍性を失って、特定の地域の文化や環境に限定された「良心」となるのです。

日本人には日本人らしい良心、ロシア人にはロシア人らしい良心、中国人には中国人らしい良心、イスラム教徒にはイスラム教徒らしい良心となり、さらには個々人の育ちや教育や体験の違いによって、それぞれの良心となるのです。多くの良心には共通性もありますが、一致させるのは不可能です。良心をもとに論じると、共通性よりもむしろ違いが鮮明になって、争いや戦いに発展してしまうのです。イスラム教徒、特に原理主義的イスラム教徒が、イスラム教徒を迫害し痛めつけたキリスト教徒を憎み、凶暴な復讐を繰り返すのは、イスラム教徒の良心のためなのです。

パウロの意識の中にあったふたつの偶像礼拝

パウロはユダヤ人の律法と、ユダヤ的な発想でキリスト教神学の土台を据えましたが、ユダヤ人ではない人々の立場を、無視していたのではありません。それは偶像礼拝の罪を、二つに分けて考えていることにも現れています。パウロはユダヤ人として、当然、モーセの十戒で明らかに命じられている、偶像礼拝の禁止を理解していました。ところが彼は、十戒が語っている偶像礼拝とは別の、偶像礼拝の罪についても語っています。（ロマ１：18～32）それは十戒が与えられるずっと前から、まだイスラエル民族が生まれていなかったとき、太古の時代から、すべての民族によって犯され続けていた罪でした。

神はこの十戒では語られていない偶像礼拝の罪のために、人間をその心の欲望がおもむくままに放置され、罪の汚れに染まるままにされたと記されています。人間が汚れに汚れた生活を営むようになったのは、この偶像礼拝の結果です。これこそ、神の第二の追放とも言うべき出来事、あるいは人間の第二の堕落とも言うべき出来事でした。偶像礼拝と汚れとはこのような関係にあるのです。パウロにとって、異邦人の偶像礼拝の罪は、神の明快な自己啓示にもかかわらず、人間が愚かにも被造物を拝み出したということであって、イスラエル民族に特定して与えられた、十戒を破る罪ではありませんでした。

パウロが見せた偶像礼拝に対する厳格さと寛容

十戒を破るイスラエル民族、すなわちユダヤ人の罪に対して、パウロは当然厳しい立場をとっていましたが、異邦人の偶像礼拝の罪に対しては、別の基準を持っていたことが分かります。彼はアテネで異邦人に向けて説教したとき、偶像礼拝を「無知の時代」の事、神が「見過ごしておられた」ものと語って、寛容さを示しています。（使徒 17：30）

偶像礼拝は、人間が犯すことが出来る最も大きく深刻な罪です。なかでも、ユダヤ人が犯す偶像礼拝は、いちだんと罪深いものでした。なぜなら神は、ユダヤ人に対しては間違うことが出来ないほど明確に、ご自分を現され、ご自分がどのような神であるかをお示しになったからです。多くの奇跡をもって、彼らをエジプトの奴隷の身分から救い出し、日々、約束の地に向けて導き、遭遇する困難を乗り越えさせておられたのです。とくに、次々と出現する他民族との戦いは、奴隷生活をしていて戦争についての知識も経験もなかったイスラエルにとっては、危機的難題だったにちがいありません。さらに当時のイスラエルは、たとえわずかの武器を携えていたとしても、それは青銅でできたものでした。ところが、イスラエルが戦わなければならなかった民族の多くは、鉄器の時代に入っていたのです。青銅の武器には勝ち目がありません。イスラエル人たちは、日常的に神の介入と助けを体験しなければ、生き延びることはできなかったのです。

その、日々に助けを体験している神をないがしろにして、偶像を礼拝することは、あたかも夫を裏切って他の男に走る「不倫」のようなものであり、神を知らなかった異邦人の偶像礼拝の罪とは異なっていたのです。ユダヤ人の偶像礼拝の罪は、文字で書かれた律法に違反する罪であり、異邦人の偶像礼拝の罪は「心に記された律法」に違反する罪なのです。異邦人が責められまた罰せられたのは、彼らの倫理観の希薄さ、道徳の廃頽のためであって、偶像礼拝のためではありません。異邦人が偶像礼拝のために罰せられたのは、彼らがイスラエルの中に偶像礼拝を持ち込もうとした時だけです。

アテネにおいてパウロが行った悔い改めへの招き

多くの人は、パウロがアテネで説教したとき、偶像礼拝を「悔い改める」ように迫ったと、理解しているようです。（使徒 17：30）でもここで用いられている、「悔い改め」というギリシヤ語は、もともとそれほど強い意味を持った言葉ではありませんでした。ユダヤ人の多くがギリシヤ語を用いるようになった時、ヘブル語で書かれた旧約聖書がギリシヤ語に翻訳されました。紀元前二～三世紀の事だったと言われています。その聖書は、七〇人の学者たちの努力によって翻訳されたことから、七〇人訳聖書と呼ばれて、広くユダヤ人社会に受け入れられるようになり、現在でも色々な意味で重要な文献とされています。その聖書が、ヘブル語の「悔い改め」の訳語として、このギリシヤ語を選んだのです。そこからこのギリシヤ語は、ユダヤ人の間では、悔い改めという意味を持つ言葉として、普通に用いられるようになったと思われます。多分、七〇人訳がこのギリシヤ語を選ぶ前から、一部のユダヤ人は「悔い改め」という意味で、この言葉を用いていたと考えた方が良いでしょう。ただ、それはユダヤ人社会での出来事であって、普通のギリシヤ人たちの間では知られていないことでした。

アテネの人々の悔い改めの理解

パウロがアテネで説教したときにも、彼が使ったこの「悔い改め」というギリシヤ語は、居合わせたギリシヤ人たちの間では、まだ依然と同じように、せいぜい「考え方を変えて」とか「理解を変えて」とか、ずっと穏やかな意味で用いられていたはずです。異邦人の土地でその文化に親しみながら育ち、ギリシヤ語も自由に話せたパウロは、ユダヤ人とギリシヤ人との間では、この言葉が異なった意味あいに用いられていたことを、良く心得ていたはずです。したがってパウロはアテネにおいて、ユダヤ人に「悔い改めよ」と語るような、厳しい態度ではなく、むしろ穏やかに、「いま私は、天地をお造りになった神のことをお知らせしたのですから、『皆さんも考え方を変えて』、この神を礼拝してはいかがですか」と、語りかけたのだと考えるべきです。

異邦人のための神学　（８）

キリストを知らない異邦人は救われるのか

神を信頼して救われたアブラハム

アブラハムは信仰によって義とされました。しかし彼が義とされたのは、キリストを信じたからではありません。神を信じたからです。アブラハムの救いは、アブラハムがキリストの贖いの働きを理解したからでも、キリストを心で信じ、口で告白したからでもなく、

自分の罪を悔い改めたからでもありません。パウロのように、甦りのキリストに出会う体験をしたからでもありません。アブラハムは、キリストについてはまったく知りませんでした。まだキリストは降誕しておられなかったからです。キリストの降誕は、アブラハムの時代から二千年も後のことです。でもアブラハムは義と認められたのです。神を信じて義とされたのです。神に信頼して救われたのです。

キリストによらない救いはあるか

では旧約の時代には、キリストによらない救いがあったのでしょうか。そんなことはありません。キリストによらない救いはあり得ないのです。この方によってのみ、救いがあるのです。誰も、真理であり道であり命であるキリストによらなくては、父のみ許に行くことはできないからです。この「誰も」には、キリストの贖いの働き以前に生きていた人たちも含まれます。キリストはこの言葉を、まだ十字架に架かっておられないときに、すなわち贖いの働きを、まだ完成しておられないときに語られたものです。それでもキリストはすでに、神に到達する唯一の道であり真理であり命でした。それは二千年前でも、四千年前でも同じことです。

アダムとエバの救いも

アダムとエバの救いも、キリストによるものでした。彼らが罪を犯した後も、神は引き続き彼らに近づき話しかけられたのは、キリストの贖いがあったからです。絶対に聖い神が、不従順の罪を犯して汚れた彼らを、完全に滅ぼすことなく接触できたのは、あらかじめキリストの働きをご存知だったからです。くり返しますが、アダムとエバはキリストを知りませんでした。それでも、キリストによる救いを獲得したのです。キリストによって、神との和解を得て、限定的であったとは言え、神との交わりの回復を楽しんだのです。旧約時代の聖徒たちはみな、アブラハムと同じ原則で、神と交わることが出来たのです。神は彼らの礼拝を受け入れることが出来たのです。動物の犠牲の血のゆえにではなく、キリストの十字架の血潮の故だったのです。動物の血は人を救うためのものではありませんでした。ただ、キリストの血を指し示す、雛形だったのです。

人の理解にも人の知識にも関わらない救い

救いは人の理解や知識に関わりません。人が知っていようがいまいが、神がキリストの十字架の死と甦りを知っておられるからです。人間が贖いに関わる奥儀を理解していてもいなくても、神がキリストの贖いの奥儀を理解しておられるのです。キリストの贖いの働きと、それに関わるすべての活動は、あまりにも気高くまた深いもので、人間の浅はかな

知的活動を超えています。偉大な神学者がたとえ理解したと思っても、万分の一も理解していないのです。知っていると言っても、ほとんど何も知ってはいないのです。そのような人間の理解や知識に、キリストが天の栄光と権威を放棄して完成してくださった、大切な救いの効力はかかっていないのです。キリストは人の子としてこの世に生まれた上、その命を捨てて陰府にまで下り、甦りの勝利をもって、救いを完成してくださったのです。人間の救いは、壮大なキリストによる贖いの働きを計画し、それを成し遂げてくださった、神の知識にかかっているのです。

過去も未来もない神

神には過去も未来もありません。アブラハムが、キリストよりも二千年も前に生きていた人間でしたが、キリストによって救われました。私たちが、キリストよりも二千年以上も後に生まれた人間であろうと、キリストによって救われるのです。キリストは時間を超えた、永遠の救い主です。もともと神は、時間に閉じ込められていないのです。二千年後のことについて、アブラハムは知りませんでしたが、神はすでに計画を作り、それを実行に移しておられるのです。それ以上に、神にあっては、計画されたことはすでに完成されたことなのです。絶対の力と権限をお持ちの神には、妨げられることもないからです。だからこそ神は誠実であることが出来、私たちは信頼して裏切られることがないのです。

さらに理解しておかなければならないことは、キリストご自身がおっしゃられたように、アブラハムの時代にもキリストは生きておられ、アブラハムと父なる神との会話を聞いておられたということです。このときキリストは、ご自分が十字架の贖いの業を成し遂げる時を、ご存知だったのです。それ以上に、キリストと父はひとつでした。そして、今でもひとつなのです。アブラハムはキリストを知りませんでしたが、キリストはそのアブラハムの姿を見ておられ、ご存知だったのです。

信頼に報いて与えられる救い

救いは私たちが知っているかどうか、理解しているか否かによらず、神の知識によります。また私たちの知識に関わるのではなく、私たちの信頼に関わるのです。神はキリストの十字架の死をご存知ですから、私たちが知らなくてもいいのです。神の心をくすぐり、優しさを揺さぶるのは、私たちの知識ではなく信頼です。神が私たちをお救いになるのは、神が愛のお方で、何も理解していなくても信頼し、すり寄って甘える私たちを、愛おしく思われ、救ってくださるのです。私たちの罪をキリストに着せて、十字架で殺して下さっただけでなく、甦られたキリストが持っておられる義を私たちに転嫁し、私たちを義人と認めてくださるのです。愛は知的な部分よりも情的な部分に関わるものです。知的に知る

ことを非常に大切にした、西欧のルネサンスを通して、ギリシヤ的感覚に慣らされた私たちは、伝統的に、神との関りを「信じるとか信仰を持つ」とかいう、知的な響きの言葉で表現してきました。しかし、むしろ私たちのキリストに対する信頼、神への信頼と言って、心の態度、心の動きを語るべきです。

信頼し甘えてくれるものを受け入れる

神が私たちを受け入れてくださるのは、私たちの知的活動へのご褒美ではありません。母親や父親が子供に願うことは、自分たちのことを知的に良く知ってくれるとか、理解してくれるということではありません。それも大切ですが、もっと大事なのは、自分を頼ってくれる、自分を信頼してくれる、自分に甘えてくれる、心も体も自分に投げ出してくれる、自分を大好きだと思ってくれることです。私たちをご自分に似せてお造りになった、天の父である神も同じです。聖書を正確に理解し、正しい神学をしっかりと把握していることよりも、小さな子供が母親や父親を頼るように、神に頼ることを神は喜んでくださるのです。そう言う筆者自身は、所属する団体の中では、神学についてかなり厳格な態度をとっている一人であると、勝手に思っていますが・・・・。

アブラハムの理解の程度

アブラハムは神に信頼しました。それによってキリストの贖いの働きの実を、受け取ることが出来たのです。そのときアブラハムは、どれほど神について理解していたのでしょう。アブラハムが神について持っていた知的理解は、あまり多くはありませんでした。まだ神は、人類に対してご自分を啓示しておられなかったのです。聖書による神の自己紹介は、アブラハムの時から多分七百年ほども後の、モーセの時代になってからのことです。知的理解という点では、聖書を読み、神の自己啓示を学ぶことが出来る現代の私たちの方が、よほどよく神について知っているに違いありません。

アブラハムはどのようにして神を知ったか

アブラハムの神理解は、何かを読むとか誰かに聞いて学ぶよりも、彼自身の神体験、神とのお付き合いによるものだと考えるべきです。アブラハムが神に近づいたのではなく、神がアブラハムに近づいてくださったのです。アブラハムという人間の真面目な宗教感覚や、誠実な社会生活、すなわち「心に記された律法」を守る態度をご覧になり、ご自分の方から彼に近づいて下さったのです。ただし、いくら誠実な人間であったとしても、アブラハムは罪人の一人にすぎません。神が罪人に近付く行為は、神の至高の聖さのために絶対に不可能なことでした。神の聖さは激しく焼き尽くす火のようであり、近づくすべての

汚れを焼き尽くすからです。しかし神は、アブラハムがご自分の聖さのために滅びてしまわないように、ギリギリの線までお近づきになり、彼に語りかけ、彼との付き合いをお始めになったのです。アブラハムが神を知ったのではなく、神がアブラハムをご存知で、ご自分の全人類の救いの働きのために用いるのに、相応しいと判断して近づいて下さったのです。アブラハムは近づいてこられた神を、直観と体験を通して知ったのです。神はすでにキリストの贖いの御業をご存知であったために、罪人であるアブラハムにも、近づくことができたのです。

アブラハムが抱いた信仰

アブラハムは、実直な信仰態度を持っていたと思われますが、天地の創造主を知的に理解していたのではありません。彼の神に似せて造られた本性が、近づいてこられた神に本能的反応をしたのでしょう。たちまち彼は、語り掛けてくださった方を信頼しました。そしてそのお言葉に従って、示された土地に向かって旅立ちました。このとき、アブラハムは神を信頼したのです。パウロは、子供を授けると約束して下さった神を、アブラハムが信頼したという記事を取り上げ、アブラハムの信仰と、義と認められた事実の関係を説明しました。それで私たちは、あたかもその時に、アブラハムは神を信じ、義とされたかのように思ってきましたが、アブラハムがずっと前から神を信じ続けていたことは明白です。ただ、アブラハムが神を信じる態度を最もよく示したのが、子を授けられると信じた出来事であり、これがアブラハムの生涯を象徴していただけのことです。

アブラハムが信じた神

このときのアブラハムにとって、神は多くの神々の中の一人の優れた神であって、唯一の神でも絶対の神でもありませんでした。ただ、自分が仕え礼拝する唯一の神となっただけです。アブラハムはまだ他の神々の存在を認めていたと思われますし、他の神々を信じている人々を認めていました。ただしそのような中でも、メルキセデクのように、何かの理由で、アブラハムが信じていた神と同じ神を認め、礼拝していた者もありました。そのような人たちを、アブラハムは特別に大切にしていたことが分かります。

歩み寄って下さる神を感じる

アブラハムは、近づき語りかけてくださった神を、彼の宗教的感覚、本能的感覚で体験的に知って信頼しました。旧約聖書が語る「知る」という言葉の多くは、体験するという意味です。それは現代の私達ともある程度共通しています。アブラハムの時ほど明確ではなかったとしても、神は私たちに対しても密かに歩み寄り、語り掛けて下さるのです。私

たちは今、聖書を通してご自分を啓示し、歩み寄って下さる神を感じているのです。クリスチャンたちとの付き合いや教会の交わりの中で、神の歩み寄りと臨在を感じ、心の耳で神の語りかけを聴きとって、その神を信じるようになったのです。

私たちの神体験

実際のところ、現代の私たちの多くも、アブラハムのように、歩み寄って下さる神を感じて、すなわち体験して信じたのです。それは微かな感覚かもしれませんが、家族親族友人知人の中にいたクリスチャンの生活を見、その中に働いておられる神を感じたのです。その神を自分も信じて行きたいと願ったり、彼らの人生に感動して、自分もそのような人生を送りたいと考えたりして、クリスチャンになる決心をしたのです。私たちは知らず、気づきもしませんでしたが、見えない神は密かに私たちに近付き、心の耳に語りかけていて下さっていたのです。私たちは自分の選択意思と決断で、クリスチャンになったかのように思っていますが、知られないところで、神が私たちに働きかけておられたのです。「イエス・キリストが、あなたの罪の刑罰を身代わりに受けて、十字架の上で死んでくださいました。そのことを信じるならばあなたは救われます」などという、教理や信条を受け入れたから、クリスチャンになったのではありません。そんなことより、自分が幼い時から持っていた宗教感覚が、近づいて下さる神にぐっと反応したために信じたのです。

昔から感じていた神

私たちの多く、特に日本人である私たちは、昔から、目に見えず手で触れることもできず、口で説明することもできないけれど、自分に命を与え、生かし、養ってくださっている大きな存在を感じてきました。それは薄っすらとぼやけた感覚ではありましたが、確かに感じて来たのです。神に似せて造られた本能的感覚、心に記された律法が正しく機能して、霊である神を感じていたのです。日本人である私たちは、混沌とした八百万の神々の神話の中に生きながら、八百万の神々とはまったく違う、大きく、気高く、強く、誠実で、優しい存在を感じてきました。それで、聖書を読んだりクリスチャンの話を聞いたりしたとき、この神こそ真の神ではないだろうかと思ったのです。自然の中に感じた奥ゆかしいお方、嵐の中に感じた力強いお方、太陽の中に感じた暖かいお方、小さな草花の中に感じた繊細なお方が、この神ではないだろうかと感じて、頼ってみようかなと思ったのです。私たちもまた、キリストの贖いの働きを理解し、これを信じて救われたのではなく、アブラハムのように神を信じて救われたのです。あえて言えば、キリストがお語りになった「空の鳥を生かして下さる神、野の花を装ってくださる神」を信じたのです。クリスチャンの友人と楽しく語り合ったとき、合唱や英会話などの楽しい活動や礼拝会に参加したとき、ただ楽しかったのが九八パーセントだったかもしれませんが、ほんの少しだけ神の語

り掛けを心に聞いて、それに、本能的宗教心が反応したのかも知れません。キリストの十字架の贖いの話を理解したのでも、キリストの復活を信じたのでもありません。心が動いたのです。私たちの心を動かしてくださった至高の神は、キリストの十字架の贖いの働きを予めご存知だったから、その贖いの働きのゆえに、私たちに近づいて下さることができたのです。

ヨブに近づいて下さった神

ヨブ記に記述されているヨブと言う人物は、多分、アブラハムと同じころに生きていたと思われます。まだ、イスラエル民族が生まれる前のことですし、彼自身、イスラエルの家系とは何のかかわりもなかったようです。つまり、まったくの異邦人の立場に立つ人でした。この人も、彼の本能的霊的感覚で、神を信じていました。彼の実直な信仰態度を神は大いに喜び、大きな祝福で彼の人生にお報いになっていたことは、良く知られています。彼は、キリストを信じる信仰とか、救い主を待ち望む心などと言うところとは、まったく異なった宗教感覚の中で、生きていたのです。

このヨブが神を信じることが出来たのも、神ご自身の方から、ヨブに近づいて下さったからです。ヨブの友人たちも同じことです。このヨブと神との関りは、実に驚くほど深く、彼の信仰の気高さに眩暈がする思いです。彼は、養育係の教えも導きもないまま、まったく自分と神との関わりだけの中で、神と争い、戦い、沈黙の神に打ちのめされながら、大きな悟りに辿り着き、叫びました。「私は知っている。私を贖う方は生きておられ、後の日に、チリの上に立たれることを。」（ヨブ 19：25）ヨブは、苦しみの中に、二千年後においでになる贖い主、キリストを見たのです。

余談ですが、筆者はヘンデルによって作曲された、メサイアという膨大なオラトリオを聴くのが好きです。有名なハレルヤコーラスはパートⅡの終わりですが、その次、パートⅢの冒頭の、美しいソプラノのアリアが特に大好きなのです。ヨブの魂の叫びが清らかに、そして高らかに歌われています。このヨブの絶望の淵から発した希望の預言を聞くたびに、ヨブの信仰の崇高さに胸を打たれ、心を洗われる思いをします。つい数十年前までは、日本に住んでいてこの歌を聴くことなど不可能だったのに、今は you tube などで自由に聞きながら、このワープロが打てるのですね。

私たちは神ご自身が、イスラエルと言う選民の枠を超えて、人に近づいて下さる神を軽視しすぎてはいないでしょうか。神はキリストの十字架の御業をご存じであったため、人々に近づくことが出来たのです。

失われたものを捜す神

私たちの神は、人が神を見つけようと努力する以上に、失われた罪人を追い求め、探し求めておられる神です。罪を犯して身を隠したアダムとエバを、自ら声をかけて探し出して下さった神です。安全な九九匹を残して、あえて一匹の迷える羊を探しに出かけられる神です。そして、それを見つけると、大喜びされる神です。失われたコインを見つけようと、大騒ぎして探す神です。そして、今もなお、人間に呼びかけておられる神です。神に似せて造られた人間は、罪のために衰えたとはいえ、神の声を聞く能力を生まれながらにして持っているのです。私たちは、今もなお私たちを呼んでおられる神の声と、その声を聞くことのできる人間の特質を、軽視してはならないのです。

異邦人のための神学　（９）

人間の本性と偶像礼拝

礼拝したいと願う心

私たちは「偶像礼拝は罪である」と、何も考えずに断定します。確かに偶像礼拝は、聖

書が最も厳しく責めている罪です。ですから、使徒時代のクリスチャンも現代のクリスチャンも、すべての異教を偶像礼拝と決めつけ、忌み嫌ってきました。でも、偶像礼拝のどこが罪なのか、考えたことがあるでしょうか。真の神でないものを、神として拝む行為は確かに大きな過ちです。その過ちは最初の人間の罪の結果です。しかし、人間が神を拝もうとするのは本能的な欲求です。人間が神に似せて造られ、霊的な存在とされたのですから、造り主である霊的存在を崇め、礼拝しようとするのは当然の行為です。偶像礼拝を罪と呼ぶのは良いとしても、礼拝したいと願う心まで罪と断定するのは、とんでもない間違いです。

偶像礼拝よりも大きな罪

ただ人間は、罪のために神の許から追放され、神から離れた社会を築き上げる中で、神が分からなくなってしまったのです。人間には、崇め礼拝すべき存在があると本能的に感じても、その存在がどのような方であるか、すっかり分からなくなったのです。それで、わからないまま様々な被造物、あるいは空想の産物を拝みだしたのです。何かを礼拝しようとする思いは、まさに、神に似せて霊的な存在として造られた人間の、当然の欲求であり、それ自体を非難されるべきではないのです。むしろ、なにをも礼拝しないで無神論を振り回し、人間が偶然に発生したと主張したり、自分の力だけで生きているかのように振舞ったりしている人たちの方が、自分に与えられた神に似た人間性を無視するという、より大きく本源的な罪を犯しているのです。

礼拝は本能的欲求による

何かを礼拝したいという欲求は、罪ではありません。霊的性質を賦与された人間として当然なことです。その点を良くわきまえなければなりません。お腹を空かせた赤ちゃんが、乳首に吸い付くのも本能です。間違って親指に吸い付いても、叱りつける必要はありません。乳首を与えてやればいいのです。乳首を与えても親指に吸い付き続けていたら、何とかしなければなりません。深刻なのは、赤ちゃんが乳首に吸い付く本能を亡くしてしまうことです。乳を吸う本能を失くした赤子に、どうやって乳を飲ませればいいのでしょう。礼拝する本能を持たない者に、どうすれば礼拝することを教えられるでしょうか。我が家には拾われてきて八年ほどになる猫がいました。毎朝、私たちがお祈りする姿を横に見て、あくびをしながら座っている猫でしたが、いつまで経っても、お祈りする気持ちにはならないようでした。お祈りを教えることも不可能です。礼拝する本能がないからです。神の姿に似せて造られてはいないからです。

人類の偶像礼拝

人類の偶像礼拝は大きな過ちです。とは言え、神が忍耐をもって、しばらくの間は見過ごしてくださるほどの罪だったのです。（使徒 17：29－30）　神から追放された人間が神のみ姿を見失い、それでも神を礼拝したいと願い、神の代わりに他の物を礼拝してしまう、いわば愚鈍と迷いの罪でした。それでもその罪に対する処罰は、決してなま易しいものではありません。そのために人間は、愚かな欲望のままに任せられ、いわば神から見放され、罪の深みに陥るままに任せられたのです。その最初の結果、あるいは兆候は性的な廃頽です。それが霊感を受けた使徒パウロの的確で鋭い説明です。現在社会を賑わせているLGBTQ や不倫そして離婚とそれに続く家庭崩壊の問題の多くは、この神の処罰に深く直接つながっているのです。それにもかかわらずパウロは、この偶像礼拝を神が見過ごしてこられたほどのことと、語っているのです。

異邦人の偶像礼拝に対して寛容な神

神は、イスラエル人以外の偶像礼拝には、非常に寛容です。まだユダヤ人にはなっていなかった、イスラエル人の先祖たちに対しても同じでした。ラケルは父の偶像を盗んでヤコブの家に持ち込みましたが、何の咎めも受けていません。ヤコブが一念発起して、自分たち一族の中にあった偶像を全て棄却処分にしたのは、祖父アブラハムが召されて真の神を知るようになってから、約一五〇年もの長い年月が経ってからです。パウロは人類全体の偶像礼拝を、激しい言葉をもって糾弾し、それに対して神が下された処罰についても語っています。ところが、イスラエル人以外の個々の人間の偶像礼拝が、具体的に処罰された話は聖書に記録されていないのです。イスラエル人の社会に偶像礼拝を持ち込もうとした異邦人が、厳しい処分を受けたであろうことは容易に想像できます。イスラエル人が異邦人との結婚を禁じられたのも、偶像礼拝が持ち込まれないための処置でした。ところが実際には、イスラエル人社会に異邦人が入り込み、彼らによって持ち込まれた偶像礼拝が栄えた例はたくさんあります。神はかなりの忍耐と寛容を示されたのです。

異邦人の倫理的廃頽に対しては厳しい神

既に述べたように、人類の偶像礼拝に対して、神は彼らを欲望のままに放置されるという、処置を取られました。それにもかかわらず、人間の倫理的な廃頽が余りにも酷くなった場合には、たとえそれが異邦人社会のことであっても、神は厳しい裁きをもって臨んでおられます。ソドムとゴモラが良い例ですし、ノアの洪水もそうです。預言者ヨナが遣わされたニネベは、非常に面白い例です。神は、道徳的な廃頽の極みに達していた異邦人の町、敵国の首都、ニネベを滅ぼすと言ってヨナを騙し・・・嘘までついて・・・無理矢理にニネベに行かせ、滅びのメッセージを語らせたあげく、危機一髪のところでニネベをお

救いになりました。神は人間の本性に叛いた生き方には、厳しく対処しておられます。それなのに、偶像礼拝そのもののために、異邦人が厳しく処罰されたことはないのです。神は異邦人の偶像礼拝の中に、礼拝する人間の本能的姿、人間性の根源を見ておられるからだと言えるでしょう。

そのように考えると、たとえばキリストの誕生に当たって、贈り物を携えて東方からやってきた数人の「博士」たちは、たぶん東方の宗教を信奉していた異教徒、占い師に近い人々だったと考えるのにも、納得がいきます。異教徒であっても、真面目な礼拝態度と追求心を持った人たちには、神は優しく介入し、彼らの贈り物をお受け取りにさえなるのです。モーセが義理の父であった異教の祭司の示唆を受け入れ、これを採用したのも理解できます。

筆者の個人的体験

一九六八年、筆者はまだアメリカの施政権下にあった、沖縄北部（山原＝やんばる）の金武村で、開拓伝道に着手していました。聖書学校を卒業して、まだ三年にもなっていない頃でした。五〇歳近くにもなろうかと見えた男性が私を訪ねてきました。彼はその日の早朝まだまだ暗いうちに、彼が長い間仕えてきた神様のお告げを受け、伊江島という離島を小舟で出発して、八時間もかけて私に会いに来たということでした。

「金武村へ行って表通りを歩き、大きな白い十字架の印のある家に入って主（ぬし）に話を聞き、その言うことをすべて受け入れなさい」と、彼の神様がおっしゃったというのです。キリスト教以外の宗教はみな偶像教で、汚れたものであり、真の神の敵であると理解していた筆者には、偶像の神が、長い間自分に仕えてきた者に、「キリシター（キリスト教）の伝道者のところに行って話を聞き、それをその通りに受け入れなさい」とおっしゃったなどという話は、信じることができませんでした。

でも朝早くから長い距離を歩き、小舟を雇い、幾度もバスを乗り継いで、自分が仕える神に言われた通りにやってきて、午後の灼熱の大通りを歩いて、教えられたとおりの白い十字架の印を見つけて入ってきた男を、そのまま返すわけにも行きません。納得がいかないままでしたが、ある意味では伝道のチャンスとばかりに、天地創造から始め、人間の罪と堕落、神様の救いの計画とキリストの誕生、そして十字架の死と甦り、さらには信仰による救いと、聖霊によるクリスチャン生活など、四時間ほども語り続けました。

一通りの話を終えたとき、男は「良くわかりました。今お話しになったことはみな、そのまま信じます。ありがとうございます」と、こちらが恐縮するほど深々と礼をされまし

た。「もう今日はバスもないはずですから、ひと晩ここに泊まって行ってはいかがですか」と、筆者は強く勧めたのですが、男は「金武には古い友人がいるので、そこに泊めさせてもらいます」と、もう一度深く頭を下げて帰って行きました。

長い間、筆者はこの出来事を理解することができませんでした。でも今は、この出来事の背後には、天地創造の神の憐れみがあったのだと感じています。この異教徒の男に、神が近づいて下さったのです。それは、キリストの誕生のとき訪ねてきた、東方の占い師たちにも言えたことです。

1968 年、金武村の大通りにあった、大きな白い十字架の印の建物と筆者。

イスラエル人の偶像礼拝に対して厳格な神

聖書が激しく糾弾し、神の厳しい処罰を記録しているのは、イスラエル人の偶像礼拝です。神はイスラエル人の偶像礼拝に対しては、非常に厳格でした。それにはそれなりの理由があったのです。神はイスラエル人に向かって、非常に明確にご自分を現し、様々な方法で自己紹介をされただけでなく、イスラエル人を奴隷のくびきから解放し、ご自分の民とされたからです。先に述べたように、イスラエル人は神との特別な契約関係に入った民族でした。神とイスラエルとの関係は、夫と妻の関係で譬えられているほどなのです。ですから、イスラエルが偶像を礼拝することは、妻が夫以外の男に心を寄せ、身を任せる姦淫の罪として語られ、厳しく裁かれ、処罰されているのです。

異邦人の罪とイスラエル人の罪を同等に扱う間違い

聖書では、イスラエル人の偶像礼拝の罪と異邦人の偶像礼拝の罪は、明らかに区別されていました。しかしキリスト教会では、ほとんどの場合、これを一つのものと理解して、異邦人の偶像礼拝をイスラエルの偶像礼拝と同等に扱い、激しく責め立ててきました。

それが、たとえ真の神ではなかったとしても、真面目に何かを礼拝して来た人たちの激しい反感と怒りを買い、宣教の妨げになってきた事実は否めません。異邦人が何かを礼拝するのは、神に似せて造られた人間性の発露なのです。偶像礼拝を憎むあまり、霊的動物である人間の、礼拝本能までも責める間違いをしてはなりません。

イスラエルから偶像礼拝が消滅したとき

モーセの時以来、偶像礼拝の罪を犯しては、神の刑罰を受けることをくり返して来たイスラエルは、バビロンへの捕囚という厳しい裁きを境に、完全に偶像礼拝を断ち切ることが出来たようです。異邦人の配偶者を離婚するようにという、バビロンから帰った指導者によって命じられた厳しい処置は、イスラエルから偶像礼拝を徹底的に排除し、新たなイスラエルの復興のために、一致団結する心意気を盛り上げるための方策だったと思われます。ともかくこの時点から、イスラエルに偶像礼拝を見ることができなくなったのです。

新しい偶像礼拝

イスラエルから偶像礼拝が消滅してしまったのは事実ですが、それから五百年余りが経過したイスラエルで、人々を救う働きを進めておられたキリストは、新たな偶像礼拝の風を感じて、「神と富に兼ね仕えることはできない」とおっしゃいました。このときの「富」という言葉は単なる富ではなく、「富の神」を意味する言葉でした。すでに定着居住文化となっていたイスラエルでは、人々の最大の関心は富を蓄積することになっていたようです。金を崇め、金に捕らわれ、金のために労苦する人々の姿、金を求め金儲けに奔走する者たちの生きざまを、キリストは「金を偶像としている」とご覧になったのです。パウロは、「貪る者は偶像礼拝者である」と、言葉を変えて同じ趣旨のことを言っています。

キリストの時以来、富の神「マモン」が、世界中の神になってきました。資本主義の下の歯止めの利かない自由経済に流され、グローバル化を促進し、富の一極集中に対して黙して語らないばかりか、自らがその甘い蜜にどっぷりと浸って、太り続けている多くの現代のアメリカの教会も、それに影響を受けて、やれ「繁栄の福音だ、それ「教会成長だ」と騒いできた日本の諸教会も、マモンを崇める偶像礼拝に陥っていることに、気付かなければなりません。異邦人や異教徒の偶像礼拝を責める前に、キリスト教徒は自らの偶像礼拝を、悔い改めなければなりません。

異邦人のための神学　　（１０）

養育係

養育係を与えられていた民族

使徒パウロによると、イスラエルには、彼らをキリストへ導くための「養育係が与えられていました。(ガラテヤ 3：24)　ここでパウロが言う養育係とは「律法」のことです。イスラエル民族は律法を与えられた民族であり、イスラエル民族だけが律法、すなわち養育係を与えられていたのです。

また、ここでパウロが言う律法は、狭い意味の律法、すなわちモーセの律法だけではないことが分かります。一連の教えの中に、「聖書」という言葉が、律法と同じ意味で用いられているからです。パウロはモーセの律法を第一に語りながら、それに止まらず、もっと広く、旧約聖書全体をとりあげて、イスラエル民族を、キリストを信じる信仰に導く、養育係であると言っているのです。

養育係とは

パウロが言う養育係とは、当然、当時のグレコローマン社会での養育係です。彼の時代の裕福な人々は、自分たちの子どもが成人するまで、責任を持って教育指導する人物を雇っていました。その雇われた人物が養育係です。多くは教養のあるギリシヤ人奴隷で、家に住み込み、学問的な教育だけではなく、社会生活全般の指導と訓練も行っていたようです。従って彼らの役目は、現代の家庭教師などとは大いに異なって、子どもをしっかりと教育し、必要とされていたあらゆる学問を身につけさせ、加えて、立派な社会人として成長するように、多方面にわたって面倒を見ることでした。有名なローマの暴君ネロには、これまた高名なギリシヤ人哲学者セネカが、養育係として仕えていたことは良く知られています。

律法が養育係であるという意味の一般的理解

パウロが語っている、「律法が養育係である」という言葉の一般的な理解は、前後の記述からも分かります。律法によっては罪の自覚が生じますが、その律法を守ろうとどんなに努力しても守り切れないために、ついには、律法を守ることによって義とされるのは不可能だと悟り、義とされるための他の道を求めるようになります。そこで、信仰によって得られるキリストの義への期待が生じるということで、律法はキリストを信じる信仰への導き手、養育係であると見做すことが出来るという意味です。

キリストが、誇り高い金持ちの青年を愛しながらも、「自分の持ち物をすべて売り払い、貧しい者に施しなさい」とお命じになり、青年を失望させてお帰しになったのは、この養育係の働きの最後の部分を、ご自分でお引き受けなさったからです。青年は、「自分にはできない。自分は律法を守り切れない、惨めな罪人に過ぎない」と、自覚しなければならず、キリストを単に先生と認めるのではなく、救い主と認めて「哀れな罪人である私をお

救い下さい」と、再び訪れて来なければならなかったのです。

より正確な理解

しかし養育係としての律法の意味は、それだけに止まりません。パウロは、モーセの律法だけでなく、旧約聖書全体を律法として理解し、旧約聖書に記されている歴史も預言書も詩歌も知恵文学も、キリストを信じる信仰へ導く、養育係として与えられていると考えていました。それで養育係という意味がとても明確になります。旧約聖書全体が、イスラエル民族を「キリストを信じる信仰」へ導くために、それを目的として与えられたのです。モーセの律法の中にある宗教祭儀の定め、幕屋や犠牲や祭司の務めなどの事細かい律法も、やがて現れるキリストを指し示す雛形です。単に律法だけでなく、出エジプトの歴史的出来事にも、四〇年にわたる荒野での出来事の中にも、イスラエルの歴史全体にも、キリストを指し示すものがたくさん見出されます。もちろん、預言書には、キリストに関する直接的な預言が、数多く記されています。

旧約聖書は、イスラエル民族がやがておいでになるキリストを受け入れ、信じ、救いに入ることが出来るように、あらゆる面で準備を整えるように、それを目的として与えられたのです。だからこそ、さまざまな困難があったとは言え、ユダヤ人たちは天地創造の神を認め、救い主キリストがおいでになることを予測し、期待を大きく膨らませ、探し求め、追い求めるようにさえなっていたのです。旧約聖書がなければ、イスラエル人はキリストに関する知識も持たず、期待も抱かず、無関心のままだったはずです。たとえキリストが出現したとしても、彼に聞こうとする者など、現れるはずもなかったのです。

養育係に教えられた神学

パウロの「信仰による義」の神学も、徹底してこの養育係の教えと導きを基盤としたものでした。それは、パウロの議論が、終始、ユダヤ人的な感覚によって、ユダヤ人の立場から考えられたということであり、ユダヤ人の側から見た普遍的な福音の神学でした。その目的も、異邦人に向かって、「福音はあなたがた異邦人の為である」と語るのではなく、ユダヤ人に対して、「福音はユダヤ人だけのものではない」と、納得させるための議論でした。もちろん、パウロの著作の一部は異邦人の読者を想定して書かれていますが、その異邦人ですら、ユダヤ人の会堂に出席していて、すでに必要な儀式を受けてユダヤ人になっていたか、半分ユダヤ人になりかけていた異邦人でした。彼は、まったくの異邦人へ向けての神学は展開していないのです。異邦人の立場、すなわち、養育係を与えられていない人々の発想では論じていませんし、養育係を与えられていない人々へ向けても、語り掛けてはいないのです。ただ、使徒の働きを読むと、彼が例外的に異邦人へ向けて語った言

葉が、僅かだけ記されています。一四章の、バルナバとパウロがそれぞれゼウスとヘルメスに間違われて、騒動になった事件で彼らが語ったことと、17 章のアテネの神殿で、偶像礼拝者たちを前に語ったことです。そこには、さすがに異邦人への使徒だと思わせる、片鱗は現れていますが、まさに、片鱗のままで終わっています。パウロはユダヤ人の内側からユダヤ人の神学を打ち破りましたが、ユダヤ人の外側に立ち、異邦人の立場、異邦人の観点から、異邦人の神学を構築することはなかったのです。

ユダヤ人の外側の神学

ユダヤ人の外側、つまり、養育係を持たない人の発想で、養育係を前提としない神学は可能でしょうか。残念ながら、それは不可能と言わざるを得ません。人間の知識は決定的に限られ、経験も不足しています。霊的な感覚も不充分で、自分の創造主さえ忘れ去っています。人間は養育係なしには、つまり、神の側からの語り掛け、啓示が無い限り、救いについて明確に語ることが出来ないのです。とは言え、ひとつ大切な事実があります。それはこの養育係として与えられた旧約聖書の中に、旧約聖書が与えられる前のことも記され、旧約聖書によらない信仰と、旧約聖書によらない神知識、そして旧約聖書とは関りがない救いが記されているという事実です。

モーセ以前の人々

律法、すなわち旧約聖書は、モーセを通して与えられたのが最初です。モーセ以後のイスラエル人は、その養育係によって育てられました。でもモーセ以前の人々は、養育係を持たないままで信仰を持ち、救いに入っています。さらに言えば、キリストが登場する以前のイスラエルの聖徒たちは、みな養育係を持っていたとしても、養育係が教えまた指し示すキリストを知らなかったのです。ごくわずかの人々は、養育係が指し示すキリストの姿を、雛形の中に、あるいは預言の中に垣間見ることが出来たかもしれませんが、それは例外中の例外に過ぎません。養育係は、キリストが登場したときに初めて、その目的とする機能を果たしたのであり、キリストの姿を知らない人々には、養育係としての機能を果たしていないのです。

キリストを知らない人に養育係は用を成さない

言い換えると、キリストのことを知らない人に対しては、たとえ養育係であったとしてもその機能を十分に果たすことはないということです。たとえば、異邦人である日本人、キリストが歴史上の人物であったかどうかさえ疑っている日本人に、養育係は養育係としての働きをすることが出来ないのです。そのために、今、私たちには養育係のいない神学

が必要なのです。しかもその神学は、単に人間の理屈や空想や霊的妄想から生まれたものではなく、神の誤りのない啓示である聖書に基盤を置き、それに矛盾せず、調和していなければなりません。その意味で、養育係である旧約聖書を度外視した神学はあり得ないのです。

ユダヤ人なのにあまり養育係の世話にならなかった人々

キリストが接触した人々の中には、養育係を与えられたイスラエル人でありながら、あまり養育係のお世話になっていなかった人たちがいました。民族としては律法を与えられていながら、個人としてはその律法を学ぶ機会が乏しく、一般の人々からは罪人として軽蔑され、疎外され排斥されていた、売春婦や税金取りのような人間たちでした。キリストは、このようなあまり養育係のお世話になっていなかった個人に対しては、非常に優しく、寛容と忍耐をもって接し、厳しい裁きの言葉などを語っておられません。そのお取り扱いは、ちょうど異邦人に対するものと同じでした。ところが養育係である律法をがっちりと学んでいた人々、パリサイ人やサドカイ人、あるいは律法学者と言われる人々に対しては、非常に高い基準と厳しい態度で臨んでおられます。キリストの教えには、民族としてユダヤ人を見る見方と、個人としてのユダヤ人を見る見方が混在しています。

養育係の力を借りない伝道

キリストへの信仰は、養育係の存在を前提としたものです。この養育係を無視しても、軽視しても、キリストを理解することはできず、信じることもできません。養育係が与えられていなかった異邦人に対して、突然、キリストがどうのこうの、救い主がああだこうだと言っても、まったく意味を成さないのです。じっくりと養育係の教えを請わなければなりません。とは言え、養育係の言うことにしっかりと耳を傾け、それを理解するのは容易なことではなく、非常に長い時間も必要です。それでつい、私たち、異邦人にキリストを信じる信仰を勧めている「異邦人伝道者」も、養育係を無視し、あるいは軽視し、一足飛びに救い主の話を始め、それ十字架だ、甦りだ、悔い改めだ、信仰だと語り出したくなるのです。

使徒パウロは、囚われの身となって船でローマに送還される途中、激しい嵐に遭って地中海に浮かぶ小島マルタに流され、まったくの異邦人と一冬、およそ三カ月も生活を共にしたことがありました。そこでも彼は聖霊の力に満たされ、癒しも行い奇跡も見せて、大きな尊敬を勝ち取りました。しかし、どうやら一人の回心者も出していないのです。多分この島には、ユダヤ人が住んでおらず、当然会堂もなかったのでしょう。つまり、養育係を持っていなかった島民に、養育係の教えることを教え、救い主を理解させるには、時間

が足りなかったのです。パウロが、三カ月にわたって福音を語らずに過ごしたなどとは考えられません。しかし、養育係の働き無くしては、流石のパウロがどれほど熱心に語っても、救い主について理解されることがなかったのでしょう。

養育係が与えられる前の救い

養育係である律法が与えられる前のことが、その養育係の直接の教えや命令の部分ではなく、物語の部分に記されています。そこには養育係である律法に関わりのない、人間の生き方、そして信仰、神の人間に対する働きかけが記されているのです。すなわち、天地創造の物語から、モーセを通して律法が与えられるまでのことが記されている中に、律法によらない神学を構築できる基本的要素があるのです。神学は聖書の物語の部分からではなく、より明確な教えや命令の部分から、構築されなければならないと主張する人たちもいますが、物語の記述の部分からこそ、重要な神学が構築される場合もあるのです。創造主に関わる重要な神学の部分、いわゆる神論は、天地創造の物語から始まります。というより、天地創造の物語は、神学が物語化されて語られたものなのです。

律法とは関わりなしに信仰を持った人々

聖書には、律法と関わりなしに信仰をもったと思われる人々のことも記されています。アブラハム、イサク、ヤコブ、さらに律法が与えられる前の彼らの子孫や親族たち、ブラハムと同時代の人物で、神の大祭司と言われたメルキセデク、あるいはアブラハムと同時代かそれよりも前かと言われているヨブと友人たち、さらにノアと彼の家族たちもそうです。遡ればアダムとエバに行き付くでしょう。アブラハムの物語を読むと、彼が接触した人々の中には、不鮮明ながら神を恐れていた人々が、相当数いたであろうと想像できます。さらには、律法が紛失されていた期間のイスラエル、たとえば士師記の時代のイスラエル人たちも、律法なしに、各々自分の目に正しいと映ることを行っていたと語られています。たとえ例外的だと言われても、彼らは律法なしに神を信じる信仰を持つことが出来たのです。サムソンもギデオンもエフタも、律法が指し示すキリストを知らないまま、神を信じ、神の許に行くことが出来たのです。罪に汚れた人間が、絶対に聖い神の許に行くために、キリストを知らなくても良かったのです。キリストを指し示し、罪を教え、贖いの必要性を理解させる律法がなくても、人々は神の許に行けたのです。

キリストを信じる信仰によらない救い

キリストを信じる信仰によらない救いがあったという事実は、キリストを信じることによって救われると教えられ、そのように信じきって来た私たちには衝撃的なことです。本

当のところ、十年以上も前に、あるキリスト教紙と福音雑誌に依頼されて、同様の趣旨の文章をお送りしたことがあるのですが、このような内容の文は載せることが出来ないと、ともに丁重に送り返されてきました。牧師仲間からも、「彼はとうとう異端に走っているようだ」と噂されていると、聞いたこともあります。それでも真面目に聖書を読み、正確に理解しようとすると、そのような結論になるのです。キリストによる救いは、私たち人間のキリストに関する知識や、キリストに対する信仰によらないのです。くり返しますが、アブラハムはキリストを信じていなくても義とされました。つまり救われたのです。

アブラハムは神に知られていた

アブラハムはキリストを信じておらず、キリストのことは知りもしませんでした。問題は、アブラハムがキリストを知っていたか、その贖いの真理を理解していたかではありません。贖いのご計画をお立てになった神が、アブラハムの信仰をご存知だったかどうかです。贖いの働きを遂行された、キリストがご存知だったかどうかです。アブラハムはキリストを知りませんでしたが、キリストは、アブラハムのすべてをご存知だったのです。キリストは、アブラハムの前から生きておられたからです。救いは人間の理解、知識という行いによらず、神に対する素朴な信頼、幼子が母親を頼るような信頼によるのです。

パウロの議論の前提

パウロがキリストを信じる信仰と、その信仰に至るための知識を強調したのは、パウロが、旧約聖書という養育係を前提にして、それに立った論を組み立てたからです。養育係がいた以上、パウロがキリストを信じる信仰と、その信仰に至るための知識をもっていて当然だったのです。持っていなければならなかったのです。もしも救いが、人為によらないもの、行いによらないものならば、学ぶとか知るとかいう、人間の「行い」にもよらないはずです。それでもキリストを知る知識を強調し、その知識に立った信仰を語ったのは、パウロの論が、養育係である聖書を持っていた人々を対象としていたからです。つまりパウロは、異邦人への使徒でありながら、養育係を持たない異邦人のための神学には、思いを及ばせることがないままに、終わってしまったのです。それでも神はそれを「良し」とされたのです。異邦人の神学を真剣に考える異邦人が出現することを、神は予期しておられたからだと思うのです。

主の御名とは何か

パウロは、「主の御名を呼び求める者は、誰でも救われる」と、旧約聖書を引用して語り、そこにはユダヤ人とギリシヤ人との区別はないと教えました。この場合の「主の御名」

はどのお名前でしょうか。ヘブル語のお名前でしょうか。ギリシヤ語のお名前でしょうか。あきらかに、パウロはキリストのお名前であるという前提で語っていますが、パウロが引用したヨエル書の「主」は、キリストのことではなく、「アドナイ」、現在の日本語の聖書の中には、太い文字の「**主**」と訳しているものがある、特別なお名前です。つまり、神という意味です。ではその神のお名前は、なんだったのでしょう。このころは、すでに、ヤーヴエという名は尊く気高すぎて、人間は口にすべきではないとされ、その四文字のお名前は、たとえ文字で残されていても、発音が分からなくなっていたのです。その口に出せない四つの文字の代わりに用いられたのが、「主」という意味のアドナイでした。そのアドナイを、現代の日本語訳聖書のいくつかは、一般的な意味と区別するため太い文字の「**主**」にしたりしているわけです。

神なるイエス

ですから、この「主」という言葉は、神を意味するものであって、そのままイエスに対して用いられ、「神なるイエス」という意味になったのです。もちろん、イエスが在世当時、「主イエス様」と呼びかけた人たちは、それほどの意味を込めていたわけではなかったと思われます。当時のイスラエルでは尊敬する人には、誰でも、主と呼びかけていたようですから、それだけの意味にすぎなかったと思われます。しかし、これが新約聖書に用いられる場合は、明らかに旧約聖書のアドナイに倣って、神という意味が込められていました。イエス様が復活され、疑い深いトマスに現れて語りかけられたとき、恐れをなしたトマスは、イエスが神であることを告白して、「私の主、私の神」と言っています。イエスが単なる主ではなく、神としての主であると告白したのです。

万物の創造者を特定する呼びかけ

旧約聖書には、ほかにも神の名が出てきます。最も一般的なのは「エル」ですが、どういうわけか、私たちの万物の創造者である神の自己紹介には、用いられていません。荒野で燃える芝の中からご自分を現してくださったとき、神は「私はあるというものである」という、なんとも難解な自己紹介をされましたが、「エル」は用いられていません。天地創造の神として、物語をとおして自己紹介してくださったときも、どういうわけか「エル」は用いられず、代わりにエルの複数形である「エローヒム」が使われています。実際のところ、神に選ばれた人々は、初めのころ、神をなんとお呼びしたらよいのか、分からなかったようなのです。それで神は、「アブラハムの神」と呼ばれるのを、よしとされたようです。それから、「アブラハムとイサクの神」となり、ヨセフの時代以降は、「アブラハム、イサク、ヤコブの神」という呼び方が一般的になったのでしょう。単純に主の御名を呼ぶといっても、どの名を呼ぶべきかは、厳密に言って定かではないのです。ただ、たとえど

のようにお呼びしようとも、天地万物の創造者であるお方を、特定する呼び方をするべきだということです。

ユダヤの歴史の中の神の御名と、日本の神の名

ユダヤ人の神の御名は、歴史の中で変遷してきました。ユダヤ人を含む当時の中東の人々は、多くの神々といわれるものの中で生きていたために、自分たちの神を特定して呼びかけ、礼拝する必要がありました。これは日本でも同じです。日本人が神というとき、多くの場合、それは八百万の神々、あるいはその中の一つの神という意味です。八百万もの神々の中から、自分が祈る相手を特定するのですが、日本人の場合はそれが非常に曖昧です。多くの日本人は、神なんていないと言っておきながら、不思議なことに祈るのです。それは日本人がいないという神は、八百万の神々という存在のことで、自分が祈る、あるいは崇める神はそれらの神々とは次元の違う存在、神ではない存在、それでも神という言葉しかないために、とりあえず神と呼んだりする存在、いわば、神ではない神なのです。日本人の多くが理性的で、神々の存在は理屈では否定しますが、心情的には、目に見えず手で触れることもできず、言葉で説明することもできない、気高く、大きく、力強く、優しい、不変普遍の存在を感じ、その方に静かに手を合わせるのです。日本人に必要なことは、この気高い存在を意識して、この存在のみを礼拝対象として崇めることです。

美奈子の神様

筆者がマニラで日本人教会の責任を持っていたとき、そこに、ある新聞社のマニラ支局長の奥様が出席していらっしゃいました。少しばかり親しくしていただき、彼女たちが日本に帰国した後も、交わりを持っていました。美奈子という名の彼女が癌の末期を迎えたとき、ちょうど日本の支援教会を巡回していた私たち夫婦は、横浜の病院に彼女を訪ね、最後のお交わりをすることができました。彼女はやせ細ってはいましたが、輝くような笑顔で話に花を咲かせてくださいました。なかでも、彼女のご主人がついにクリスチャンになった時の話を、嬉しそうに、楽しそうに、そして幸せそうに語ってくださいました。「夫はね、その時、なんて神様に呼び掛けて祈ったらいいのかわからなくて、結局、『美奈子の神様』ってお呼びしたんですって。」

美奈子の神様ではいけないのでしょうか？　それでいいのです。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、美奈子の神です。呼びかける神が特定さえできれば、それでいいのです。

一つの神

神はエジプトのパロを苦しめて、神の御名が全地に告げ知らされるように、お図りになりました。(出 9:15〜16) ゼカリヤは、いろいろな名で呼ばれた主は一人、名も一つになると予言しています。(ゼカリヤ 14:8〜9) 主キリストを呼んでも、父なる神を呼んでも、エローヒムを呼んでも、ヤーヴエを呼んでも、アドナイを呼んでも、一つなのです。キリストを呼ばなくても、エローヒムを呼べば良いのです。

イザヤ書 9 章6節には、やがて来られる救い主について預言され、「一人のみどりごが、私たちのために生まれる。一人の男の子が、私たちのために与えられる．主権はその肩にあり、その名は『不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君』と呼ばれる。」と記されています。キリストが父なる神と一つであることを否定する、異端と呼ばれるグループの人たちは、この言葉を解説し、キリストが父なる神とは別の神であると、一所懸命に説明しようとしていますが、やはり、キリストは神と一つであると理解する方が自然です。キリストご自身が、「私と父とは一つです」と語られたことを、素直に受け取るのが良いでしょう。(ヨハネ 10:30)

異邦人のための神学　（１１）

救いとは何か

救いの宗教

筆者が信奉する教えは救いの宗教です。「キリスト」という言葉はもともとギリシヤ語で、「救い主」という意味です。またその教えは「教い」を中心にして、すべて、救いに関わります。なぜ人間には救いが必要なのか、救いとは何か、救われなければ、人間はどうなるのかなどについて教えます。さらに人間は救われるためにはどうしたら良いのか、救い主とはどういう意味か、救い主はどんな働きをして救いを完成されたのか、救われた人間はどうなるのか、その上、救われた人間はどういう生活をすべきなのかまで、かなり細かく教えます。

筆者の信仰が依って立つもの

筆者の信仰が依って立つのが、聖書と呼ばれる書物です。それは、神から与えられたと信じられています。聖書はキリストが生まれる前に書かれた部分と、生まれた後に書かれた部分に分けられます。キリストが生まれる前に書かれた部分は、旧約聖書と呼ばれていて、人間に救いの必要性を教え、救い主の到来を予告し、救い主を受け入れる準備をさせるものです。この旧約聖書の役割を、使徒パウロは、キリストを信じる信仰、すなわち救いへ至らせる「養育係」という言葉で、端的に表現しています。

一方キリストが誕生してから書かれた部分は新約聖書と呼ばれ、救いの道を整えて完成されたキリストの生涯について記し、その完成された救いを獲得するに、人はどうすればよいのかを教え、さらに、救われた者たちの生活はどうあるべきかを指し示し、その上、救いの崇高さや永遠性などについて説明しています。

要するに筆者の信仰が立っている基盤は、旧約聖書と新約聖書という合計六六巻の書物なのです。これが、救い主であるキリストを信じることができるように、すなわち信頼することができるように人間を導き、そして信じた後は、キリストを信じている者としてふさわしい生活ができるように指導し、やがて訪れる救いの完成の時まで、信仰を持続する

ように励ましているのです。救いとは、この救い主であるキリストを信頼することによって、神から与えられる神との新しい関係のことです。人間の罪のために、いったん断ち切られていた神との愛の交わりを、神の一方的な働きかけによって回復させられて、可能になる新しい人生です。

人間はすべて救いを必要としている

聖書によれば、すべての人間は救われなければなりません。この世に生を受けた人間はすべて、最初の人間の罪の結果として、造り主であり絶対に聖いお方である、神から追放された環境に生まれたのです。人間は、最初の人、アダムとエバの罪のために神から遠ざけられ、自分たちの力では絶対に引き返すことが出来ないようにされてしまいました。神はご自分と人間たちの間に、ケルビムと輪を描いて回る炎の剣を置いて、人間を遠ざけられたのです。こうして人間は、誘惑によって罪を犯させた神の敵、悪魔の支配に陥ったまま、人間社会を形成することになったのです。その悪魔が支配する人間社会に生まれた人間は、すべて、生まれながらに神との交わりを失って、霊的命の流れを断ち切られてしまったのです。それで人間は、動物的命は持ち続けても、霊的命を失った生ける屍として、悪魔の支配の下で苦しみながら、生きることになったのです。個々の人間が罪を犯したことがあるかどうかの問題ではなく、あるいは罪を犯した先祖の血筋によるというのでもなく、すべての人間は神から隔離され、神を敵としている悪魔の権力の下に生まれ、罪を犯さずに生きることはできない状態にあるのです。そのために人生は、あらあらゆる苦難に満ちています。

生ける屍

人間は神に似せて造られた美しい性質を、本質として持ち合わせていながら、悪魔の支配に陥って、その美しい性質を傷つけられ、充分に生かすことができなくなっています。そればかりか罪の力に負けて、意識的にそして積極的に、罪を犯しさえするようになっているのです。すべての人間は神から隔離された社会に生まれ、神からの霊的な命と祝福と力を、本来あるべき形では受け取ることができなくなり、霊的な存在としては死んだ状態、「生ける屍」となっていて、すでに滅びの中にいるのです。一度このこの世に生を受けた人間は、みな死の中に生まれた人間であり、すでに滅んでいる状態なのです。

永遠の滅び

人間は、霊的にはすでにいのちの源である神から離れ、死んだ状態でこの世に生まれ、「死んだ状態」で生きています。その死んだ状態で、滅びの中に「生ける屍」として生き

ているうちに、どうしても救われなければならないのです。悪魔の支配の下、生ける屍として生きていながら、神の支配の中に生まれ直す、新たな経験、生まれ変わり、あるいは第二の誕生をして、新らしい命を受けるのです。その第二の誕生、新生の体験をしなければ、人間は、人間本来の生き方ができないままに、この世での命を終えてしまうのです。この世の命が燃え尽きて死を迎え、この世を去った後に、すべての人間は、聖く正しく峻厳な神の公平な裁きに遭うというのが、聖書の教えです。そこで裁かれる者は、善人も悪人もすべて、罪の中に生まれ罪の中に生きた者として、永久に神の懐に戻ることができない、「永遠の滅び」の中に入れられてしまうのです。だから聖書は、「今は恵みの時、今は救いの日です」と語り、まだ救いに入る機会が残っている、「今という時」を生かし、救いを獲得するように勧めているのです。

キリストの本来の目的

キリストが、救い主としてこの世界に到来された本来の目的は、悪魔の支配に苦しみ、滅びの中に生きている人間に救いをもたらし、永遠の滅びからも逃れることができるようにして下さることです。人間はやがて滅びに入れられるかもしれないのではなく、すでに滅んでいるのです。霊的には霊的命の源である神から追放され、霊的命の供給がないまま、動物的に生きているだけなのです。とは言え、まだ救いの機会が残されているのです。この永遠の滅びから免れさせる、救いの一面を強調するために、「永遠の命」という表現が用いられています。永遠の滅びが、造り主である神からの永遠の隔離であるように、永遠の命とは、造り主なる神との永遠の交わりです。この永遠の交わり、すなわち未来に現わされる完全な救いを、聖書は次のように謳いあげています。「見よ。神の幕屋（神の住まいという意味で、神の濃厚な臨在の象徴）が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目から涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、さけび、苦しみもない。以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」

救いの真髄

日常会話の中では、この世に存在する様々な人生苦から、助け出されるという意味で、「救い」という言葉が用いられることが多いでしょう。しかしそれは滅びの結果、悪魔の支配に陥った結果苦しんでいる、様々な困難からの救いであり、苦しみの原因そのものからの救いではありません。悪魔の支配、罪の力から救われなければ、問題は解決しません。また悪魔の支配は、人間が神に追放されたことの結果ですから、完全な救いは、人間が神に立ち返ることによってのみ可能となります。人間は、自分をお造りになった主なる神に立ち返り、神の懐に抱かれ、天地創造以前に計画されていたとおりに、神の命に満たされ、

神の祝福を充分に受け取るのでなければ、本当の喜びを感じられないのです。救いとは、造り主である神に帰り、霊的な命の回復を実現していただき、神との霊的な交わりを取り戻すことです。それが救いの真髄です。キリストは救い主として、人間を神に立ち返らせることができるように、すべてを整えて下さったのです。

神に立ち返らせる働きを遂行するご自分を、キリストは、「私は道であり、真理であり、命なのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとにくることはありません」という言葉で、表現しておられます。人間は、神に似せて造られた最終段階で、自由意思を与えられ、その自由意思をもって神を愛し、神に仕える選択をすべきだったのです。ところが人間は、神に反逆する道を選び、神から追放されて悪魔の支配の中に落ち込んでしまったのです。しかしそれにもかかわらず、人間は、神の一方的愛の取り計らいによって、ここで再び、神のみ許に帰ることができるように、機会が与えられているのです。

キリストの働き

この地上で生きられた三三年余りの生涯で、キリストは様々な活動をなさいました。ともすればその活動の多様さに目を奪われて、キリストの本来の働きに注意が向けられなくなりがちですが、キリストの活動はただ罪人の救いという、一点に向けて進められたものであると理解しなければなりません。キリストの働きは、表面的に眺めるだけでは、なかなか理解できないものです。しかし、旧約聖書に記されている「来たるべき救い主」に関わる記述と、新約聖書に記された「到来されたキリスト」の働きについて、よく比較しながら調べるならばわかることです。

神の怒りをなだめる

最も基本的なキリストのお働きは、神の怒りを宥（なだ）める働き、神の憤りを鎮（しず）める働きです。神の怒り、神の憤りとは、神が完全な聖さを保持しているお方であることに由来します。神の聖さは、まさに、一点のしみもない聖さです。この神の聖さの前にあっては、現在の人間世界のものはすべて、すなわち罪の影響のもとにあるものすべては、汚れているとされるほどです。この絶対に聖い神の性質が、人間の裏切りの罪に遭って、当然の反応をしたのです。神の聖さは人間の罪の汚れを忌み嫌い、怒り、憤りとなって現れました。その結果が人間の追放です。

キリストの働きの中で最も大切なのは

キリストのお働きの最も大切な面は、この神の聖さからくる怒りを宥め、憤りを鎮める

ことでした。神の聖さから発する怒り、憤りが収まらなければ、罪を犯した人間は神の許に帰ることができず、罪の刑罰を受けなければなりません。聖書は「罪の報酬は死である」と宣告しています。人間は本来、罪を犯した時点で死ななければならなかったのです。それが追放だけで終わり、霊的に死んだだけで止められて、すぐさまに永遠の死、永遠の滅びに追いやられなかったのは、あるいは消滅させられなかったのは、神のもう一方の性質である愛から発する、哀れみがあったためです。

なだめの供え物

キリストの働きは、罪人の身代わりになって死ぬことでした。ご自分の死によって人間の罪の代価を支払うことでした。これによって、罪の正当な刑罰を求める神の聖さを、満足させることができたのです。キリストは人間の罪のために、聖い神の前で、なだめの供え物、神の怒りを鎮める捧げもの、あるいは和解の供え物となってくださったのです。しかも、この働き自体、このご計画自体が、神ご自身から出て、キリストによって実行されたのです。神の愛から発する哀れみが、人間を救おうと反応したのです。

悪魔の支配を打ち破る

キリストの働きは、神の聖い怒りをなだめるだけに止まらず、人間を拘束している悪魔の支配を打ち破り、人間の中に、再び神の支配を確立することでした。キリストはこの世界が悪魔の支配下にあることをいく度も説明され、悪魔のことをこの世の君と呼んで、悪魔の働きと力をその力の範囲をお教えになりました。

残念ながら、現在発行されている様々な日本語聖書の翻訳は、複雑な言語の意味を充分に訳出できないために、本来の聖書に描き出されている悪魔の支配と神の支配の戦いが、不明瞭なままになっています。簡単に結論だけを言いますと、翻訳された聖書が「天国」とか「天の御国」と言うとき、本来の言語の意味は、むしろ「神の支配」であったことを知らなければなりません。キリストの教えと活動の中心は、この神の国、神の支配にかかわるものでした。存在するものすべてを統治する神の支配と、人間が生きている「この世」という空間と今という時間に制限された「この代」だけで、権限を振るっている悪魔の支配との戦いが、キリストの教えと活動の中心だったのです。この神の支配という側面から見ると、キリストは神の支配をきたらせるために、その支配の実現のために、この世界にお出でになったのです。

悪魔の支配は人間世界のあらゆる面に及び、さらに自然界にまで及びます。そのために人間は生活のすべての分野で、悪魔に苦しめられるのです。肉体の病、精神の病、軋轢に

満ちた人間関係、自然の災害、自分に適さない労働の苦痛。挙げるときりがありません。貧しさ、乏しさは世界に蔓延しています。キリストは神の国が悪魔の国を攻撃し、その支配を広げていると語り、病を癒し、悪霊を追い出し、貧しい者に食べさせ、弱いものを励まし、ねじ曲がった精神の者をまっすぐな人間にし、お語りになった通り、悪魔の支配を攻撃しておられました。(詳しくは拙著「神の国」を参照)

人間をきよめる

天地の創造者は絶対に聖いお方です。少しでも汚れを持っている者が近づくと、そのものは必然的に滅びてしまいます。聖書の表現では焼き尽くされてしまうのです。それで、罪のために穢れてしまった人間は、どれほど願っても、また神ご自身がそうお望みになっても、神に近づくことはできないのです。神に近づくためには、罪ある人間はその罪を完全に取り除いてもらう、あるいはまったくきよめてもらう以外はありません。

そこで登場するのが、「罪をきよめるキリストの血」という主題です。キリストは神の姿を捨て、人間となって人間と同じように生き、人間としてのあらゆる苦しみを味わってくださった一方、まったく罪を犯さない完全な人間として、聖く生きて下さいました。そのキリストが人間の罪を身代わりに負い、十字架にかかって死んでくださいました。そのとき流されたキリストの血が、聖書によると、人間の罪を洗い流してくださる、あるいはきよめて下さるのです。

旧約聖書に記された犠牲の意味

旧約聖書には、人間が神を礼拝する前には、人間の罪の贖いのために羊や山羊や牛などの動物が殺され、その血が祭壇に注がれなければならないという儀式が、厳格に定められていました。礼拝のために神に近づくにも、罪のための身代わり、犠牲が求められ、血を流すことが定められていたのです。血を流すことなしには罪の許しはあり得ないというのが、聖書の教えです。動物を殺し、血を流すことが要求されたのは、神の聖さの表れでしたが、旧約聖書が教える犠牲はあくまでも儀式であり、やがて現れる本物を指し示す役割を果たしていただけです。動物の命や血が、人間の命や血に取って代わることはできません。たんなる象徴に過ぎなかったのですが、おびただしい数の動物たちが犠牲となりました。

犠牲が指し示したもの

その無数の犠牲が象徴として指し示していたのが、罪のない神の子キリストの、身代わ

りの死と流された血潮です。聖書は、キリストの血潮が人間の罪を、洗い流すと教えています。犠牲だとか、身代わりだとか、血だとか、昔からあまり家畜を用いなかった日本人、あるいはあまり肉食をしてこなかった日本人には、感覚的に理解しにくいのですが、遊牧民族から発祥したユダヤ人には、とてもよく理解できたのでしょう。とは言え、日本にも、神社仏閣にお参りするときには、手水で身を清める儀式がありますので、聖いお方の前に出るには、身を清めるという発想は存在すると言えます。

世の罪を取り除く神の小羊

キリストがおよそ三〇歳になり、公の働きをはじめられたとき、まず、人間としての姿を全うするため、洗礼を受けようとしてヨルダン川においでになりました。そのとき、自分の方に歩いてこられるキリストを認めた、バプテスマのヨハネという神から遣わされた人は、キリストを指差して「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」と言いました。ヨハネ自身はこの言葉の意味を充分には理解していなかったと思われますが、彼は聖霊の導きを受けて語ったのです。キリストこそが、旧約時代に殺されたすべてのなだめの供え物が象徴していた、すなわちあらかじめ指し示していた、本物の犠牲だったのです。小羊とは、あらゆる犠牲の動物を代表するものであり、「神の」というのは、人間が準備した欠点もあるかもしれない犠牲ではなく、神ご自身が人間のために準備された、完全無欠の犠牲という意味だったのでしょう。

余談ですが、漢字の「義」という文字は、「我」が羊の下にあって、羊の犠牲に覆われて「義」が成立するという、ユダヤ的な感覚があるようにも見えますが、単なる偶然でしょうか。あるいはシルクロードの途上にあった中国の仏教の中に、ユダヤ的な犠牲の感覚が流れ込んだのでしょうか。ともあれ、農耕民族で、動物との関りは最小限度であった日本人が、遊牧民族の習慣に合わせて実行され、また、説明されているこの贖いの教えを理解することは、非常に困難です。だからこそ、贖いの働きも含めて、日本的な福音の説明が必要なのです。

唯一の大祭司

キリストは、神ご自身が準備してくださった小羊、唯一の完全な犠牲でした。唯一であるために、キリスト以外に救いは無く、完全であるために、キリストの犠牲は、二度と再び繰り返されることもないのです。

キリストはまた、旧約時代の祭司たちが、雛形として指し示していた、完全な祭司であり、人と神との間を取り持つ、すべての祭司の働きをまとめる大祭司でした。旧約時代の

祭司たちは、犠牲となった動物の血を携えて、和解の務めを果たしていましたが、キリストは唯一の大祭司として、ご自分の血を携えて天の幕屋に入り、贖いを完成させ、私たちと神との隔てのない交わりを、可能として下さいました。キリストが完全な大祭司になって下さった以上、いま、キリスト以外に和解の務めをする者はおらず、いてはならないのです。（この辺りの説明は、文字で書かれた律法、すなわちユダヤ人を対象とした、旧約聖書の表現で書いていますので、旧約聖書に馴染の無い日本人には、非常にわかりにくいと思われます。）

神との交わりの回復

救いにはさらに積極的な面があります。それは神との交わりの回復です。罪を犯した人間が、あたかも罪を犯さなかった者のように、神との交わりを持つことができるということです。単なる神との和解ではなく、和解後の素晴らしいお付き合いが含まれているのです。この働きを可能にするのは、甦りによってキリストが私たちに与えて下さる、キリストの義です。キリストは、私たちの罪をご自分のものとして、代わりに負ってくださっただけでなく、全く罪のない生涯をお送りになったご自分の義を、私たちに分け与えて下さる、転嫁してくださるのです。キリストは、私たちの罪が支払わなければならない代価を引き受け、私たちが望みようもない、正しい人間という立場を与えてくださったのです。こうして私たちは罪がないものとされるだけではなく、より積極的に、義とされた、正しい者とされたのです。キリストは私たちを義とするために、甦ってくださったのです。

聖霊の働き

その上、甦りのキリストは天にお帰りになり、代わりに聖霊を遣わしてくださいました。聖霊は、私たちをキリストのみ体である教会にバプタイズし、聖霊を飲むものとし、飲んだ私たちの内に住み、私たちを神との交わりに入れて下さるお方です。（Ⅰコリ 12：13）この聖霊の働きによって、キリストの贖いの御業は、私たち個々人の命の中に適用され、実現されるのです。キリストの血によってきよめられた私たちは、聖霊の働きによって、神の御許に連れてこられ、神との深く豊かな交わりの中に入れられたのです。

キリストの働きによって和解させられた、神と人間との交わりは、聖霊のお働きによって具体的に実現されるのです。その神との新しい交わりの共同体が教会です。教会は神の国の共同体であり、この世にあって神の国、すなわち神の支配を実現する共同体です。ただその交わりは、「この世」と「この代」にあっては、まだ悪魔との戦いの中にあり、まだまだ不完全なのです。それが完全に実現される救いの日を、いま私たちは待ち望んでいるのです。罪を犯す前の天真爛漫だったアダムとエバが、創造主なる神のみ顔を仰ぎ見た

ように、私たちも神のみ顔を仰ぎ見るのです。しかも私たちは、創造主としてだけ仰ぎ見たアダムとエバのようにではなく、救い主、贖い主としても仰ぎ見、さらに大きな感謝をもって賛美を捧げるのです。神ご自身が、私たちの目から涙をぬぐい取ってくださるのです。

異邦人のための神学　（１２）

養育係を知らない日本人の救い

旧約聖書の律法は日本人のために書かれてはいない

日本人はユダヤ人ではありません。養育係を与えられていないのです。キリストを信じる信仰へ教え導く旧約聖書は、日本人に向けては書かれていないのです。従って、日本人がなかなかキリストを信じられないのは、当然と言えば当然のことなのです。それなら、現代の日本人にも養育係を与えれば良いのだと、頑張って聖書を配布してみても、ほとんどの場合、読んでもらえません。珍しく読み始めてくれる人がいたとしても、じきに投げ出してしまいます。読みやすい本ではないからです。たとえ一万人に一人、読み通してくれる人がいたとしても、正しく理解してもらえるはずもありません。一度読んだくらいで理解できるような本でもないからです。

大切なのは聖書という翻訳された書物ではない

聖書の絶対の権威を信じ、その重要性と有益性を信じて、一所懸命に聖書を翻訳したり、配布したりしている人や団体がありますが、批判を恐れずに言えば、現代の日本でそんなことをしても、ほとんどの場合無駄な努力に終わっています。そのような働きを、あたかも最も重要な働きであるかのように言うのは、プロテスタントの「過度な聖書信仰」がもたらしたものでしょう。聖書の教えを伝えることではなく、聖書を理解させることでもなく、印刷された聖書という本を大切にする、誤った聖書信仰です。印刷された聖書の文字が大切なのではなく、その教えが大切であることを、再確認しなければなりません。使徒パウロをはじめ初代の使徒たちは、だれも聖書という書物を持ち歩きませんでした。彼らは聖書の教えを頭の中に持ち歩いたのです。

日本人のためには書かれていない聖書

聖書、特に旧約聖書は、日本人向けには書かれていません。どれほど流ちょうな、格調の高い日本語に翻訳されたとしても、文化が違い、人種が違い、時代が違い、歴史が違い、背景が違い、世界観も、死生観も、宗教観も、ものの見方も感覚も、何もかも違うのです。

たやすく理解されようがないのです。だから、いま、日本人に養育係である旧約聖書をポイと与えたとしても、ほとんどの場合何の役にも立たないのです。日本人に必要なのは、ユダヤ人に与えられた養育係を日本人に回し渡すことではなく、養育係を与えられていなかったのに神を信頼し、それによってキリストの救いを獲得した人たちについて学び、それを日本人にも適用してみることです。

まだ養育係を与えられていなかったのに救われた人々

旧約聖書には、すでに述べたように、養育係を与えられていなかったのに、救われた人々の記録が残されています。養育係がまだいなかった時代、旧約聖書が完結していなかった時に、すでに救われていた人々がたくさんいたのです。だから、養育係を与えられていない日本人の救いを考えるには、そういう人たちの救いについて学べばいいのです。パウロの言葉によれば、アブラハムも信仰によって救われました。行いによってではありません。では誰を信じる信仰でしょう？　パウロははっきり述べていませんが、キリストを信じる信仰ではなく、神を信じる信仰でした。まだ誰も、充分には、キリストのことを知っていなかったのですから当然です。信仰による救いを強調したパウロにとっては、キリストを信じる信仰と神を信じる信仰は、本質的に同じものだったのです。

まだ養育係を与えられていなかった人々にとっての神

ところが、まだ養育係を与えられていなかった時代の人々にとっての神は、養育係に教えられた後の人々の神とは、まったく異なっていました。多くの人々はまだワニの神やカバの神、あるいは鳥の神や蛇の神、蛙の神やノミの神、あるいは太陽の神や月の神、もっと身近で真剣なところでは、豊穣の女神やその夫である神などを信じていました。日本の多神論と同じような神観を持っていたのです。あるいは汎神論的だったかもしれません。それは、パウロがローマ書の一章で述べているような、偶像礼拝の罪でしたが、十戒の中の偶像礼拝の戒めを破る罪ではありませんでした。十戒はまだ与えられていなかったのです。

ご自分を現わしてくださった神

そのような中で、天地創造の神はご自分を現わしてくださいました。ただし、初めから天地創造の神として現れて下さったのではありません。むしろ多くの神々の中で、「信頼に足る神」として、ある特定の人々に現れて下さったのです。その一人がユダヤ人の先祖であるアブラハムです。アブラハムはメソポタミア文明の中で育った人間ですから、周囲の人々と同じように、月を主神としていたかもしれません。でも聖書の記述によると、ど

うやら、真面目な信仰心と良心を持つ家庭で育ったようです。天地創造の神はこの家に特別に現れて下さり、この家を祝福し、この家の神となって語り掛けて下さったようです。アブラハムの家庭の中では、あくまでも多くの神々の中で、自分たちの神として拝む神、自分たちの神という認識だったのでしょう。天地の創造者と理解して、礼拝していたのではありません

アブラハムの神

少なくても父親のテラの時代から、アブラハムの家は、天地創造の神を、そうとは知らないまま、自分たちの神として拝んでいたと考えられます。なかでもアブラハムは、神に似せて造られた人間の本来の姿を発揮して、質の高い信仰と倫理観を持ち合わせていたらしく、神に気に入られていたのでしょう。それで、神の救いの働きのために選び出され、すべての人類を祝福する計画を知らされたのです。とはいえ、人類を祝福する計画は非常に大きな主題であり、到底、アブラハムがただちに理解できるはずもありませんでした。ただアブラハムは、しばしば現れては多くの祝福を与えて下さるこの神を、自分の神、自分の家族の神、自分の一族の神と意識したのは当然です。神もまたアブラハムの神と呼ばれるのを、厭われなかったと思われます。

アブラハム、イサク、ヤコブの神

当時の人々は家族・親族という集団を、とても重んじていましたので、アブラハムの神は当然アブラハム一族の神となり、アブラハムの息子のイサク、さらに孫のヤコブの神ともなり、孫の子孫たちからは、「アブラハム、イサク、ヤコブの神」と呼ばれるようになっていきました。多くの古代人たちと同じように、彼らの習慣でも、自分たちが名乗るときには、誰々の子、誰々の孫というのが普通でした。その言い方から、自分たちが礼拝している神、自分たちの家族の神を、アブラハム、イサク、ヤコブの神と紹介するのが普通となっていたのでしょう。アブラハムにとってもその子孫たちにとっても、自分たちの神は自分たちが礼拝している神、自分たちが忠誠を誓っている神であって、他の人々、他の家族が礼拝している神々を否定することには、繋がらなかったのです。

とはいえ、アブラハムをはじめ彼の家族親族の間では、自分たちの神という感覚がだんだん強まり、他の神々を否定するような感覚になり、それぞれの礼拝と神体験から、神についての理解も深まって行ったであろうことは、容易に想像できます。ちなみに、アブラハムの孫のヤコブは、自分たちの一族から偶像をすべて取り除き、木の根元に埋めてしまう、一種の宗教改革を実行したことについては、すでにのべたとおりですが、アブラハムに神が最初に現れて下さったときから、およそ一五〇年が経過していました。このとき多

分、妻のラケルがヤコブと共に父の家を出た折、父から盗み出した偶像も、含まれていたのではないかと想像されます。

自己紹介をしなければならなかった神

アブラハムの時代から、およそ七百年か八百年もたったころ、アブラハムの子孫たちは数の上では数十万人にも達し、イスラエル民族と呼ばれるまでになっていましたが、四百年間ほども、エジプトの奴隷となって苦役にあえいでいました。ご自分の救いのご計画を推し進めるために、このイスラエル民族をエジプトの奴隷の枷から解放するために、神がモーセという人物を選び、指導者としてお立てになりました。神はこのモーセに、燃える芝の中から語り掛けるという、好奇心を駆り立てると同時に、恐怖心に肝を潰させるような体験の中で、イスラエル民族の救出という、大役をお与えになったのです。このとき神は、ご自分をアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神であると自己紹介をされたのですが、モーセは尋ねるのです。「エジプトからイスラエルを解放するために、私をお遣わしになるあなたを、イスラエル人になんと紹介したらよいのでしょうか？」　すっかり怖気づいたモーセは、イスラエルの先祖の神、アブラハム、イサク、ヤコブの神という言い方だけでは確証が持てず、励ましにも後押しにもならなかったのでしょう。

「私はある」と言われる神

言い訳がましいモーセの問に対して、神は、「私はあるである」とお答えになりました。この言葉はシェークスピアの「to be or not to be」よりも難解で、形而上学的な言葉です。日本語の翻訳自体はさほど難しくなく、「私はあるというものである」とか「私はありてあるものである」などとなっています。筆者などの浅薄な頭では追いつきませんが、あえて言えば、「私はすべての存在の源である」とか、「私は何にも依存せずに存在するものである」というほどの意味でしょうか。

ともあれ、神はこの時になって初めて、つまりアブラハムに現れてから七、八世紀もたってから、あらためて自己紹介をしておられるのです。神にとって大切だったのは、いち早く知的に理解されることではなく、体験的に知られる、付き合いを通して知られるということだったと思われます。だからこそ、それだけ長い期間、ご自分を知的に理解させようとは、お思いにならなかったのでしょう。ユダヤ人にとって、知るということは体験するということだったと、言われています。

突然卑近な例を持ち出して申し訳ないのですが、ずいぶん前に、私が伝道者になってからまだ二，三年のころに流行った歌謡曲に、「あなたの過去など知りたくないの」という

言い回しがありました。過去を知るのは体験ではなく知的な理解です。私が欲しいのはそんなあなたに関する知識ではなく、体験として知ることが出来る、今のあなたなのですという意味なのでしょうか。知的理解と体験的理解の違いを学ぶことが出来る歌詞でした。とても美男子とは言えないけれど、歌が飛びぬけて上手な歌手の歌ですが・・・・。ちなみに、この曲は英訳されて、海の向こうでも歌われています。

より強い神、信頼に足る神としての自己紹介

「私はあるものである」という自己紹介は、いかに深い意味を持った言葉であったとしても、当時のモーセに理解させ、納得させるには不充分でした。モーセは何としても、自分の腑に落ちる証、使命を遂行するための確証がほしかったのです。それで神は、モーセの杖を蛇に変えて見せたり、とりあえずライ病と翻訳されたおぞましい病気を、手に発生させた上、それを元通りに治して見せたりして、モーセを励ましておられます。つまり、私は単にあなた方の先祖の神というだけではなく、実際に大きな力を持っている神であると、三千数百年前の「時代の子」であったモーセに、分かりやすくお示しになったのです。

さらにモーセはエジプトの王と闘う中で、神の名において、少なくても十に及ぶ様々な奇跡を行いますが、エジプト王も民も、それで完全に納得したわけではありません。それらの奇跡の中のあるものは、エジプトの魔術師たちでさえ、行うことができたのです。それでも、だんだん大きく困難になって行ったこれらの奇跡は、イスラエルの神がほかの神々より強く、優れたものであるということを証明する、具体的な手段でした。つまり、これらの奇跡は、今でも知的レベルの低い人たちの間で時々起こる、「パワー・エンカウンタリング」、すなわち、力と力のぶつかり合いによる、神の自己紹介だったのです。私は他の神々よりも強い神、あなた方を救うことができる、力の神であるという証です。

ダメ押しの自己紹介

ところが、アブラハム、イサク、ヤコブの神を自分たちの神としてきたとはいえ、全体的には多神教や汎神論的環境の中で生きて来たイスラエルの人々にとっては、様々な力ある奇跡も助けも、自分たちの神への信仰を揺るぎのないもの、絶対のものにするには、まだ足りませんでした。そこで神は、これでもか、これでもかと言うかのように、数々の奇跡や不思議をもって、ご自分を現わしてくださいました。昼は雲の柱、夜は火の柱に導かれたイスラエルの民は、神の臨在をまざまざと見た思いになったことでしょう。紅海が二つに分かれた奇跡は、あくまでも自分たちを解放しようとなさる鉄の意思の神、そのためにはエジプトの軍隊を難なく壊滅させることができる力の神を、体験をとおして教えようとされたのです。イスラエルの人々はさらにその後も、シナイの荒野の旅の中で、飲み水

の奇跡も食料の奇跡も、戦争を学んだこともないのに、他民族との抗争に勝利をする奇跡なども見て、神を信じることの大切さを悟って行ったのです。

次元の違う神としての自己紹介、

ところが数々の奇跡を通しての自己紹介では、神はイスラエルの中に、ご自分がお求めになる信仰を、形成することができませんでした。神は、多神論的環境の中でご自分を最も強い神として認識するだけでなく、他の神々と呼ばれるものとは決定的に違う神、全く次元の異なる神、全身全霊をもって崇め、礼拝し、仕えるべき神であるということを、徹底して教えようとなさったのです。そのために与えられたのが、天地創造の物語でした。エジプトを脱出して荒野をさまよった四〇年の間に与えられた、創世記の中の最初の部分、天地創造の物語なのです。

天地創造の物語が与えられた目的

天地創造の物語は、天地が造られた「いきさつ」を説明するものではありません。造られた順番だとか、何日目に何が造られたかということを、教える物語でもありません。あるいは現代人が持つような、科学的な興味を満足させるために、書かれたのでもありません。今から三千数約年前の人たちに、現代科学の観点から天地創造の物語を書いても、何の役にも立たず、助けにもなりません。あくまでも、当時の人々の益になるように、最も重要と思われる物語が語られたのです。しかも、読み書きが非常に困難だった当時の大衆にも、容易に理解でき、覚えやすく、記憶に留め易い形で語られたのです。

要するに天地創造の物語は、天地創造に関する事実を詳細に説明するものではなく、自分たちが心を尽くし精神を尽くし思いを尽くして礼拝する神は、いったいどういう神なのかを、当時のイスラエル人たちの思考形式にそって説明した、神の自己紹介なのです。あなた方が礼拝するべき神は、どのような神なのかという、極めて高度な神学的課題を、物語形式で語ったものなのです。この物語を理解すれば、唯一絶対の神、次元を超えた神、時空を超越した神、全知全能の神というような、形而上学的な真実も理解できたのです。それだけでなく、この神こそ、自分たちが礼拝し仕えるべき、唯一の神であることもよく分かったはずなのです。だからこそ、この物語には三葉虫もアンモナイトも恐竜たちも出てこないのです。

旧約時代のイスラエル人は、何によって救われたのか

神は、ご自分がその辺りの民族たちが礼拝していた神々とは決定的に異なった、まった

く次元の違うお方であることを、長い時間と、重ね重ねの自己顕示と、最後には天地創造の物語を啓示することによって、イスラエル民族に教えて下さいました。その後からも神は、律法を与え、敵との戦いに勝利させ、様々な出来事の中で導きを与え、来るべき救い主メシヤについていろいろな方法で予告して下さいました。旧約聖書全体が、イスラエル民族をキリストへの信仰に導き教える、「養育係」だったのです。

ただし、メシヤ出現の前のユダヤ人たちは、たとえ養育係を与えられていたとしても、救い主を信じるところまで、到達することはできませんでした。彼らはあくまでも、「神」を信じる信仰によって救われたのです。養育係を与えられる前のイスラエル民族、あるいはイスラエルには属さなかった人々も、同じように信仰によって救われました。キリスト、すなわちメシヤを信じる信仰ではなく、神を信じる信仰によって救われたのです。

唯一無二の救い主

まだ救い主が誕生していなかった時、神はいかにして罪人を救うことができたのでしょう。イエスという名で呼ばれたキリスト以外に、旧約時代の人々のための救い主が与えられていたのでしょうか。聖書は、キリストが唯一無二の救い主であることを、繰り返して教えています。旧約時代のイスラエル人たちも、律法が与えられる前の人々も、同じキリストの救いにあずかったのです。すでに述べたように、救いは私たちがキリスト知っているか、どれだけ理解しているかにはよらず、神がキリストをご存知であることによるのです。神が人々の罪のために贖いを成し遂げられる救い主を、あらかじめご存知であるため、ご自分に信頼してくる罪人たちを、その救い主の十字架の功績の故に赦し、受け入れることができたのです。救いは救い主を知っているとか、理解しているとかいう、罪人の側の業に対してではなく、あくまでも神を信頼する信仰に対して与えられるものです。

養育係を与えられていない日本人の救い

日本人は養育係を与えられていません。したがってその救いは、養育係を与えられていたイスラエル人の救いの条件とは異なっています。イスラエル人は、十字架において救いの業を完成された救い主を信じる信仰、キリストを知ってその救いの働きを信じる信仰によって救われたのです。イスラエル人はその救いを自分たちの民族の中に限定しようとしていましたが、使徒パウロはその限定の枠を内側から打ち壊し、キリストの救いはイスラエル人にとどまらず、すべての民族に及ぶものであると宣言しました。

ところがパウロは、イスラエル人の外側に立って、「救いはすべての民族に公平に与えられているのである。ユダヤ人はその救いをもたらすために用いられた、器にすぎないの

だ」という言い方はしていないのです。パウロはあくまでもユダヤ人の視点、養育係であった旧約聖書の基盤からの発想で、語っているのです。

　養育係を与えられなかった日本人に対して、キリストの救いを語るには、養育係を与えられていなかった人々の救いの物語から、キリストの救いの適用を見なければなりません。キリストの救いは、その救いを計画し、実行し、完成された神の御名を呼び求める信仰に対して与えられるのです。

異邦人のための神学　(13)

日本人はキリストを信じなくても救われるか

キリストではなく神を信じて救われた人々

聖書の中には、キリストを信じる機会がなかったのに救われた人たちの記録が、たくさん残されています。彼らはみなキリストではなく、神を信じて救われたのです。では、キリストを知る機会の少ない日本人、養育係である旧約聖書を読みこなす力がない日本人も、神を信じて救われることができないのでしょうか。旧約聖書の記述を読んでもわかるように、支離滅裂な神意識の中で偶像礼拝をしていた人々に、神はご自分を現わして下さいました。数百年、あるいは千年以上の長い期間をかけて、神は徐々にご自分を啓示し、少しずつ正しい神観、神意識、礼拝態度へと導いて下さました。その中で救われた人々は、まだまだ不完全な神知識しか持っていませんでした。アブラハムの神に関する知識でさえ、知的な知識としては、新約聖書を持ち神学を学んでいる、現代の私たちよりもずっと少なかったはずです。彼の神知識は、神との付き合いを通しての体験と、瞑想による知識だったからです。

神がお用いになった接点

神がご自分を啓示し、神を知らなかった人々を導かれるために、橋渡し、あるいは接点としてお用いになったのは、人間の宗教本能でした。神は人間をご自分に似せてお作りになり、霊的な存在として、霊的なことを理解できる能力を、与えてくださったのです。神はこの霊的能力という本能を前提とし、それを接点としてご自分を現わしてくださいました。人間が神の自己啓示を理解できたのは、この霊的本能を持っていたためであり、これがなければ、たとえ神の啓示があったとしても、人間は神を意識することができませんでした。大切なのは、日本人もこの本能をしっかりと持っているという事実です。よく観察し、分析してみると、多くの民族の中でも日本人の霊的本能は、極めて強く、いまでもかなり正常に機能していると言えます。

神という言葉の問題

すでに少し触れましたが、聖書を読むと、神はご自分を現わすときに用いる、「神」という言葉の選択に、苦労なさったことがわかります。当時多くの人々が、礼拝対象を示す言葉としていた「神」という言葉を、そのまま用いることはできなかったからです。天地の創造者、絶対の存在者を示すには、ふさわしくない意味が含まれていたためだと思われます。それでも神は、人間に語りかけるときは、人間が理解できる言葉を用いなければなりませんでした。そのために、たとえば、神がはじめに天地を創造されたという、神の自己紹介である聖書の最初の一節では、「神」を表すのに、エローヒムという複数形の言葉が用いられています。神は唯一であるというのが、聖書の一貫した強い教えであるのに、ここでは誤解を恐れず、単数形のエルという言葉が退けられ、複数形が用いられているのです。単数形のエルには、天地創造の神を表すにはふさわしくない意味が含まれていたのでしょう。それで、あえて誤解をおそれず、複数形が用いられたのだと思われます。

ただし、本当に形而上学的な話にはなりますが、神の実像は単数だとか複数だとかいう、人間の限られた数の概念には縛られない、単数でありながら複数であり、複数でありながら単数のお方なのです。ですから、神の呼び名が複数でも単数でも、どちらでも良かったはずですが、そのころ氾濫していた多神教を避け、「エローヒム」という複数形の名を用いながら、唯一絶対性を強調するために、後になって唯一という説明が加えられたのだと思われます。

日本人の神

似たような問題が日本語の「神」にも存在します。普通、日本人が神という場合、いわゆる八百万の神々のことです。ところが、自分たちの宗教心の最も深いところに感じている高貴な存在を、日本人は神とは呼ばないのです。これは、いわば神に属さない神です。神と呼ばれるにはふさわしくない、もっと尊く、もっと気高く、もっと大きく、もっと広く、もっと豊かで、一点のしみもない存在です。このお方は、人間の限りある目では見ることができず、汚れた手では触れることもできず、言語の表現範囲をはるかに超え、小さな頭では理解も及ばない超越したお方で、いつでも、どこにでもいらっしゃって、人間をじっとご覧になっているのです。この方は、大変大きな力を持ち、自然をも支配し、季節を巡らせ、作物を育て、動物を生かし、私たち人間を祝福してくださるのです。しかも、人間どもの弱さや足りなさや汚れに、怒りや憤りをもって報いず、あくまでも恵み深く対応されるのです。多くの日本人はそのような存在を心の奥深くで、かすかにではあっても、また朧げにであっても、あたかも慈愛に富む母に見守られているかのように感じ、畏れ敬い密かに礼拝の心を抱いています。ところが、このお方はあまりにも超絶しておられるために、礼拝の仕方も分かりません。ただ、心の中に秘めているだけの、神ではない神なのです。神という日本語では表現できない存在なのです。

お天道さま

お天道様は普通、太陽のことであると言われています。しかし日本人は、太陽に向かって手を合わせても、太陽を神と考えることはありません。あくまでも太陽の背後に存在される力強く、熱く、すべての物に命を与えておられる方を、太陽に象徴して拝んでいるにすぎません、天道様は、文字通り天的な存在で、道、すなわち人の生きるべき姿を示すお方です。

日常の通俗的神々

この日本人の意識の中の、超絶した「神ではない神」は、個々の人間の生活への直接的関与は、あまりなさらないことになっています。また人間の仕業が、このお方に影響を及ぼすこともありません。人間の世界を大きく支配しておられても、一人一人の人間の必要や困難に対しては、応えて下さらないと思われてきたのです。人間という存在があまりにもちっぽけだからです。そういうことに関心を持ち、応えてくれるのは無数に存在する神々、八百万の神々です。これらの神々は個々の人間の近くにいて、人間のあらゆる面に関心を持ち、祈りや願いを聞いてはそれに応え、時には災いをももたらす存在なのです。祈りや願いが聞き届けられたと感じたとき、人々は感謝をし、礼拝の対象にさえします。しかしこれらの神々は、人間にはない何らかの力を持っているとはいえ、人間同士の付き合いの延長に、ちょっと宗教色を付け加えたことを行えば済むことです。日本人の八百万の神々は、聖書が記述しているもろもろの悪霊や汚れた霊や幽霊、天のみ使いと同じ範疇に入るものであって、天地の創造者とはまったく別の次元に属する、単なる被造物や人間の想像の産物に過ぎません。天地の創造者はすべてのものを超絶した創造主なのです。

日本人の宗教感覚に欠けている創造者の意識

普通、日本人の宗教感覚には超越者の存在こそありますが、万物の創造者という意識はありません。日本の神話を探ってみても、万物の創造者として記されている神は、たった一度きり古事記に名前が挙げられている､天之御中主神（アメノミナカヌシノカミ）だけで、他に何の記述もありません。ただし、”平田篤胤などが復古神道を唱え、古代の神道の姿に戻ろうとして、神道の中から仏教的要素を排除しようとしたとき、彼らは密にキリスト教の神学を学んでそれを真似、天の御中主神に天地万物の創造者としての、重要性を与えました。この試みは、現代の日本人にはほとんど影響を残してはいないと思われますが、日本人がかすかにではあっても抱いている、至高の存在者の感覚は、聖書が教える天地の創造者の性質に非常に近いものです。日本人は、だれ言わずとも、この至高のお方を大切

にし、畏れ敬ってきたのです。それでいながら、あまりにも気高いお方であるために、近づこうとすることさえ畏れ多いと感じ、考えることさえ避けてきたのです。

理屈ではなく感覚

大変不思議なことと言えば、不思議なことなのですが、ほとんどの日本人、少なくても筆者が話し合った日本人のほとんどは、そのような宗教感覚を持っているのです。ある人たちは唯物論者でした。彼らは平気で神はいないと言います。でも、良く訊いてみると、心の奥には超越者というか、絶対に気高い存在を感じているのです。無神論者たちでさえ、その感覚を恥じてなかなか認めたくはないのですが、忍耐深く訊きただすと、超絶した何らかの存在を感じているのです。あるいは自分は仏教徒だと言い、仏教教団に属している人でさえ、深く問い詰めていくと、同じ感覚を共有しているのです。これは理屈ではなく、感覚です。創造者である神が人間の本能としてお与えになった神に似た性質が、否応なしにそのような存在者を感じさせるのでしょう。この日本人の感覚が、日本人独特の宗教である神道から偶像を遠ざけ、日本人の倫理観、道徳心、公徳心に、強い影響を与えているのです。誰が見ていなくても、「お天道様が見てござる」と言い、お天道様がどのようなお方なのかも知らないまま、また知ろうともしないまま、悪事を遠ざけ、良いことをしようと心がけるのです。

神道という宗教

日本人の宗教感覚が、具体的に表現されたものが神道です。神道は決して宣教的な宗教ではありません。伝道などしないのです。でも、日本では非常に強く定着し、様々な形で存在し、日本人の生活全般に大きな影響を及ぼしています。さらに神道には、神学というものはありません。神についての教えそのものがないのです。初めから近づき難いほど気高いお方を崇めているために、そのお方についての考察も停止し、詮索するのは不敬と思われているのです。その畏れ敬う感覚は、神をまるでまな板の上の鯉のように、何の畏れも持たず切り刻んで説明する、ギリシヤ思考のキリスト教を辱めるものです。

神道の強み

宣教もなく神学もないまま、どうして神道は、これほど深く日本人の心に根をおろし、栄えているのでしょう。それは神道が、日本人の宗教感覚そのものもの表現であるため、何の抵抗もなしに日本人の心に入り込み、馴染むことができるからでしょう。唯物主義者、無神論者、あるいは仏教徒でさえ包み込むのです。ただし神道の強みは、ただ至高の存在を感じる日本人の、高度な神意識を表現しているだけでなく、日常茶飯事に関わる八百万

の神々と、ご利益主義の感覚という、通俗的側面をも網羅している点にあるといえます。

神についての教えがない神道では、何もかも、とてもあいまいなままになっていますが、そのあいまいさが、かえって日本人の心情に合致するのです。低くは魑魅魍魎から祠にも祀られることがないほど小さな神々、それから祠やしめ縄で存在を認められる神々、神社で祀られる神々、さらには大社と呼ばれる大きな神社で崇められる神々と、ある程度の序列があり、高低の差があるとはいえ、非常に漠然としています。ただその中でも、自然崇拝的でアニミズムの感覚に基いている通俗的部分と、至高の存在を感じている高度な宗教感覚の部分には、明確に線を引くことができます。アニミズム的多神論は、聖書でいえば悪霊やみ使いと同じレベルであり、至高の存在を感じる宗教意識は、天地の創造者に通じるものです。

神道の一神教的側面

これもまた大変興味深いことですが、神道には非常に強い一神教的側面があります。たとえば、日本人はいろいろな神社や大社にお参りしますが、それぞれの社には謂れがあり、祀られている神があります。そして、それぞれの神々の役割分担もあります。縁結びの神、学問の神といった具合です。ところが参拝する日本人のほとんどは、それぞれが異なった神々であることには無関心です。多くはそんなことに頓着することなく、どこの神社に行きどの神に祈るのでも、まったく同じ気持ちで、あたかも同じ神、同じ礼拝対象に向かっているかのような感覚でいるのです。お寺に行くと、それぞれのお寺の宗派によって、教えもしきたりも異なることを意識しながら行動します。ところが神社では、そんなことはないのです。日本人は広く大きな意味で、すべてを超越した至高の存在を、唯一の礼拝対象としているのではないかと思わせられます。八百万の神々は、日常の問題を訴え解決してもらう、自分たちに近い神々であり、感謝を捧げ、お礼参りもしますが、まじめな礼拝対象としての尊厳を持つものではありません。至高の存在は神という名では表わせない、神以上の神、神ならぬ神であり、森羅万象の中に住み、森羅万象を通してご自分を現わしておられるのです。

依り代

現代人の多くは、依り代などという言葉を知りません。広辞苑第六版によると、「依り代は神霊が招き寄せられて乗り移るもの。樹木・岩石・御幣・神籬ひもろぎなどの有体物で、これを神霊の代りとして祭る。かたしろ」と説明されています。しかし筆者はこの意味を少し変えて用いています。筆者が語ろうとする宗教的認識を表す言葉が、他に見当たらないためにあえてこの言葉を借用しています。筆者は次のような意味で用いています。

依り代とは、見ることも触れることもできない霊的存在に、わずかの類似点をもつことから、その霊的存在者の象徴とみなされる事物。人間がその事物を通して、その背後に、霊的存在を感じ取ることができるように作られたり、定められたり、選ばれたりした事物。

神道に偶像はないが依り代がある

幾度も述べてきたことですが、もともと神道には偶像というものがありません。拝む対象がないのです。日本人が心の奥に本能的に感じている気高いお方は、偶像にするには余りにも尊い存在なのです。ただし神道には、筆者が依り代と呼ぶものがあります。尊く気高く偶像には絶対に馴染まない存在でも、何とかその至高の存在者を人間の五感で感じ取りたいと、日本人は依り代というものを作ったのです。限りなく偶像に近いのですが、ぎりぎりのところで偶像には至らずにとどまっています。

例えば日本人は、至高のお方よりわずかに低い、天照大御神という女神を想定し、これを日本の主神と定め、太陽をこの女神の依り代としています。生きとし生けるものに命を与え、育み養う太陽を、日本を祝福して守る女神の象徴として見、それを依り代として拝むのです。西欧キリスト教的な感覚で、初日の出を拝む日本人を見ると、間違いなく偶像礼拝だと烙印を押すことでしょう。ところが、礼拝の行動をしている日本人たちに聞くと、彼らは決して太陽を神だとは思ってはおらず、太陽を拝んでいるのでもないと答えるはずです。彼らは、生かす力と恵みに溢れた見えない存在を、天照大御の神という見えない女神に象徴させ、その上で、その見えない女神の象徴として、太陽を見ているのです。あたかも外見は太陽を参拝しているかのようでありながら、実際には象徴である太陽を通して、太陽の向こうに居られる見えない存在を拝んでいるのです。象徴を見ることによって、見えないものを五感でも感じ取ろうとしているのです。

旧約聖書の中に見られる依り代

このような依り代は、聖書の中にも多く見られるものです。旧約聖書では超越した創造主である神が、礼拝する人間の弱さを理解し、また弱さを考慮し、信仰のための助けとして、その依り代をお与えになっているのです。たとえば、荒野で挙げられた青銅の蛇は、非常に偶像に近いものですが、決してそれを礼拝するべきものではなく、あくまでも、力ある神の存在と助けを確認させるための、補助として与えられたもので、依り代だったのです。さらに、契約の箱はどうでしょう。牛車に乗せられたこの箱が、悪路のために滑り落ちそうになったとき、一人の兵士が、咄嗟にそれを手で支えようとしたため、聖い神の臨在に打たれて、その場で死んでしまいました。それでも契約の箱は偶像ではなく、聖い神の特別な臨在を現すものにすぎなかったのです。契約の箱に収められていた三つのものも、

幕屋も、神殿も同じです。これらのものの存在を通して、人々は神の臨在を感じ、その聖さを思い起こすことができた依り代だったのです。これも神がお与えになったものであり、神を象徴するものでしたが、礼拝の対象ではありませんでした。詳しく旧約聖書を調べるならば、ほかにも様々な依り代があるように思います。

新約聖書に見られる依り代

新約聖書に移ると、聖餐のパンと葡萄酒が、キリストの贖いを象徴する依り代として、制定されているように理解できます。カトリック教会では、このパンと葡萄酒を化体節によって偶像化し、死んだキリストの肉と血の臨在は強調できましたが、当然、聖書の教えから外れた、ごり押しの神学にすぎません。ツイングリが唱えたと言われ、私たちの教団もその説を受け入れている象徴説では、パンと葡萄酒が依り代であることに、思いが及んでいません。パンと葡萄酒に特別な意味で臨在される、贖いの神がおろそかにされていて、不充分と言わなければなりません。聖餐のパンと葡萄酒は、単に二千年前に贖いを完成してくださった主を記念し、その事実を思い出して感謝を新たにするだけのではありません。そのパンと葡萄酒を通して、今、ご自分の臨在を特別な形で現しておられる主、二千年前に贖いを完成させ、甦って今も私たちの内に宿り、私たちを一つの体として作りあげ、私たちを生かし続けておられる主の臨在を、私たちが改めて強く感じ、意識し直すためのものなのです。聖餐には、主が特別な意味で臨在してくださっているのです。

旧約の民は、幕屋に主の臨在を感じていました。しかしその中でも、聖所に強い臨在を感じ、さらに至聖所には主の強烈な臨在を感じ、畏れを持っていました。その中の契約の箱は、主の臨在そのものであるかのように、敬意と恐れと畏れをもって、取り扱われていました。私たちの礼拝でも、特別な意味で主の臨在を感じます。賛美の中にも主の臨在を感じます。しかし聖餐の中には、一段と特別な意味で、主の臨在を感じるのです。聖餐は二千年前に十字架で血を流し、肉体を傷つけられて死んでくださったキリストを記念し、思い出すためだけのものではありません。二千年前に私たちのために死に、三日目に甦って今も生きて、私たちと共にいてくださるキリストを、実感するためにある依り代なのです。

依り代としての神社

このように見ると、神道の礼拝感覚と行事の中には、かなり多くの依り代が用いられていることに気付きます。西欧宣教師や彼らに教育された日本人伝道者、あるいは信徒たちにも愚かで憎むべき偶像礼拝とみなされていますが、実は依り代にとどまっているという事物です。たとえば奇岩や古木に張られたしめ縄は、現世（うつしよ＝この世界）と常世（とこよ=神の領域）を隔てるものと言われていますが、要するに、そこに霊的な存在を

認める印であり、礼拝の対象ではありません。しめ縄を張られている岩や木に向かって祈ったとしても、岩や木に祈っているのでもありません。通俗的になると、魔よけの意味になったりもして、家や車にも取り付けられますし、相撲の横綱を神聖なものとみなして腰の周りにしめたり、闘犬や闘牛のチャンピオンにしめたりさえします。

神道には常に、高度で純粋な領域と通俗的な領域が、混沌として存在していますが、純粋な部分には神社や大社にあるしめ縄があります。これは神社や大社そのものが、神の領域に属していることを示します。そこに神がおられるということを、思い起こさせる役割を果たします。自然崇拝とつながって、神社や大社には木々が植えられ神聖さを、感覚的にも示すわけです。そこに神が臨在するとか住むとか言われても、それは他のところには神がいないという意味ではありません。ただ、神社は神の臨在を表現しているのです。これは旧約聖書の幕屋あるいは神殿と、同じ意味を持つものです。幕屋や神殿も神の臨在を表すものですが、礼拝の対象ではありません。また幕屋以外に神はおられないという意味でもありません。ただ人々は、そこで見えない神の存在を感じ、正式な礼拝を捧げることができたのです。依り代を理解したならば、クリスチャンたちはもっと寛容な心で、日本人とその宗教行事に接することができます。

汎神論と唯一神論

日本人には、基本的に汎神論的な感覚があります。万物が何らかの霊的な存在を宿していると考えるのです。そこから俗化というか、低俗化すると、多神論に陥り八百万の神々になっていきます。ところがほとんどの日本人は、一方では、多くの神々を平和に共存させる信仰こそ、多くの異なった人々が共に平和に暮らす社会を形成する、精神土壌を作りあげるものだなどと持ち上げながら、もう片方では日本人的唯物の感覚を振り回して、その多神論を愚かとして退けているのです。日常の中では、多神論的な風習にどっぷりと浸かっていながら、理性がそれを否定し、「神なんていない」と言わせているのです。ところがその同じ汎神論的感覚を昇華すると、一神論的な理解の、遍在の神に到達していくことに気づかなければなりません。つまり、万物に宿っているのは種々雑多な霊的存在ではなく、同じ一つの気高い存在が万物に宿るという理解です。時空を超えて存在するお方が、万物の中に同時に存在しておられるという理解です。これは一神論的理解ではなく、むしろ、一神論的感覚と言うべきものです。なぜなら、日本人はこの超絶した存在について、あれこれと考えたり、理屈を並べたりはしないために、キリスト教の神学のように、神は遍在のお方であるなどとは言わないのです。ただ、本能的感覚がそのように告げているのです。ですから彼らは、神はいないと言いながら、実は非常に宗教的であり、人間の宗教的感覚そのものをあしざまに言うことはないのです。その日本人の宗教感覚の中に隠れている、一神教的理解については、聖書もまた同じように語っているものです。神は「すべ

てのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのものの内におられ、すべてのものを内に包み込んでおられる」のです。（エペソ 4：6、使徒 17：28）

至高の存在と救い

もしも日本人が、彼らの心の奥底に感じている至高の存在を、もう少しだけリアルに感じられるようになったとしたら、どうでしょう。その存在者が人間にあまり関心を持たない超絶者ではなく、実は非常に深く人間と関わり続けて来たお方であり、今も、強い関心をもって人間の近くに居られるお方であると、曖昧模糊とした理解から、僅かだけ雲霧を払った理解を持つことができたとしたらどうでしょう。そのお方を崇め、感謝し、礼拝し、信頼し始めたとしたらどうでしょう。誰かが天地の創造者について語り、教えてあげたらどういうことになるでしょう。アブラハムの場合は、天地の創造者ご自身がアブラハムに近づいてくださいました。今この日本で、天地の創造者が、人を用いて日本人に近づいて下さるという、奇跡的な接近を試みてくださったなら、アブラハムのように、信仰を持つことはないでしょうか。そうしたら、日本人が救われることはないのでしょうか。イエス・キリストを信じて救われるのではなく、イエス・キリストをくまなくご存知であり、イエス・キリストと一つである神が、イエス・キリストの十字架の贖いの働きの故に、ご自分に信頼を寄せてくる日本人を、救ってくださることはないでしょうか。

キリストについての知識

人が救われるのは、その人のキリストについての知識によるのではありません。知るとか理解するとかいう知的行為によらず、「たよる」という心の動きによるものです。そのキリストに対する信仰を、使徒パウロは、キリストを知らなかったブラハムが、神を信じた信仰と同じものであると理解しています。アブラハムが救われるためには、キリストについての知識も理解も必要とされず、キリストに対する信仰も求められていないのです。神に対する信仰だけが決定的要因でした。そして、キリストによると、キリストと父なる神は一つなのです。

だからと言って、現代の日本人が心の奥底にある至高の存在の感覚を鋭くし、その存在に対する信仰を固くしたのなら、キリストを知らないままで良いというのではありません。問題は、救いのために、キリストを信じる必要があるかということなのです。すでにのべたように、救いの時点でキリストを信じているかどうかは、問題ではありません。神についてどの程度理解していなければならないかも、神の判断によるのであって、人の計りによるものではありません。先に述べたように、アブラハムの神知識、神理解は随分貧弱でした。神がお喜びになったのはアブラハムの理解ではなく、アブラハムの信頼だったから

です。アブラハムの神への信頼が、さらに神を体験させ、神を理解させ、より高度な神礼拝へと導き入れたのです。

現代の異邦人に求められるもの

現代の異邦人の救いのために、求められるのも同じ信仰です。とはいえ、キリストはすでにお出でになり、十字架の御業も完成していて、はっきりと記録に残され、福音として語り伝えられているのです。したがって、キリストを信じる信仰も、明確に表現されなければなりません。この点は、アブラハムや旧約の聖徒たちと全く違うところです。たとえ救いの時点では、キリストについてほとんど知らなくても、心の奥底で本能的に感じていた至高の存在が、天地創造の主であることを知り、その愛と恵みと祝福を体験的に理解して行く過程において、自分たちの汚れの深刻さ、罪の深さにも気付き、悔い改めることが必要です。そうしてこそ、本来のあるべきキリスト信仰に到達できるのです。

日本人の罪と悔い改め

日本人にとって、罪あるいは悔い改めという感覚は、あまり馴染みのないものです。旧約聖書という養育係がいなかったため、当然です。しかし、日本人には神の姿に似せて造られた本性が、色濃く残っています。その本能的感覚が、日本人にはもっと馴染深い言葉で罪を自覚させ、悔い改めを教えまた迫ることができます。日本人は、お世話になった方にきちっとお礼をしないこと、感謝を表現しないことを非常に嫌い、義理を欠いていると考えます。また義理を欠いていたことを自覚したならば、きちっとお詫びをすることが絶対に必要です。日本人は、必要以上に「ごめんなさい」と言うことでよく知られていますが、ごめんなさいとお詫びをすること、謝ることが大切とされる文化の中にいます。多くの海外諸国では、むしろ絶対に謝ってはいけないという文化を持っている中で、これは非常に重要な美徳です。

たとえば、フィリピン人も決してやすやすと謝ることはありません。謝ると責任を取らされ、罰を与えられ、賠償させられるのがおちだから、絶対に自分の誤りを認めないのです。それは大地主の下で働く小作農から、召使に至るまで共通に持っている感覚です。ですからフィリピン人が謝るときには、それ相当の覚悟をもってのことであり、日本人の軽々しい「すみません」とは違うのです。

日本人が造り主である神の恵み、愛、寛大さ、さらに罪人の赦しのために準備してくださった、キリストの十字架を知るならば、自分たちが感謝に欠け、不義理を続けていたことを恥じ、美徳を生かして、本当の意味でお詫びをすることができると考えます。

養育係を与えられていなかった日本人に、突然キリストの話をしても、まったく意味が分かりません。パウロがキリストを信じることを強調したのは、ユダヤ人や、ユダヤ人の影響を受けた人々に対してです。先にも記しましたが、ローマに連れていかれる途中で難破したパウロは、マルタという小島で一冬を過ごしましたが、そこではどうやら一人の回心者も出なかったと思われます。様々な奇跡や癒しを行って三か月も留まり、島中の人々から大変な尊敬を受けていながら、キリストを信じる人間を起こすことはできなかったのです。唯一考えられる理由は、マルタ島の人々には、養育係が与えられていなかったということです。日本人も養育係を知りません。しかし、天地をお作りになった絶対者を知り、その恵みに感動したならば、日本人もキリストを理解し、信じることができるのです。

主の名はいろいろあっても同じ一人の主

新約聖書は「主の名を呼ぶものはみな救われる」というヨエルの預言を、二度引用しています。一度はペンテコステの日のペテロの説教の中であり、二度目はローマ人の手紙の中でパウロが用いています。ペテロは明らかに旧約時代の主の名という意味で引用し、そこから切れ目なく進んで、イエスを信じる信仰へと移っています。パウロは旧約の主の名を主イエスの名に適用しています。ペテロにとってもパウロにとっても、主の名は旧約の主の名であり、新約のイエスの名でもあったのです。主の名はいろいろあっても同じ一つの主なのです。

主の名を呼ばない者

したがって、「主の名を呼ぶものはみな救われる」という言葉から、主イエスの名を呼ばない者は救われないと、断定することはできません。また主の名を呼ぶものが「みな」救われるというのも正確ではありません。イエスご自身が、「『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国にはいるのではない」と、おっしゃっているとおりです。（マタイ 7：21）では、誰が救われ誰が救われないのか？　誰が天に上ったか、誰が地に落ちたか？　そのようなことを判断するのは、私たちの仕事ではなく、主ご自身の権威に属することであって、私たちが詮索すべきことではありません。

異邦人のための神学　（１４）

日本人以外の異邦人はどうなのか

世界中でユダヤ人はお０．２パーセントだけ

日本人の伝道の困難な理由のひとつは、日本人が異邦人であり、養育係である律法を与えられていないからだと語ってきました、しかしこの辺りで、強烈な反論が出てきそうです。なぜなら、養育係を与えられていないのは、日本人だけではないからです。世界中の大部分の人々が異邦人なのです。現在のユダヤ人の人口は、世界人口の千分の二ほどに過ぎません。それでも、キリスト教を積極的に受け入れようとしている人々が、世界中にたくさんいます。喜んで福音を信じている異邦人たちが大勢いるのです。同じ異邦人なのに、どこが日本人と違うのでしょう。

福音を受け入れる理由、拒む理由

少しでも福音宣教の歴史を学んでみると、異邦人たちが福音を受け入れるのには、それなりの理由があることがわかります。また福音をかたくなに拒み続けるのにも、理由があります。現在の日本人の多くがキリスト教を受け入れず、福音も聞き入れようとしないのには、当然、理由があるからです。単に養育係がなかっただけの問題ではないのです。

メリットとデメリット

端的に言いますと、特定の共同体全体が、福音を受け入れることに何か大きなメリットがあると判断すると、その共同体の構成員の多くが喜んで福音を受け入れ、逆に大きなデメリットがあると考えると、その構成員はなかなか福音を受け入れなくなってしまうのです。人間の多くは、メリットとデメリットで新入者あるいは新入物を、受け入れるか拒絶するかを決定します。

大航海時代のカトリック国の宣教

したがって、カトリック国のポルトガルやスペインが、大航海時代に植民地を増やし、土地の人々に、剣か十字架かで二者択一を迫ったときですら、土地の人々はメリットかデメリットかで考えたのです。それで、たとえ侵略者の宗教であっても、カトリックの教えを受け入れ、侵略者に服従する態度を示し、その支配を受け入れた方が、反抗し、命を失うよりは良いと考えたならば、その宗教の支配も受け入れます。その時のメリットかデメ

リットかの判断材料には、たくさんのことが含まれます。

植民地化推進の常とう手段

例えば宗主国の習慣として、どこの植民地でも行われた、植民地化の推進と強化の常とう手段のひとつに、土地の女性を略奪、あるいはレイプしてまで混血児を作り、その混血児に現地の人間よりも一段高い地位と名誉と収入と権力を与え、侵略者の手先として働かせるという方法がありました。これはカトリックの植民地がはびこったときも、プロテスタントの植民地がそれにとってかわって、勢いを見せたときもまったく同じでした。そのような現代人から見るならばまったく卑劣な手段も、現地の人々の間ではかなり好評でした。家族が自分たちの娘を差し出したり、妻までも提供したりすることさえありました。娘たちも、自分の子供が土地の中では、特権階級に属せるという魅力に負けて、自らを差し出す、あるいはあえてレイプの犠牲者になるということが、しばしば行われていました。善悪の判断ではなく、メリットかデメリットかの判断の方が、重要だったのです。

西欧文化を受け入れるメリットの大きさ

西欧から来た進んだ文化を受け入れるメリット、より強い経済力に服するメリット、戦争で命を落とすよりも、従順に僕として働く方のメリットが大きいと判断されれば、小さな集落共同体も大きな部族も、あるいは国家という共同体も、侵略者に恭順を示す道を選び、その宗教を受け入れることも、メリットが大きいと判断されれば、喜んでそのようにしたのです。

一度侵略者に隷属する道を選んでしまうと

特に受け入れ側の共同体が小さく、経済力も武力も圧倒的に劣っていた場合は、様々な抗争はあったとしても、結局は侵略者を受け入れて来たのが常です。一度侵略者に隷属する道を選んでしまうと、そこから脱出することは非常に困難になります。植民地国からの独立が、自力ではほとんど不可能であったことは、歴史が証明しています。ポルトガルからの独立も、スペインからの独立も、イギリスやオランダなどプロテスタント諸国からの独立も、どれほど大きな犠牲と努力を重ね、強いレジスタンスが起こったとしても、自力では不可能だったことが多いのです。ただ、アメリカがイギリスから独立したのは、侵略された植民地の人々が、独立を勝ち取ったのではなく、入植者たちが母国から独立したのであり、例外と言えます。

弱肉強食の世界

ですから植民地政策は、強い国が弱い国、あるいは微力な地域共同体を相手に行う、明白な弱肉強食の世界だったのです。経済力、武力、文明力、科学力、生産力、統治力、そして宗教の組織と神学の力など、すべてにおいて強い者が弱い者を支配するのです。その点において、日本にやって来たポルトガルもスペインも、多くの面では日本より強くまた勝っていましたが、総合的に日本にかなわなかったということです。特に日本の大名たちが、国家として統一を見せていたカトリックの到来時は、彼らの戦力では日本を打ち負かせることが出来なかったのです。

日本の為政者たちの態度

日本の為政者たち、秀吉も家康も、初めの内こそ貿易にメリットがあると考えて、カトリックを優遇しましたが、すぐに宣教師たちの背後の国家が、日本の植民地化をもくろんでいたことを見抜き、宣教師たちを国外追放にし、カトリックの宣教を禁止してしまいました。彼らはカトリックの教義自体を良く学んで、これを嫌ったのでも禁じたのでもなく、国家の安寧を願って、侵略者の予備活動としてのカトリックの宣教を禁じたのです。

カトリックの暴挙

またカトリックの宣教師たちも、当初は、反プロテスタント運動としてカトリック内の良心派だった、イエズス会の宣教師が主体でした。それで、日本人たちの人望を得ることができたのですが、やがてイエズス会以外の宣教師たちも入ってきて、イエズス会の善良さを汚してしまったのです。また、カトリックに改宗した大名たちが、神社仏閣を破壊する暴挙に出たり、領地をカトリックに献上したりするなど、為政者としては赦せない行為も続きました。特に領地をカトリックに献上することは、彼らを遣わしていたスペインに献上することにもなったからです。さらにその上、戦に負けてすべてを失った人々を、奴隷として東南アジアなどに輸出する、非人道的かつ非合法な活動に、カトリックの宣教師たちが絡んでいたことも、為政者たちを怒らせた理由の一つです。

日本の政治の微妙なバランス

さらに為政者たちにとって、赦すことが出来なかったのは、カトリック信者たちが、彼らの神に命さえ奉げる絶対の忠誠を誓い、大名や為政者の命令を聴かなくなる恐れがあったことです。これは信長が一向一揆を恐れたのと同じ理由です。特に日本は、象徴的には天皇を中心とした朝廷が、日本を治める最高権力者として認められていながら、実質的には、武士勢力が治めるという、微妙な力関係、非常にわかりにくいバランスの上に成り立

っていた、特殊性がありました。最も力の強い武家が、朝廷から征夷大将軍の名を拝領して、日本を統治していたのです。そのようなバランスの中に、絶対の神を信じ、絶対の服従を旨とし、天国を信じて死をも恐れない集団が、急速に巨大化するのはまさに危機的な状況を作り出すと読んでも、不思議ではありませんでした。

オランダだけには通商の門戸が開かれていた

これらの理由のために、日本の為政者たちは何としてもカトリックを阻止し、植民地主義国家の侵略を避けようとしたのです。ですから同じキリスト教の名を語っていても、強い予定論に立って、神は救おうとされる者を救われるのだから、人為の宣教などは不要であると考え、宣教に興味を示さなかった当時のプロテスタント国の雄、オランダとの通商には門戸を開いていたわけです。ただし、同じプロテスタント国でもっと強力になりつつあったイギリスには、門戸を開きませんでした。イギリスの王室が完全にカトリック離れをしておらず、カトリック国のスペインなどと婚姻関係を結ぶとの、情報が入っていたとも思われます。またイギリスが、かつてのカトリック諸国以上に植民地政策を推し進め、そのあまりにも非人道的行為の数々についても、家康は聞き及んでいたと思われるのです。家康も、その孫の三代将軍で、最も激しくキリシタンを迫害した家光も、海外との通商には非常に熱心に取り組んだのですが、キリスト教の侵入だけは絶対に許さなかったのです。フィリピンを植民地化し、自国の王の名前を持って国名にしたスペインは、何とかして宗教を利用し、日本を侵略しようという野望を持ち続けていましたが、イギリスに無敵艦隊を撃破された後の衰退は激しく、さらに日本との通商に先んじたオランダの干渉も強いうえ、日本の武力もまた強力であったため、とうとうあきらめざるを得なくなりました。

カトリックに対する強い疑念と恐れを定着させた徳川の治世

徳川幕府の二百五十年にわたる激しいキリスト教の迫害の歴史は、日本人の心の奥深くに、カトリックに対する深い疑念と、強烈な恐れを植え付けました。そのような背景の中に、幕府が倒れ明治維新が始まったのです。為政者たちと一般の日本人たちの、カトリックに対する言い知れない恐れと疑念は、長年にわたって凝結した汚れとして、日本人の心に沈殿していました。それがカトリックを超えて、キリスト教という宗教全体にまで、適応されていきました。そして時代が変わって、同じキリスト教を名乗るプロテスタント国が主流となった、西欧植民地主義の国家が束となって押し寄せてきたのです。事実、その頃のアジア諸国で、キリスト教国の植民地となっていなかったのは、日本の他、タイと朝鮮、そしてネパールとブータンだけだったのです。朝鮮は、アヘン戦争に負けて事実上イギリスの植民地となっていた、中国に支配されていたのです。タイはフランスとイギリスの力に挟まれて、領土を切り売りしながらやっと独立を保ち続けました。ネパールとブー

タンは共にあまりにも貧しく、また険しい高山の奥にあったために、植民地とされる価値も認められずに、独立を保っていました。

二百五十年以上にわたって戦争がなかった日本

日本の植民地化を狙って来るどの国をとっても、二百五十年以上に渡って戦争をしてこなかった、日本にとっては強敵でした。徳川幕府は、大名たちが北前船以上の大型船舶を作ることを禁じ、自らもそれに倣っていました。大砲などの大型の火力から、鉄砲などの小型武器までも厳しく禁止し、諸藩の外国との接触を最小限にして、平和な国家造りに専念していたのです。これは世界史的には異例です。そのために、日本は非常に高い識字率を獲得し、美術、文学、数学、あるいは手工業などで大きく発展し、明治以後の国力増強の基礎にすることが出来たのです。

ポルトガルが種子島にもたらした鉄砲は、新し物好きの信長によって、たちまち複製され、その数三千丁に及んだとも言われています。もっとも、五百丁と言う説も、千五百丁との説もありますし、武田軍も鉄砲を用いたと伝えられてもいますが、とにかく大量の鉄砲を実戦で効果的に用いたのは、世界で信長が最初でした。しかし家康はこの鉄砲から大砲、さらには刀や槍までも使用を禁止にしてしまいました。刀や槍の所有は認めましたが実戦は禁止し、武士としての象徴的意味を持たせるに留めたのです。

一方西欧の世界では、その徳川の治世中、血を血で洗う戦闘を果てしなく繰り返していました。諸侯、諸王、さらに宗教間の戦争だけでなく、植民地政策に関わる戦いも熾烈極まりなく、留まるところを知らなかったのです。大型の戦艦の隊列が造られ、航海術も発達し、強力な大砲が次々と制作され、みな戦争慣れしていました。本当のところ、徳川末期の日本がこれらの国々とまともに戦い、勝利するのは易しいことではないと思われました。

無敵艦隊を撃破した新勢力イギリス

特に、スペインの無敵艦隊を撃破したエリザベス一世のイギリスは、新興勢力としての台頭が凄まじく、太陽は自分たちの領地を見ないで、昇ることも沈むこともないと自負するほどでした。彼らは文字通り世界中を植民地にし、明治維新を遡ることわずか二十年ほどには、アヘン戦争という人間性を踏みにじる醜い侵略戦争で、隣の大国中国を撃破し、その勢いを持ったまま日本の植民地化を狙い、様々な画策を続けては、薩摩や長州と小規模の戦争を繰り返していました。そして日本という国は多くの藩に別れ、それぞれかなりの陸上戦闘能力を持っていることを知り、軍艦からの砲撃と小規模の歩兵部隊だけでは、

これらの藩を屈服させることはかなり困難で、中国を攻略したようにはいかないことも理解したのです。

そこでイギリスは、日本に内戦を起こさせ、弱体化させてから責める戦法を取り、坂本龍馬などを懐柔して資金を渡し、日本を分裂させようと画策したのです。坂本龍馬は維新の英雄として美化されていますが、その実、イギリスの日本植民地化の画策に、利用されたに過ぎないのです。彼を直接操ったのは、長崎に住居を構えていたグラバーでした。彼はアヘン戦争で暗躍したイギリス人です。その彼が日本に静かに住んだのは、日本の植民地化を狙って密に画策する為でした。彼の屋敷を改築したとき、屋根裏に大きな隠し部屋が発見されたのは、つい数年前の出来事です。土佐の郷士という貧しい下級武士に過ぎなかった彼が、どのようにして七〇人ほどの仲間を食わせ、合わせて七千三百丁とも言われる銃を手に入れ、イギリス製蒸気戦艦ユニオン号まで所有し、海難事故を起こした相手の徳川御三家の一つ、紀州藩との争いにも勝ち、維新の立役者にまでなれたのでしょう。もちろん彼の能力に疑問はありませんが、当然、グラバーからの多大の資金提供が、あったればこそ可能だったのです。

アメリカの思惑

しかし幸いなことに、いくつもの国が同時に、あわよくば、日本を植民地にしようという下心を持って、日本に来ていたことや、当時すでに最も強力な国家になっていたアメリカが、日本の植民地化を望んでいなかったことにより、日本はどこの国の植民地にもならずに済んだのです。

最初に日本に来て開港を迫ったアメリカは、当初から日本の植民地化は考えていませんでした。ただ、当時絶対に必要だった鯨油を確保するための、捕鯨船の水や食料の供給のために、日本の開港と通商を求めたのです。本当のところ、そのころのアメリカはスペインとの戦いを始めとして、近隣諸国や南太平洋諸島などの植民地化に力を費やしていて、日本と戦おうなどとは思っていなかったのです。さらにアメリカは日本との不平等条約で、すでに莫大な利益を得ていたために、日本が他国の植民地になることも、絶対に防ぎたかったのです。明治直前の幕府と尊王攘夷派の戦いの背後には、幕府についたフランスと尊王がたについたイギリス、さらに、日本の独立の維持を望んだアメリカなどの暗躍があったのです。

キリスト教を嫌った明治政府

明治政府は直ちに信教の自由を謳いましたが、あくまでもキリスト教を嫌い、禁教扱い

にしています。ただ、西欧諸国の強い要望に抗いきれず、明治六年になって初めてキリスト教の禁教を解いたのです。明治政府は、徳川幕府のカトリック弾圧の手先となって、優遇処置を得て甘い汁を吸っていた仏教も嫌って、いわゆる廃仏毀釈を行って迫害していますが、短期間で終息して行きました。

準国教化された復古神道

西欧列強の精神文化の土台あるいは支柱は、キリスト教にあると見抜いた明治政府は、日本もそのような精神の土台、あるいは支柱を持ち、国力において西欧列強に並ぶ必要があると考えました。それで徳川時代の終わり近くになって、本居宣長や平田篤胤によって提唱され、大きな思想勢力になっていた復古神道を取り入れ、これを国家神道と定め、天皇を現人神として祭り上げて、大日本帝国を作りあげることに成功しました。復古神道は、元々教えのないことを特徴としていた神道に、ひとつの体系を与える試みで、日本神話にただ一度だけ登場する天之御中主神（アメノミナカヌシノカミ）を主神として祀り、禁止されていたイエズス会の神学書を手本にして、組織化したものです。天之御中主神には、八百万の神々を統括するという以外には、何ら役割もなく説明もなかったために、復古神道では自由にこれを用いて、あたかもキリスト教の創造神のような立場を与え、体系化することが出来たのです。

復古神道を取り入れてこれを国家神道とし、天皇制を強固にした明治政府の大きな力となったのは、明治憲法と教育勅語の二本柱でした。明治憲法は信教の自由を認めてはいましたが、あくまでも、「安寧秩序を妨げず、臣民たる義務に背かざる限りにおいて」と、制限を加えたもので、キリスト教の活動を制限することができる余地を残したものでした。明治政府は、国家神道を宗教としてではなく、日本独自の精神的支柱とみなし、国の祭儀はすべてこの国家神道にまかせることとし、いたるところに護国神社を建立し、実質国教に近い取り扱いをしたのです。

また明治政府は、「和魂漢才」という古い言い回しをとりあげて、「和魂洋才」とパロディ化し、新たな国策として流布させ、キリスト教の浸透を妨げようとしました。この復古神道に倣った国家神道の準国教化は、それから一世紀半以上経過し、国家神道自体が廃止された戦後から八十年近くが過ぎても、まだ、和魂洋才のスローガンと共に、強い影響力を持ち続けています。国家行事は、神道のお祓いを受けて行われるのが常であり、政府はこれを宗教とは言わず、日本の文化、日本の精神であると言い続けている通りです。もっとも、これと同じようなことは、アメリカやイギリスを始めとした多くの先進国でも行われていますので、特異なことではありません。それらの国々でも信教の自由は保障されていますが、国家行事は、ほとんどキリスト教の伝統に沿って行われているからです。

日本人の精神としての神道

確かに神道の本来の姿は、聖書の神観に非常に近い感覚を表現したものです。神道はあらゆる自然物に、神聖な存在が宿っていると感じとり、その存在を畏れ敬い礼拝しようとします。通俗信仰としての神道は、八百万の神々を認め、仏教と混合し、偶像礼拝までしていますが、本来の神道は目で見ることも、手で触れることも、言葉で表現することもできない、至高の存在を自然の中に感じ、これを敬い畏れ、崇め、また感謝するものです。本来の神道には偶像はあり得ないのです。ですから今でも、本来の神道の姿を保っている限り、偶像はないのです。また本来の神道の感覚を保っているときの日本人には、偶像は存在しないのです。それが通俗信仰に陥ったとき、仏教やアニミズムと習合した民間信仰に流れたときには、偶像が幅を利かすようになり、八百万の神々のお出ましになるのです。この至高の存在を感じ、その至高の存在に喜ばれる生き方をしようというのが、日本人本来の気高い精神です。

天地創造の神に似せて造られた人間としての日本人の精神

日本人本来の精神は、天地の創造者である神を感じ、その神を日本人の感覚で表現したものと考えるのが、一番ふさわしいと思います。旧約聖書の啓示を知らない日本人ですから、自分たちの感覚で天地創造の神を感じ、その神を崇めようとしたのは当然です。またそこに多くの誤りや不透明なものが入り込んだのも当然です。神の一方的な啓示があったからこそ書かれた天地創造の記述も、神の啓示を頂くことがなかった日本人には、書くことが出来なかったことです。そのため日本人の間では、創造神という概念さえ非常に朧気で曖昧です。

とは言え日本人は、パウロがローマ書一章で語っているように、あらゆる被造物を通して、ご自分の目に見えない本性、すなわちご自分の永遠の力と神性を、はっきりと示して来られた無限の神の存在を強く感じ、崇めてきたのです。被造物を通しての神の自己顕現は、人間にとって明らかに理解可能だったものとして、聖書で明確に語られているのです。日本人の多くは、それを認める感覚を持っていたのです。それは神に似せて造られた人間の、霊的本性の感覚なのです。

その霊的本性によって、至高の存在を認め理解した者に、愚かな偶像礼拝などはあり得ないはずだったのです。日本人は民族として、明らかにこの神の自己顕現を感じ取り、また受け取ったのです。神に似せて造られた者の本能として、霊であられ、あらゆるものを超越し、あらゆるものを貫き、あらゆるものの中に存在し、あらゆるものをご自分の内に

収めておられる存在を感じ、意識し、それを活かして、その存在に恥じない生き方を心がけるところに、日本人としての精神があり、日本人として宗教心があるのです。

聖書に記録されている神を感じていた異邦人

律法を頂いたユダヤ人ではなく、律法についてはまったく無知の異邦人でありながら、天地創造の神を感じ、その天地創造の神に導かれて、律法を知っている者を訪ねてやってきた人たちのことが、聖書に記されています。例えばソロモンを訪ねてきたシバの女王、キリストの誕生を祝うために東方から訪ねてきたマギ（占い師）たち、あるいは、バルナバに伴われたサウロが感動して、その名を拝借してパウロと名乗るようになったと思われる、キプロス島のセルギオ・パウロも、そういう人物に近かったのかもしれません。

すでにいろいろなところで書いてきたことですが、筆者が沖縄で開拓伝道に励んでいた時、自分の拝んでいる神に命令されて、住んでいる離島から八時間もかけて、筆者を訪ねてきた人がいました。彼は自分の神に言われとおりに、筆者が住む山原（やんばる）の、金武村の炎天下の大通りを歩き、白い大きな十字架の印がある家を見つけ、筆者を探し出した上で、筆者の信じている神とその教えについて尋ねたのです。「その人の言うこと全てを信じなさい」と、自分がお仕えする神に命じられたとのことでした。筆者は四時間ほどもお話ししましたが、全てを聞き終わった彼は、「今のお話をみんなそのまま信じます」と言いながら、深々と頭を垂れ、帰って行かれました。キリスト教の神以外の神はすべて偶像で、それを信じるのは偶像礼拝の罪であると、厳しく教わっていた新米伝道者の私は、狐につままれた思いで見送ったものです。今になって思うのですが、彼もそのまじめな信仰態度のゆえに、天地創造の神に導かれて来たのでしょう。

デメリットなキリスト教

このように日本人は、天地万物を作られた存在を感じて生きて来たにも拘わらず、キリスト教を受け入れないのは、キリスト教を受け入れるには大きなデメリットがあったからです。それらのデメリットの多くは、キリスト教が、植民地主義と重なって入ってきたことに関係して、作られてしまったものです。

キリスト教を客観的に見ている日本人

日本人の多くは、世界史を学んでいます。その中でキリスト教が果たした役割も、かなり良く理解しています。客観的に見てキリスト教は、良いことばかりをやって来た、崇高な宗教ではなかったのです。それればかりか、ローマ帝国とキリスト教の癒着、宗教裁判や

魔女狩り、十字軍の無謀さと残虐性、植民地政策の後押し、奴隷制度発展、人種差別、神の名で行われた数々の戦争、カトリックとプロテスタントの抗争、カトリック国とプロテスタント国の熾烈な戦争、カトリック国や正教国の後進性のもたらした弊害なども、多くの日本人には常識として知られています。

キリスト教を受け入れることに大きなデメリットを感じ取る日本人

いま日本人は、キリスト教を受け入れるメリットを、感じられないのです。むしろその反対に、この日本でキリスト教を受け入れるには、大きなデメリットがあると感じています。西欧で発展したキリスト教は、当然、日本の様々な実情には合わないところが多い、面倒くさい宗教となっています。日本の文化や習慣にそぐわないことが、やたらに多く、まともに・・・牧師に教えられる通りの・・・・伝統的クリスチャン生活をしようとすると、日本の社会では生きていくのが困難になるのです。それでキリスト教が教える神を信じたいと思っても、教会に行くのはやめてしまった「隠れ信者」の方が、教会生活をしている信徒よりもたくさんいると、言われるほどなのです。キリスト教の宣教師たちは自分たちの宗教が最高で、絶対に正しいと信じ、自分たちの文化がどこの文化よりも優れていると信じているため、すべての面で絶対に妥協をしない、頑固な人たちになっています。日本人はそれが嫌いなのです。

イエス様の時代には時代錯誤になっていた安息日

それはちょうど、定住文化の中で複雑多様な生活様式を持つようになった、イエス様の時代のイスラエルの人々に、安息日の定めを強制するような、軋轢を生みだしたのです。安息日の定めは、千数百年も前に、奴隷生活から解放されたばかりで、自分たちの日常生活を守る単純な規律さえ、まともに持つことが出来ないまま、放浪生活を続けなければならなかった、数十万の数の人々をまとめるために、最小限の生活指導として与えられたものです。イエス様の時代には、安息日はすでに時代遅れになって、当初の目的を果たす機能はなくなり、無駄に社会生活を規制し、人々に難儀を強いるだけになっていたのです。

イエス様だから、ご自分から堂々と安息日を破り、安息日を守れない人たちを擁護し、安息日は人のためにあるのであって、安息日のために人があるのではないなどと、大胆におっしゃることが出来たのです。その上ついに、「神様がお休みになることなどないのである」と、創世記の記述の史実性に疑いを持たせてまで、安息日を守ることはむだだとお話になったのです。創世記の記述は事実に根差してはいても、事実そのものを教えようとするものではなく、神様と人間との間の真実、あるべき姿、道を教えるものだったからです。でもそのように大胆にお話になったために、イエス様は人々の反感を買い、十字架に

架けられることにもなったのです。

発展途上国の人々にとっての大きなメリット

一方、多くの発展途上国においては、西欧文化と共にキリスト教を受け入れることは、いまだに大きなメリットになり得るのです。自分たちの国、あるいは民族にとって、西欧の経済力、武力、生産力、学力など、何をとっても憧れです。自分たちが西欧諸国に搾取され続け、貧しさの中に取り残されてきた、悲しい歴史さえも良く知らないままです。戦後の日本の様に、歴史は勝利者の都合によって書かれ、支配者の益になるように教えられるからです。また、現代の福音派がもたらすキリスト教は、土地の精霊信仰や、大航海時代のスペインのキリスト教が残したものに比べると、よほど美しく、良いものに思えます。キリスト教が持って来る、教育、医療、福祉、あるいは宗教教育自体も、彼らの中の既存のものに比べると、はるかに優れていることでしょう。その場その場の必要に応じた、応急手当や支援事業、さらには現代的な音楽を用いた礼拝なども、非常に魅力的でしょう。ましてやペンテコステ派の宣教は、それらにくわえて、神癒があり、奇跡があり、繁栄の神学などという怪しげな教えまであって、魅力にあふれているのです。多くの発展途上国の人々にとって、キリスト教を受け入れることは、より良い西洋式生活へのあこがれの、表現だったのです。

発展途上国の人々にとってのデメリット

ただし、現代キリスト教の宣教が、すべての発展途上国の人々にとって、メリットとなるとはかぎりません。大きなデメリットも考えられるのです。例えば回教を国教にしている国、あるいは回教が非常に強い国では、人々がキリスト教を受け入れることは、死を意味する場合さえあります。仲間外れにされ、地域共同体や家族から追放されることもあります。仏教やヒンズー教の国家や地域でも、程度の差こそあれ、似たようなことが起こります。このような環境の中では、よほどの大きなメリットがない限り、クリスチャンになる者は起こってきません。共産主義国や社会主義国でも、キリスト教を受け入れることは、社会的地位や職業を失うなどの危険性に直結しますし、命の危険性を伴う場合もあります。そのような環境の中では、クリスチャンになろうとする人は、めったに出てこないのです。

メリット・デメリットで論じる是非

福音宣教とその効果について、損得勘定であるメリット・デメリットで論じたことに、違和感を持たれた方もいらっしゃるかもしれません。しかし、究極的には損得勘定なのです。その点はイエス様も良くご存じです。そして、メリットをちらつかせて、福音を信じ

るように励ましたおられるのです。すべて重荷を負って苦労している者は、私のもとに来なさいという招きも、永遠の命が与えられるのですよという励ましも、大きなメリットをちらつかせての誘惑です。そしてイエス様のため、父なる神様の栄光のためには、たとえこの命を失っても良いという判断も、自己放棄のように見えるかもしれませんが、究極的にはそれがいかに永遠のメリットに繋がるかであり、神の栄光という自分の価値判断に、寄与するかの問題なのです。

キリスト教のメリットが高く評価された時期

百六十年間に及ぶ、近代キリスト教の日本宣教の歴史の中で、キリスト教のメリットが最も高く評価されたのは、第二次世界大戦の後の、およそ二〇年間だったと言えます。鬼畜米英を叫んで激しく戦い、唾棄すべき民族としてイギリスやアメリカを嫌っていた日本人ですが、戦後、進駐軍として入って来たアメリカ人を見た日本人は、手のひらを返したように考え方を変えて、アメリカとアメリカの精神の土台となっているキリスト教を、尊敬の眼差しで見るようになっていました。

マッカーサーに代表されるアメリカ人に、人道的な豊かさを見、民主主義の美しさに魅かれ、敵であった日本人に対する支援の姿に感動したのです。筆者が小学生の頃の運動会は、赤いハチマキと白いハチマキの二組に分かれて、源平合戦になぞらえて勝ち負けを競うのが普通でしたが、いつの間にかそれが「白、進駐軍。赤、アメリカ」などというおかしな言い方に変わったのです。進駐軍はアメリカでしたから、赤組も白組もアメリカになりたかったのです。その素晴らしい国アメリカの背後に、キリスト教の信仰があると信じたのです。だから戦後の二十年間は、キリスト教を受け入れることは、いろいろな意味でメリットと考えられていたのです。マッカーサーによる財閥解体や農地改革が、一般大衆に喜んで受け入れられたことも大きかったと思われます。それは戦後の荒廃の中から、日本人を立ち上がらせた政策でした。その上、マッカーサーはキリスト教優遇政策を取って、教会をアメリカからの支援物資の配給所にしたり、数千人の宣教師を招き入れ、数百万の聖書分冊を配布したりもしているのです。

たちまち起こった反アメリカと、キリスト教に対する失望

ところが、アメリカとキリスト教を一つにしたような、キリスト教を高く評価する空気は、ベトナム戦争の泥沼の中で、泡沫のように消し飛んでしまいました。あれほど尊敬されていた民主主義の国、人道主義の国、正義を体現すると思われていた国アメリカが、あまりにも醜い姿をさらけ出し始めたからです。アメリカも、結局のところ、日本と変わらない、いや、日本より酷いではないかと、日本人の多くは感じ始めたのです。それで、ア

メリカの精神的基盤と考えられていた、キリスト教に対する評価も、たちまちのうちに下落してしまいました。日本においても強い反アメリカ運動が起こりましたが、その背後では、キリスト教に対する大きな失望があったのです。

下落し続けるキリスト教の評価

その後も、日本におけるキリスト教の評価は、下落し続けています。六五年間は極秘文書として保管されてきた、第二次世界大戦に関わるアメリカの機密資料が開示されるようになり、彼らが日本との戦いで演じた卑怯な役回りも、日の目に晒されるようになりました。マッカーサーの下で行われた、war guilt information program なるものの存在も、明らかになってきました。これは日本人を戦争犯罪者という自虐意識に閉じ込め、日本という国家に失望し、日本人であることを恥じるように仕向けて、アメリカに隷属させ、二度と再び戦争を企てないように、情報を操作するための企画でした。これによって、日本の真珠湾攻撃は戦争犯罪だという意識を定着させられ、アメリカによる二度の原爆投下も、その犯罪に対する当然の報いだと思い込まされて来ました。日本の重大な戦争犯罪は、アメリカやイギリスに留まらず、中国を始めアジア南太平洋諸国に及ぶと思わされ、深い贖罪意識にさいなまれるようにも仕向けられました。日本人の中国に対する贖罪意識は現在まで続き、中国の対日本政策に利用され続けています。韓国は日本人の自虐意識をいいことに、ありもしない歴史を捏造して日本を陥れ、金を儲けようと画策し続けています。世界の常識や国際条約に反して、戦時の日本人政治家や軍人を無理矢理に裁いた東京裁判の、間違と違法性、またそこにあった意図も暴露されてきました。このプログラムの下、七七〇〇種を超える日本の書籍が、日本人の自信が打ち砕かれるように、いわゆる焚書処分となっていたことも分かりました。日本人の多くは細かいことは理解しないとしても、そのような隠されてきた歴史の事実が、少しずつ明らかにされるごとに、キリスト教に対する失望を強くしてきたのです。今や、アメリカの精神文化や宗教文化を、高く評価し尊敬する日本人は絶滅危惧種になってしまいました。今でもアメリカは、その繁栄や国力、あるいはエンターティメントの分野などで、日本人の憧憬を勝ち取っていますが、もはやそのキリスト教文化を尊敬する日本人は、皆無に等しいでしょう。

日本はキリスト教がなくてもここまでやって来た

世界的に、日本の評価は落ちていると言われて、久しくなります。それなのに、日本人の自己評価、あるいは日本人の自国評価は、逆に高くなっているのではないかと、思わされることもあります。

多くの日本人は、日本にキリスト教は無用だと感じています。なぜなら、日本はキリス

ト教無しに、今までやってきましたし、ここまでやってきたからです。決して日本が最高だとは言いませんし、日本人は何から何まで素晴らしいとも、思ってはいません。しかし日本はキリスト教を拒絶しながら、ここまで到達したのです。国家を評価する様々な点を省みても、それぞれの国の人々を評価する要素を考察しても、日本という国も、日本人という人間も、かなりの高く位置付けされます。それは、西欧のキリスト教諸国に比べても、引けを取らないばかりか、かえって、憧憬をもって見られることさえ多いのです。日本はキリスト教なしにここまでやって来た。それなのに、西欧の国々はキリスト教を掲げ、教会を持ち、聖書を学びながら、あの程度に留まっているのです。どうして日本に、キリスト教が必要だと言えるでしょう。なぜ日本人が、クリスチャンになる必要があるでしょう。

学校教育でキリスト教の歴史を学んでいる日本人

日本人の多くは、捏造されたＧＨＱの戦争犯罪情報には、未だに騙され続けています。（ここでGHQのトップとして、war crime information program を指揮したマッカーサーが、ずっと後になって自分の働きに就いて語った中に、次のような言葉があったことを知っておくのもいいでしょう。彼は、日本がアメリカやイギリスによって不当に海上封鎖をされ、必要な物資を輸入できなくなってしまい、ついに真珠湾の攻撃をしなければならないまで、追い込まれた経緯を回顧し、もしあの時、自分が日本の政治家だったなら、間違いなく、自分も真珠湾攻撃に踏み切っただろうと言ったのです。）

未だに多くの日本人は騙され続けていますが、その一方では、中学時代の社会科、あるいは高校の世界史によって、キリスト教の醜い歴史を学んでいます。キリスト教はその長い長い歴史において、いかに多くの重大な罪を犯し続けてきたかを学んでいるのです。本当のところ、キリスト教ほど長期にわたりまた広範囲に、しかも深刻で残虐な犯罪を続けてきた宗教はほかにありません。教会内部の醜い権力闘争に始まり、ローマ帝国を頂点とする権力者との癒着と堕落、人種差別、植民地政策とそれに伴う非人道的行為の数々、他の宗教に対する差別的で高圧的な取り扱い、奴隷制度、宗教裁判や魔女狩り、さらにはカトリックとプロテスタントの戦争と、きりがありません。西方教会、いわゆるカトリック教会では、少しばかり改善されてきた権威主義、封建主義、中央集権主義も、東方教会すなわち正教会の強い地域では、いまだに根強くはびこって国家の発展を妨げ、人々の暮らしを劣悪な状態に閉じ込めています。

個人的な話になりますが、筆者は一九六六年に聖書学校を卒業して以来、牧師もしくは海外宣教師として働き続けてきました。自覚はありませんが、他人からは、いわゆるキリスト教の聖職者と呼ばれる者の一人です。しかし数十年前から、キリスト教という名の、西欧の宗教の教師であることを止めたと、信徒たちには宣言しています。キリスト教の犯

罪性には、まさに十字架を負うような、痛みと苦しみを感じ続けてきたからです。それで筆者は、キリスト教の牧師ではなく、聖書の教えを説き、キリストの教えを語る者として、活動を継続することにしています。西欧経由のキリスト教の教えと、聖書の教え、あるいはキリストの教えは、あまりにも違うのです。

福音とはメリットのあるニュース

福音をのべ伝えるとは、メリットのある訪れを伝えることです。福音はメリットです。私たちは、日本人にメリットを感じられるように、福音を語らなければなりません。今まで私たちが語ってきた福音は、あまりにもデメリットが多すぎ、強すぎたのです。メリットが隠され、覆われてきたのです。メリットを明らかにしましょう。

異邦人のための神学　（１５）

人は死んだらどうなるか

人間の悩み

数多い人間の悩みの中で、最も難しいもののひとつに、死後についての恐れがあります。死を恐れるのは多くの高等動物に共通のようですが、死後について恐れるのは、あるいは人間だけかもしれません。他の動物たちは死を恐れるというよりも、必死に生きる本能が与えられているように見えます。聖書には、「神は人の心に永遠への想いを与えられた」という、古の人の言葉が記されています。永遠を想う心は、人間が神に似せて造られたことに起因するもののようです。死後のことを想うのは、この永遠を想う思いの中に含まれているのでしょう。

永遠を理解できない人間

人間は神に似せて造られています。しかし神と同じに造られたのではありません。永遠

を想うことはできても、永遠を理解することはできないのです。分からないから不安で恐ろしいのです。完全に神に信頼して生きていた時の人間は、つまり罪を犯して神の御前から追放される前の人間は、素直な信頼のゆえに、分からない永遠についても、神に任せきることが出来、母に抱かれた幼子のように、不安も恐れもなかったはずです。ところが神に反逆して神を離れた人間には、死と言う恐ろしい出来事が入り込み、死後の世界と言う底知れなく不可思議な存在を予期し、不安にかられるようになったのです。

日本人の死生観

日本人の死生観はかなり特徴的です。日本人の精神的支柱である神道には、確固たる死生観がありません。分からないことは分からないままにしておくという、神道の至高の存在者に対する感覚と同じ感覚が、わからない死後の世界についても支配的なのです。妻イザナミを、黄泉の世界まで追いかけて行った夫イザナギが、腐敗して溶けかかった体のイザナミに出会って、恐ろしくなって逃げだしたという日本神話には、死に対しておどろおどろした恐れを感じ、本能的に忌み嫌う感覚が表現されています。要するに、死については深入りしないで、遠ざけておくのです。それでいて、日本人も永遠を想う思いはもっているために、もっぱら死後の世界にこだわっているような、日本の仏教が入ってきて活躍する余地があったのです。地域生活共同体の宗教である神道に欠けている、死者と死後の世界の取り扱いという大きな分野と、血縁共同体の分野に尽くす仏教が、多大な貢献をすることができたわけです。

混乱の激しい仏教の教え

ただし、もともとの仏教は、徹底して現世の生き方を説くものであって、死後の世界にはほとんど無縁であり、そのための教えもありませんでした。ところが仏教は、その発展の途上である種の故郷帰りをして、バラモン教やヒンズー教の死後についての教えを、たくさん取り入れたのです。そのためもあってか、日本の仏教には、死後の世界に関わる統一した教えはありません。それぞれの宗門によって、まったく異なった教えもあり、その曖昧さは実に日本人らしく、「来世は、あると思えばある。ないと思えばない」というようなことが、高位の仏僧たちによってさえ語られていながら、本来、生きている人間によく説き聞かせるべきお経を、何やら分かりにくい語り方で、死者に読みあげるだけの宗教に落ちぶれています。神道があまり取り扱わない分野に、うまく入り込んだだけのことです。とはいえ、仏教の哲学的側面には、大いに学ぶべきものがあると感じています。人生へのアプローチが、キリスト教とは大いに異なっていて、非常に深いところがあると思うのです。

えせ科学の唯物論

この日本の伝統的宗教が取り扱えないままの来世に関して、さらなる厄介な感覚が日本人の精神を支配しています。それは、唯物主義というえせ科学主義の感覚です。日本ほど、唯物的考えが浸透し、科学的であることを重要視している国は、ないと言われます。本来の科学主義は、実験によって証明された事柄だけを、科学的事実として語るべきなのですが、実験によって証明されないから非科学的だと、誤って強弁する人たちが日本ではやたらに多いのです。化学は来世について何も言うことができません。だから、来世そのものを非科学的と言って否定してしまうのは、科学的に大きな誤りですが、大多数の日本人がその誤りに陥って、来世についての考察に懐疑的であり、不可知論に陥っているのです。

曖昧な来世観と延命処置

このように日本人の来世感覚は、非常に曖昧であり、なんとも頼りないものです。そのために、日本ではとにかく生かしておくのが最善とばかりに、むやみに延命処置が採られ、国家予算を締め付けることにもなっています。死に就いては、宗教を抜きにした科学的な考え方をしているかのように、冷静を装う日本人が多いのですが、同時に、内心では死を忌み嫌い、不安を感じ、恐れを抱く日本人も非常に多いのです。正しいか間違っているかは別にして、来世について、かなりはっきりとした宗教的信念を持っている、多くの国々人々とは明らかな違いがあります。

非常に明確な来世観を持つ聖書の教え

一方、私たちが語ろうとしている普遍的な福音は、聖書に基づく非常に明確な来世観を持っています。聖書がそこここで語る来世についての教えは、一見、非常に煩雑で、多くのクリスチャンにとっては、なかなか理解しがたいものです。しかしそれらが、きちっと整理さえされるならば、これほど明瞭に来世について語るものは、他にないと言えます。単なる厭世主義や現実逃避の話としてではなく、確固とした希望として語ることができれば、何事にも曖昧な日本人に対しても、力強い福音となるはずです。

福音を聞く機会のなかった者の死

ただし、筆者が今取り扱おうとしているのは、すでに西欧のキリスト教でかなり詳しく理解されている、キリストを信じて救われた人の死と、キリストの救いを拒絶して死んでいった人の死についてではなく、キリストの福音も、養育係の教え、つまり旧約聖書の教えも聞く機会がないまま、あるいは少しだけ聞いても理解するだけの猶予もないまま、死

んでいった人たちの死についてです。クリスチャンの死とクリスチャンではない者の死についても、西欧のキリスト教の教えには独断的な要素があって、日本人である筆者には首をかしげることが多いのですが、ここで語りたいのは、異邦人の救いのための神学であり、異邦人の死と裁きの問題です。

律法によっては裁かれない異邦人

律法を与えられていない異邦人が、律法によっては裁かれないことは、聖霊に導かれて書いたパウロの教えでも明らかです。（ロ-マ 2：12）そこかしこで語ってきたように、律法を与えられていない異邦人には、自分自身が律法であり、神に似せて造られた人間本来の性質、心に記された律法に照らし合わせて裁かれるのです。

このきわめて明瞭なパウロの教えを、西欧のキリスト教は忘れている、あるいは理解をしていない、もしくは軽々しく扱っていることが、日本を始め、異邦人の地での宣教を困難にしています。なぜなら、西欧のキリスト教の教えは、キリストを救い主として信じる者はみな救われる。しかしキリストを信じない者はみな滅びると、断言して終わりだからです。そのような信仰がまた、キリストを信じていない多くの国の人々に、早く福音を伝えなければならないという、宣教の熱心さにも繋がっているのは事実ですが、そのような早とちりの宣教が多くの困難を生み出しているのも事実です。

母の話

筆者の母は、五〇を少し超えたところで、癌のために亡くなりました。「死んでから会いに行くより、生きているときに会っておいた方が良い」と姉に説得され、私は赴任地の沖縄から札幌の北大病院に駆けつけました。まさに消え入りそうに弱っていた母でしたが、私を見るなり、ピシッと言ったのです。「正明。お前の言いたいことはよくわかっている。でも私は、お父さんのいない天国に行くより、お父さんのいる地獄にいって、一緒に苦しみたいの。」　子供のころ、苫小牧の教会の日曜学校に通っていた母は、「イエス様を信じたら天国に行ける。信じなければ地獄に落ちる」という教えに、子ども心でも強く反発していたのです。

母ほど賢くもなく、西欧のキリスト教の教えを丸飲みにしていた私は、母の言葉に一言も返すことができずに、病院を後にしたものです。でも今になって、母のキリスト教に対する憤りが、分かるようになりました。同時に、もう一つ理解できるようになったことがあります。私たち三人の子供の世話を、半ば放棄してまで奔放に生きた母は、まだ三〇に届かぬ若さで失ってしまった最愛の夫の面影を、壮絶に追い求め続けていたのだというこ

とです。彼女の夫は特務機関に属す高官で、金鵄勲章を受けたほどの人物だったのです。母の最期の数日を、共に病室で過ごした勝気な姉は、とても悔しがっていました。「お母さんは、意識朦朧の中で、『マ・サ・ミ。マ・サ・ミ』って、ずっとお父さんの名前ばかり呼び続けていたのよ。さんざん世話をしてきた私の名前などは、一度も呼ばなかったのに。」

律法を持たない異邦人の滅び

キリストを信じなくても、救いに入った人は、アブラハムを筆頭に沢山いることは、すでに述べたとおりです。しかしここで論じたいのは、律法を持たない異邦人は律法なしに滅びると言われた中の、滅びるという点についてです。律法を持っている人は、律法を持っているゆえに救われるのではありません。律法は救いのための準備をさせるものではありますが、救うものではないからです。律法を持っている者は、律法によって裁かれるだけであって、律法によって救いを受けるのではないのです。救いは律法によるのではなく、キリストの贖いによるのです。

皆一様にではない滅び

また、律法を持たない異邦人は、皆一様に滅ぼされ、永遠の滅びの中に苦しむことになるのでもありません。彼らはキリストを信じなかったために、みな同じようにゲヘナの火で焼かれるのではないのです。すでに述べたように、ゲヘナの火はユダヤ人への警告であり、異邦人には適用されないものだからです。異邦人は、ユダヤ人のように旧約聖書という律法によって裁かれるのではなく、べつの律法、心に記された律法によって、すなわち神に似せて造られた人間の本性に基づいて、それを基準として、それに照らし合わせて裁かれるのです。その中で、「良心」なるものも加味されて判断されるのです。

各々の生前の行いが裁かれる

そしてそこで裁かれるのは、一人一人の生前の行いです。律法を与えられなかった異邦人の多くは、キリストの救いを知らず、信じることもなかったのですから、救われることはありません。彼らは滅びるのです。しかしその滅びは、西欧のキリスト教が言うような、みな一様にゲヘナの火に投げ込まれ、永遠に苦しむ滅びではないのです。あくまでも、それぞれの生前の行いが、人間に与えられた神に似た性質に照らし合わされて裁かれ、それにふさわしい報いが与えられる滅びなのです。

主を信じることなく死んだ者はみな滅びる

日本人も、主を信じることなく死を迎えたならば、滅びるのです。ただしその滅びの刑罰は、救われないというだけが同じであって、みな同じ永遠の苦しみに投げ込まれるのではありません。聖書はむしろ、すべての人は各々その行いに応じて裁かれると、繰り返して教えているのです。みな滅びるという、同じ行く末をたどる異邦人の中にも、クリスチャンよりも立派に律法の教えを守っていた人もたくさんいます。彼らは旧約聖書という律法は知らなくても、心に記された律法、すなわち神に似せて造られた人間の本性を守り、現し、神の御心にかなった生き方をしたのです。彼らはその行いに応じて正しく裁かれ、正しい報いが与えられるのです。彼らは救われるのではありません。あくまでも、救いを逃しながらも、彼らの正しい行いに応じて裁かれ、報いが与えられるということです。

信仰による救いが関わらない、それぞれの行いに応じた滅び

面白いことに、先に述べたように、この行いに応じて裁かれるという聖書の教えの中には、キリストを信じて救われるという概念が、含まれていないのです。あくまでも、行いに応じて裁かれるのです。キリストが語られた、貧乏人ラザロと大金持ちの裁きの譬えでさえも、信仰という要素が含まれていないのです。ただしこの譬え話をもって、ラザロはキリストを信じていなかったのに、アブラハムの懐に抱かれたと言って、信仰以外の救いを主張することはできません。それは聖書の全体的な教えに反するからです。たとえキリストによって語られたとしても、譬え話だけから、詳細にわたる確実な神学は組み立てられません。キリストによる救いは信仰によるもので、行いによるのではありません。しかし、文字で書かれた律法を持たない人は、あくまでも行いに応じて、心の律法を基準にして裁かれるのです。

異なった行いに応じた異なった報い

行いに応じて、心の律法を基準に裁かれた人たちが、皆同じ刑罰を受けるのでは、本当の意味での裁きになりません。それぞれ異なった裁きがあり、異なった報償があるのです。ただし、絶対に救いはないのです。救いとは、滅びとはまったく次元の違う、神様の恵みであり、命の源である神の御許に帰ることであり、再び神と結ばれることです。罰を受けるとか、ご褒美を頂くと言ったレベルとは、まったく異なった素晴らしいことなのです。福音をのべ伝えるのは、その救いのおとずれを語ることであり、より良い報いを受けるなどとは、まったく異なった、別の分野に属することなのです。

神に似せて造られた人間として、立派に生きた人の死

繰り返しますが、異邦人の中には、旧約聖書も新約聖書も知らないまま、人間として非常に立派な生活をした人たちが沢山いました。もちろん、日本人の中にもいました。この人たちはどのような裁きを受け、どのような来世に生きているのでしょうか。キリストを救い主として信じなかったのだから、罪の内に死んで、永遠に消えない火の中に投げ込まれてしまったのでしょうか。それが、私たちが普段から聞いている、西欧キリスト教の教えから出てくる結論ですが、聖書の教えは異なっています。異邦人は、あくまでも旧約聖書や新約聖書の、ユダヤ人的発想による教えに縛られるのではなく、新約聖書のローマ人への手紙第二章がしっかりと基本を示しているように、神に似せて造られた人間性を基準とした、心の律法によって裁かれるのです。そして滅びるのです。救われるのではありません。

滅びるという意味

さらに、多くの人たちは滅びるということを、未来に起こること、死後の出来事として考えていますが、聖書の教えは異なっています。聖書の教えでは、現世が滅びの世界なのです。現世に生きている人は、すでに滅びの世界に生きているのです。その滅びの世界から救い出し新たな命を与えるのが、救いであり福音の力なのです。いまこの世に生きている私たちは、すでに滅んだ者、死んだ者、神の裁きを受けて神の恵みを失った者として、命の源である神から隔てられ、悪魔の支配下に陥った者として、様々な苦しみと悲しみ、困難と苦境の中で呻吟しながら日々を過ごしています。これが滅びなのです。だからこそ、いまこの世の人たちは救いを必要としているのです。

今は恵のとき、救いの日

この滅びの世界としての現世は、いつまでも続くものではありません。この滅びは、ある意味で猶予期間としての滅びであり、まだまだ救いの機会があるという滅びだからです。それを聖書は、「今は恵の時、救いの日である」（Ⅱコリ 6：2）と表現しています。この救われる機会が残されている滅びこそ、今私たちが生きている、現世の滅びなのです。救いの機会を与えられている滅びには、期限があります。いつまでも続くのではありません。キリストも、光のあるうちに光の子となるために光を信じなさい（ヨハネ 12：35 - 36）と、緊迫感を持って語っておられます。今は恵の時という意味と、光のあるうちにという意味は、厳密には一致しないところもあるのですが、救いの機会には期限があるという、切迫感は同じです。

恵の時が過ぎ去ると

この恵の期間はいつまで続くのか？　それはそれぞれがこの世界で生物学的に生きている間です。あるいは、キリストの再臨を予期し、再臨に伴う世の中の激変を見越して、キリストの再臨の時までという制限を入れ、二重の緊迫性のある教えになっているのかもしれません。救われる可能性が残された今の滅びは、キリストの再臨、もしくはその人の死までしか続かないもので、そのあとは、救われる可能性が全くなくなった、完全な滅びの時となるのです。

完全な滅びと裁きの結果

救われる機会が残された猶予期間を過ぎてしまうと、すべての人に裁きが待っています。その猶予期間にキリストを信じることが出来た人は幸いですが、日本人のような異邦人にはとても難しいことです。救いに入ることが出来なかった人、教会が眠りこけて、福音宣教の使命を忘れていたために、福音を聴く機会も与えられないまま、死んでしまった人たちはどうなるのでしょう。その人たちも、神に似せて造られた人間の本性を基準として、良心にも照らし合わせて裁かれるのです。善い行いをして、人を愛し、憐れみ深く、平和のために尽くした人は、その行いに相応しい報いを受けるのです。神に似せて造られた人間の本性に反して、あらゆる悪を行って死んだ人も、同じ基準で裁かれ、同じ基準で報われるのです。しかし、神の正義の裁きを受けて、それぞれの悪行に相応しい報いを受けるのです。

キリストが語られたゲヘナの火と、黙示録に記された火の池

西欧のキリスト教の影響を受けた多くのクリスチャンたちは、イエス様が語られたゲヘナの火という裁きの譬えと、黙示録の二十章に記されている、救いを受けなかった人々がそれぞれの行いに応じて裁かれ、投げ込まれる、火の池を同じものと考えているようですが、同じだと断定することはできません。イエス様がお語りになった事情、あるいは背景は、黙示録が書かれた事情もしくは背景とは、まったく異なっているためです。似たような表現があったとしても、語られた事情や背景が異なっている場合は、同じだと断定してはなりません。

黙示録をどう読むべきか

特に黙示録という書物は、クリスチャンたちに対する迫害が非常に激しかった時代に、彼らを励ますために書かれたものであり、あえて、一般の人々には意味が不明になるように書かれているからです。あからさまに書いたのでは、クリスチャンへの迫害がさらにきつくなる可能性があったためです。それで、明確な言葉で充分に書かれているのではない

ことから、クリスチャンにも理解できない点が多く、文字通りに理解してはならないところも、たくさんあるのです。火の池を字義通り解釈すべきかどうか、断定できないのです。むしろ厳しい裁きの比喩と考えた方が良いと思われます。またそれが、数節前に記されている、永遠に消えることなく燃え続ける火と硫黄の池（黙 20：10）と同じだという保証もありません。ですから、黙示録の記述を持って断定的に理解するのではなく、聖書全体を広く読んで、より明確な教えによって総合的に理解し、黙示録の教えはそれを補佐するものとして、覚えておくのがよいでしょう。

黙示録の性格がそのようなものであるために、そこに書かれている良く理解できない表現を、独断的に解釈し続け、それらの解釈を積み重ねて、非常に特異な神学を主張する人たちが後を絶ちません。黙示録やダニエル書のような黙示文学を、得意げに取り上げて独自の解釈をほどこす人や団体には、厳重な注意して、近寄らないことが肝心です。

現世の滅びよりも暮らしやすい来世の滅びの可能性

キリストの福音に接することも、旧約聖書という養育係にも出会う機会もないままに、神に似せて造られた人間の本性に従って、正義を貫き、哀れみ深く、他人に尽くす生き方をした人も、たくさんいます。良くは理解できなくても、天上の気高い存在を感じ、その存在を崇め、感謝し、拝みながら生きた人もいることでしょう。そういう生き方をしたからこそ、この世では、嫌われ、疎まれ、憎まれ、弾圧され、殺されてしまった人もいたことでしょう。そういう人に対する神の報酬は、どのようなものなのでしょう。全ての人はその行いによって裁かれるという、新約聖書の原則から類推すると、現世における滅びよりも、より良い生活をすることが出来る、来世の滅びもあり得るのではないでしょうか。公平で正義で、哀れみ深い神は、公平と正義と哀れみで裁いて下さるのです。滅びは滅びですが、来世の滅びは、現世で体験した滅びよりも、はるかに穏やかで、幸せの多い滅びである可能性さえあるのです。

聖書が語っていないことは語ることが出来ない

これ以上のことは、聖書が語っていないのですから語ることはできませんが、あくまでも、神の公正さと哀れみの深さにすがって、そのような希望を持つことが出来ないでしょうか。十字架の上で今まさに死のうとしていた重罪人に、救いをお与えになったイエス様がお裁きになるのです。恵みと哀れみの神にお任せすることですが、この程度は、赦される空想ではないでしょうか。だから筆者は、クリスチャンではなかった人の葬儀も引き受けます。そして神の恵み深さ、公平さ、正しさを語り、それに信頼するようにお勧めしま

す。

それ以上は言うことが出来ません。それでも、「来世はあると思えばある。ないと思えばない」などとあいまいな逃げを打つお坊さんよりは、慰めを語ることが出来ます。キリストを信じなかったのだから、消えない火の中に投げ込まれますなどと、欧米の宣教師のようなことも言わずに済みます。そしてその葬式で、一番悲しんでおられるのは、亡くなった人のために十字架の犠牲さえいとわずに、救いを準備してくださっていた、神様であることをお話しすることもあります。せっかくの素晴らしい救いを、独り子の十字架の死という、大変な痛みと犠牲を払ってまで、準備してくださった神様の憐れみが、無駄にされてしまったのです。

立派な人生を送って、どれほど素晴らしい来世に入れていただいたとしても、それが現世の滅びの延長上にある滅びの命ならば、救われる素晴らしさとは、まったく比較にならないのです。救いは、滅びとは次元が異なる、素晴らしいものなのです。現世の滅びを断ち切った、新しい命の世界なのです。神様はそれぞれの行いによって報われる来世ではなく、それとは別に、最高の幸せの中に生きられる、行いによらない救いを準備してくださっているのです。私たちは自分の行いによってではなく、イエス・キリストの正しい行いに従って報われるのです。彼の義が、私たちの上に着せられるからです。だからこそ私たちは、異邦人である日本人にも、一所懸命にその行いによらない救いの福音を伝えるのです。

旧約聖書の用語が用いられていなくても

日本人には旧約聖書の啓示がなかったのですから、たとえ日本人が、天と地の造り主に似せて造られた、人間としての霊的感覚を発揮して、造り主を感じていたとしても、その感覚を、旧約聖書と同じ言葉で、同じように表現するのは不可能だったと、知らなければなりません。当然日本語で、日本人らしい表現で語ったのです。たとえば、天照大神だったり、太陽だったり、お天道様だったり、親神様だったりしたのです。それを直ちに偶像だと糾弾するのは、一方的すぎるのではないかと思います。

天地の造り主に通じる共通の概念を見出す

私たちは、至高の存在者に対する日本人の曖昧な感覚と表現、天照大神や太陽やお天道様や親神様などという言葉の中に、天地の造り主に通じる概念を見出して、それをきっかけに、天地の造り主を語るべきではないでしょうか。パウロが「知られない神」の概念を手蔓に、天地の創造者である神について語ったようにです。

行いによらない救いについて知らなかった人たち

福音伝道とは、行いによらない救い、信仰による救いがあることを伝えることです。それは、行いによっては絶対に救われることがない、厳粛な事実も伝えることになるでしょう。私たちはその福音を伝える使者なのです。ところが、この福音を信じないで死んでしまった人は、みな地獄に落ちるなどという言い方が、この福音を伝える使者たちによって、頻繁に語られています。今福音を聴いてそれを信じたいと願う人には、それで良いでしょう。しかし、すでに亡くなっているその人の親兄弟、夫や妻、子どもたち、親戚たち、そして友人知人たちはどうなっているのでしょう。永遠に消えることのない火の中に投げ込まれて、苦しみ続けなければならないのでしょうか。それぞれの行いが罪深いのですから、それも運命とあきらめるべきなのでしょうか。そのようなことを考えなければならないことが、異邦人である日本人の救いを、妨げているのです。それとも、救われなかったという意味では滅びたとは言え、恵みと哀れみの神の恵みと哀れみによって、正しく公平に裁かれ、現世の滅びよりはずっとましな滅びの中にいる可能性を、伝えてあげるべきでしょうか

。

福音を聴く機会がなかったまま、裁きの場に出なければならない人の、悪い行いの責任はその人にあります。しかし、福音を聴く機会が与えられなかったことの責任は、その人にはありません。福音宣教の使命を与えられていながら、自分勝手な聖書の解釈によって、福音を伝えることを軽視し、無視し続けてきた、教会の責任ではないでしょうか。もしかすると、この文章をお読みになっている、あなたにも責任があるかもしれませんね。もしもあなたがカトリック教会の信徒ならば、聖書の教えにはない、煉獄を持ち出し、言い逃れをすることが出来るかもしれませんね。ただ、この文章を書いているのは、福音派に属するプロテスタントの人間です。しかも、徹底的に聖書に忠実であろうとするために、西欧のキリスト教はやめた人物ですから、聖書に関係の無い煉獄を持ち出すことはできません。

「星の流れに」

筆者は、戦後の北海道で開拓農家を始めた祖父母に育てられて、幼少期から中学校に上がるまでは、しばしばランプ生活をしていました。ほの暗い小屋に送られてくるラジオの有線放送で、「こんな女にだれがした」という歌を聞いた記憶があります。まだ小学校にも上がる前だった私は、歌の意味も分からずに、ずいぶん暗く悲しそうな歌だなと思っただけですが、妙に心に残ったのです。

これは、昭和二二年に発売された、「星の流れに」という歌で、終戦後の荒廃しきった上野の公園に、たくさんたむろしていた、「ぱんぱん」と呼ばれた売春婦たちに、聞き取り取材をしていた作詞家が、彼女たちの一人に直接聞いた身の上話を、そのまま歌詞にしたのだそうです。空襲で家も財産もすべてを失い、家族ともいき別れになって生死も分からず、何日も食べるものもなく弱り切って、着の身着のまま寒空に凍えていた彼女は、復員兵と見られる男性に優しく声をかけられ、おにぎりを一つもらったのだそうです。あまりにもうれしく涙が流れましたが、「ありがとうございます」というのがやっとで、何のお返しもできないことに思い余って、とうとう自分の体を差し出してしまったということでした。

当時の日本の女性の多くは、今の女性たちとは違って、自立する職も持たないのが普通でした。一人ぼっちになった戦後の焼け跡の中では、生きていくことさえ難しかったのです。また当時の女性は貞操観も強かったために、かえって、一度男に身を任せてしまうと、そのまま、引きずられてしまうことが多かったのです。彼女もそれがきっかけとなって、男に身を売っては食べ物を手に入れる、戦後の売春婦の一人になってしまったのです。

イエス様は、売春婦にも優しいまなざしを向け、彼女たちが立ち直ることが出来るように、励まし、助けておられます。イエス様に助けられ、救いを手にしたイスラエルの売春婦は本当に幸いです。でも救い主のことも、天地の創造者のことも知らなかった、この日本の売春婦には、イエス様の憐れみは届かないのでしょうか。彼女にも責任はあったことでしょう。たしかに、同じような窮地に陥りながら、身を持ち崩すことがなかった女性もいたことでしょう。しかし、運不運、意思の強さや弱さを考慮に入れたとしても、イエス様に出会った売春婦は、事実、救われたのです。福音を聴くことが出来た売春婦には、たとえわずかでも、福音を信じる機会が与えられたのです。

でも、この戦後の日本の売春婦には、異邦人であるがために、救い主のことを知らず、福音も聞かされていなかったのです。福音を聴くことが出来なかったのは、彼女の罪ではありません。イエス様に命じられた世界宣教の使命をおろそかにした、教会の罪です。その罪のために、彼女は救いを得ることが出来なかったのです。

この歌を作詞した人は、それから二〇年以上も経ったとき、彼女のことを思い出し、たとえ住所氏名は分からなくても、せめて、生きているのかどうかを知りたいと、新聞広告を出したそうです。でも、とうとう何の応えもないままに終わったと、新聞のコラムに書いていました。この歌は結構はやって、多くの歌手たちがカバーして歌っています。五〇年以上も経ってから、めったに歌謡曲を聴くこともない筆者は、改めてこの歌を聴き直しました。この歌を唄っていた大勢の歌手の中、藤圭子という薄幸の若い女の歌うのが、一

番こころに響くように感じたものです。

世界中には、この「ぱんぱん」のように、惨めな生き方をしなければならなかった人が、たくさんたくさんいます。もっともっとひどい目に遭った人たちも少なくありません。私たちの天の父なる神様は、このような人たちを、十把一絡げにして、ゲヘナの火へ投げ込まれるお方でしょうか。私たちは、神様は結局最後にはすべての人を救ってくださると主張する、ユニバーサリズムを退けます。聖書の全体的な教えに反するからです。でも、すべての罪人を、キリストを信じなかったというだけで、地獄の火に投げ込む神も信じることが出来ません。それも聖書の教えに反するのです。

完